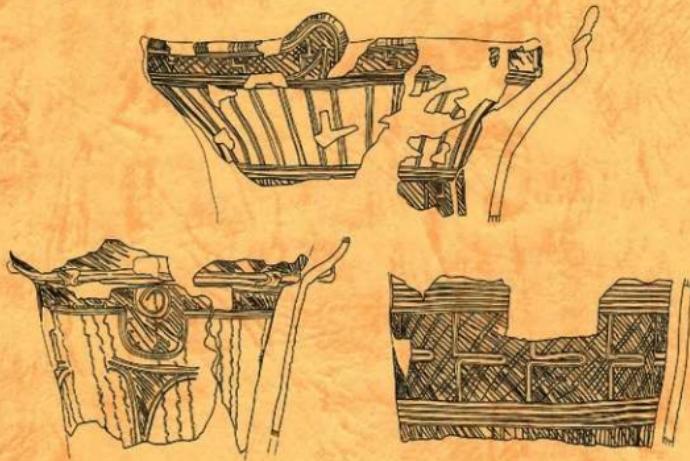


山梨県東八代郡御坂町  
**桂野遺跡** (第4次調査)  
**原山遺跡**

国道137号(上黒駒バイパス)建設に伴う発掘調査報告書



2002.3

山梨県教育委員会  
山梨県土木部

山梨県東八代郡御坂町

**桂野遺跡** (第4次調査)

**原山遺跡**

国道137号(上黒駒バイパス)建設に伴う発掘調査報告書

2002. 3

山梨県教育委員会  
山梨県土木部

## 序

本書は東八代郡御坂町に所在する桂野遺跡、原山遺跡の国道137号線上黒駒バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書であります。桂野遺跡は学史的にも著名な遺跡で、いくつかの地点が発掘調査され、本センターでも1996年から1998年にかけて3次にわたって発掘調査してまいりました。本報告はその4次目の調査であり、上黒駒バイパスに伴う調査としては最後の報告となります。また、原山遺跡は工事区域の最南端にあり、1999年の試掘調査ではじめて確認された遺跡です。

桂野遺跡第4次調査では3000m<sup>2</sup>を調査しましたが、縄文時代前期の住居跡1軒、土坑1基、中期初頭の住居跡3軒、土坑37基、集石20基、縄文時代後期の住居跡1軒、土坑3基を調査しました。特に、中期初頭の五領ヶ台式土器が多く出土し、その中でも初期の土器群で、山梨県内では指標的な資料を得ることができました。また、小型の搔器が多量に確認されており、使用痕分析の結果、皮革加工に用いられたことが推定されました。五領ヶ台式期は「縄文中期の小海退」の時期で、一時的な寒冷期であったことが知られています。寒冷な時期に適応するために衣服などに使用する皮革加工のための道具が必要とされたと担当者は分析しています。

原山遺跡は1000m<sup>2</sup>ほどの発掘調査ですが、縄文時代後期を中心に、早期の撚糸文土器、押型文土器、条痕文土器などが確認されました。後期の土器は甲府盆地周辺では希少な加曾利B式土器群で、これも貴重な資料となりました。胎土分析を実施しましたが、ほとんどが在地の土器であることが判明し、当時の土器製作や集団の移動にかかる良好なデータを得ることができました。

今回の発掘の成果が縄文時代の研究の進展とその保存のための一助となれば幸甚です。

最後に発掘調査から報告書の刊行までの過程で、ご助力いただいた関係機関各位、ならびに発掘調査や整理作業に参加いただいた方々に衷心より御礼申し上げます。

2002年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

## 例　　言

- 1 本書は、山梨県東八代郡御坂町上黒駒に所在する桂野（かつらの）遺跡の第4次調査と、同町十郎に所在する原山（はらやま）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は土木部の依頼を受けて山梨県教育委員会が実施した、国道137号上黒駒バイパスの建設工事に伴う発掘調査である。
- 3 発掘調査および整理作業、報告書刊行は、山梨県埋蔵文化財センターが行なった。
- 4 本書の執筆は、第1編第1～3・5章、第2編第1～3・5章を保坂康夫、第1編第4章第1節を山梨文化財研究所河西学氏、第4章第2節をパリノ・サーヴェイ株式会社、第4章第3節を株式会社アルカ池谷勝典氏、第2編第4章第1節を河西学氏。編集は保坂が行なった。なお、第1編第3章第3節5、土器の執筆にあたっては、小野正文・今福利恵の各氏、第2編第3章第4節については新津健・三田村美彦・櫛原功一の各氏助言を得て行った。
- 5 本書にかかる出土品および図面、写真は、山梨県埋蔵文化財センターが保管している。
- 6 発掘調査から報告書刊行までに、次の方々からご指導、ご助力いただいた。記して衷心より御礼申し上げる次第である。  
望月和幸、松本京子、櫛原功一、角張淳一、太田公彦、笛吹川水系土地改良区

(順不同・敬称略)

# 本文目次

序  
例言  
目次  
挿図目次  
表目次

## 第1編 桂野遺跡第4次調査

### 第1章 発掘調査と経過

第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 調査組織	1
第3節 発掘調査の方法	1

### 第2章 遺跡の概要と立地

第1節 遺跡の概要	1
第2節 遺跡の立地	2
第3節 基本土層	4
第4節 周辺の遺跡	6

### 第3章 遺構と遺物

第1節 縄文時代早期の遺物	6
第2節 縄文時代前期の遺構と遺物	6
第3節 縄文時代中期初頭の遺構と遺物	11
1. 住居跡	11
2. 土坑	15
3. 集石	23
4. 埋設土器、単独出土土器	33
5. 土器	33
6. 土製品	45
7. 石器	45
8. 碑	64
第4節 縄文時代中期中葉～後葉の遺物	69
第5節 縄文時代後期の遺構と遺物	73
1. 住居跡	73
2. 土坑	73
3. 土器	73

### 第4章 自然科学分析

第1節 桂野遺跡の堆積物とテフラ	75
------------------	----

第2節 桂野遺跡の放射性炭素年代測定と種子同定	78
第3節 桂野遺跡第4次調査・小形剥片石器の使用痕分析	83
第5章まとめ	88

## 第2編 原山遺跡

### 第1章 発掘調査の経緯と経過

第1節 発掘調査の経緯	95
第2節 調査組織	95
第3節 調査の方法と経過	96

### 第2章 遺跡の概要と立地

第1節 遺跡の概要	96
第2節 基本土層	97
第3節 周辺の地形と遺跡	98

### 第3章 出土遺物

第1節 縄文時代早期の土器	98
第2節 縄文時代前期の土器	98
第3節 縄文時代中期の土器	103
第4節 縄文時代後期の土器	103
第5節 平安時代の土器	104
第6節 縄文時代の石器	104

### 第4章 自然科学分析

第1節 御坂町原山遺跡出土縄文後期加曾利B式土器の胎土分析	105
-------------------------------	-----

第5章まとめ	112
--------	-----

## 挿図目次

第1図	桂野遺跡（第4次調査）遺構分布図	2
第2図	桂野遺跡基本土層図	3
第3図	遺跡周辺の地形	4
第4図	桂野遺跡第1～3次調査区と第4次調査区	4
第5図	桂野遺跡と原山遺跡および周辺の遺跡	5
第6図	縄文時代早・前期の土器	7
第7図	縄文時代前期の遺構	8
第8図	縄文時代前期の土器	9
第9図	1号住居跡	10
第10図	1号住居跡遺物出土状況	11
第11図	2号住居跡	12
第12図	2号住居跡遺物出土状況	13
第13図	3号住居跡	14
第14図	3号住居跡遺物出土状況	15
第15図	土坑（1）（1・2・5・7・8号土坑）	16
第16図	土坑（2）（10・12・14・15・17号土坑）	17
第17図	土坑（3）（16・18～21号土坑）	18
第18図	土坑（4）（22～26・28号土坑）	19
第19図	土坑（5）（29・31・32・34・35号土坑）	20
第20図	土坑（6）（27・30・36・37号土坑）	21
第21図	土坑（7）（38～43号土坑）	22
第22図	集石（1）（1号集石－1－）	24
第23図	集石（2）（1号集石－2－、集石群A）	25
第24図	集石（3）（2号集石、集石群B）	26
第25図	集石（4）（3～5号集石）	27
第26図	集石（5）（6・7号集石）	28
第27図	集石（6）（8～10号集石）	29
第28図	集石（7）（11・12号集石、埋設土器）	30
第29図	集石（8）（13～15・18・19号集石）	31
第30図	集石（9）（16・17・20号集石）	32
第31図	礫分散分布域1・2	34
第32図	礫分散分布域3	35
第33図	単独出土土器	36
第34図	出土土器（1）（1住炉址他）	36
第35図	出土土器（2）（1住）	37
第36図	出土土器（3）（2住炉址他）	38
第37図	出土土器（4）（2住）	39
第38図	出土土器（5）（3住）	40
第39図	出土土器（6）（土坑1～11土）	41
第40図	出土土器（7）（12土）	42
第41図	出土土器（8）（15～24土）	43
第42図	出土土器（9）（25～39土）	44
第43図	出土土器（10）（40～43土・12土）	45
第44図	出土土器（11）（1～12集）	46
第45図	出土土器（12）（12～18集）	47
第46図	出土土器（13）（礫分散分布域、遺構外）	48
第47図	出土土製品	50
第48図	出土土器（1）（石錐、削器、二次加工剥片）	51
第49図	出土土器（2）（小型搔器）	52
第50図	出土土器（3）（小型搔器）	53
第51図	出土土器（4）（石錐）	54
第52図	出土土器（5）（楔形石器、石核）	55
第53図	出土石器（6）（黒曜石原石）	56
第54図	出土石器（7）（石匙、削器、石槍、磨製石斧）	57
第55図	出土石器（8）（打製石斧）	58
第56図	出土石器（9）（粗製石匙、横刃形石器、大型削器）	59
第57図	出土石器（10）（敲石、砸器、小型磨製石斧、石核）	60
第58図	出土石器（11）（磨製石斧、砾器、敲石、スリ石）	61
第59図	出土石器（12）（スリ石）	62
第60図	出土石器（13）（スリ石、クボミ石）	63
第61図	出土石器（14）（敲石、砾石皿）	64
第62図	出土石器（15）（砾石皿）	65
第63図	出土石器（16）（砾石皿）	66
第64図	出土石器（17）（砾石皿）	67
第65図	出土石器（18）（砾石皿）	68
第66図	出土石器（19）（砾石皿）	69
第67図	縄文時代中期中～末、後期の土器	71
第68図	縄文時代中期中～末の土製品	72
第69図	5号住居跡	73
第70図	縄文時代後期の土坑	74
第71図	火山ガラス含有率	76
第72図	炭化物・種実遺体	82
第73図	使用痕観察石器と観察位置	86
第74図	使用痕写真	87
第75図	桂野遺跡各遺構出土土器の長さ構成状況相対度数分布グラフ	92
第76図	桂野遺跡各遺構出土土器の完形度構成状況相対度数分布グラフ	93
第77図	桂野遺跡各遺構出土土器の重量構成状況相対度数分布グラフ	94
第78図	原山遺跡周辺の地形	95
第79図	原山遺跡調査地区と遺物分布図	96
第80図	原山遺跡調査区内の地形	97
第81図	原山遺跡の土層と調査区配置図	98
第82図	出土土器（1）	99
第83図	出土土器（2）	100
第84図	出土土器（3）	101
第85図	出土土器（4）	102
第86図	出土土器（5）	103
第87図	肉眼観察による土器の胎土分類	105
第88図	分析資料実測図	107
第89図	土器断面X線透過写真	107
第90図	土器胎土の岩石鉱物組成	108
第91図	岩石組成折れ線グラフ	109
第92図	土器のクラスター分析樹形図	110

## 表目次

第1表	石器組成表	49
第2表	礫属性表	70
第3表	火山ガラス屈折率測定値	75
第4表	火山ガラス計測粒数	75
第5表	放射性炭素年代測定結果	78
第6表	種実同定結果	80
第7表	桂野4次調査・使用痕分析資料	86
第8表	土器胎土中の岩石鉱物	106
第9表	土器胎土中の岩石鉱物	107
第10表	折れ線グラフによる土器分類	109

# 第1編 桂野遺跡（第4次調査）

## 第1章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査に至る経過

国道137号上黒駒バイパスに伴う発掘調査は平成8年度から10年度まで3次にわたって行われ、縄文時代中期初頭などの住居跡26軒が確認された。今回は4次目にあたる。今回調査した地点は、国道と第2農免道路が交差する交差点部分である。なお、第2農免道路については御坂町教育委員会が発掘調査している。平成11年12月8日から10日にかけて行なった試掘調査で、住居跡などを確認したことから土木部との協議で発掘調査を実施することとなった。発掘調査は用地買収の関係で平成12年9月13日から開始し、12月12日に終了した。

### 第2節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 保坂康夫、楠間美季江（基礎的整理：深沢容子、本格整理：田口明子）

調査作業員

田中富江、田中昌子、望月哲夫、田辺秋太郎、村松おとめ、近藤勇、鈴木初音、大塚昭六、齊藤茂治、高野たかよ、萩原澄子、小沢麗子、水野英子、小嶋孝、芹沢由幸、荒川公子、荒川奈津江、矢崎綾、藤巻ひさ江、藤巻公恵、笠井幸恵、村松まさみ、堀内一秀

整理作業員

荒川公子、荒川奈津江、矢崎綾、藤巻ひさ江、藤巻公恵、渡辺旭光、三枝千恵美、田中真理、猪股順子、土橋園子、志村君子

### 第3節 発掘調査の方法

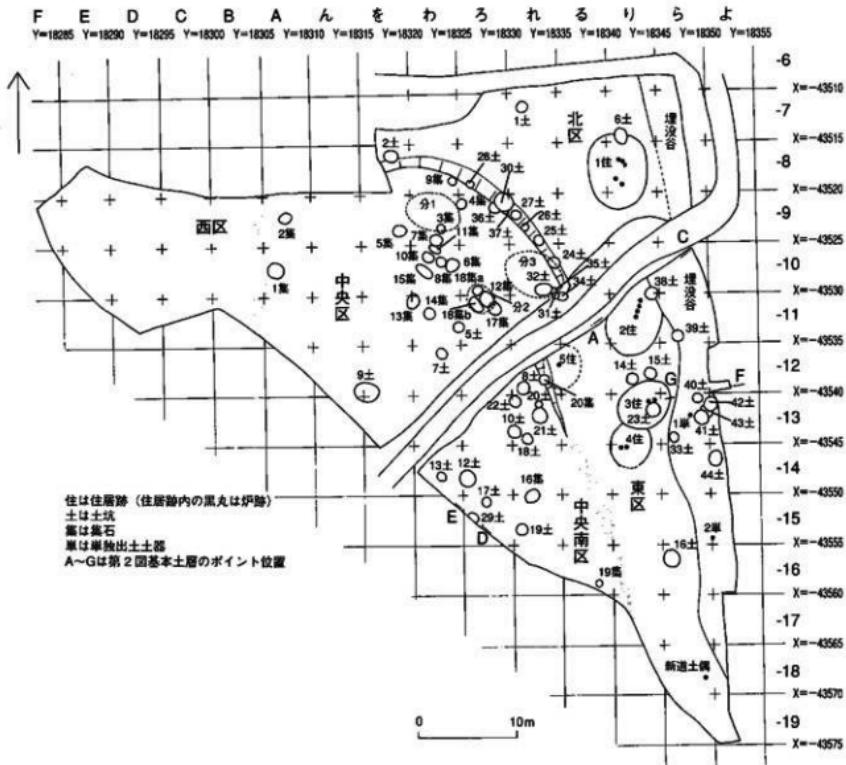
発掘調査に先立ち、表土をパケット容量4.5のバックホーで除去し、西側からジョレンがけによる遺構確認作業を行なった。国土座標のX Y軸にそって10mピッチで杭を設定した。調査面積は3,000m<sup>2</sup>。住居跡・土坑内出土の土器・礫については手のひら以上の大きさ（5cm角以上）のものの位置を記録した。石器については大小にかかわらず位置を記録した。集石・礫分散分布域の構成様については全点記録化した。これら以外の遺物については、地区ごとにまとめて取り上げた。

住居跡の炉址については、炉内の覆土や焼土を持ち帰り、水洗選別して炭化種子や微細遺物の回収作業を実施した。ふるいは1mmメッシュを用いた。炭化種子についてはパリノ・サーベイに委託して同定作業を行なった。また、炉内の炭化材について炭素14年代測定を実施した。

## 第2章 遺跡の概要と立地

### 第1節 遺跡の概要

本遺跡で確認できた遺構は、縄文時代前期後半の諸磯b式期の住居跡が1軒、土坑が1基、縄文時代中期初頭の五領ヶ台式期の住居跡が3軒、土坑が37基、集石が20基、礫分散分布域が3ヶ所、縄文時代後期の住居跡が1軒、土坑が3基である（第1図）。大半の遺構は五領ヶ台I式期で五領ヶ台式の古い段階の土器群を伴う遺構群が遺跡の主体をなしている。遺物は縄文時代早期末、前期の諸磯b・c式、十三菩提式および並行期の関西系土器、中期初頭五領

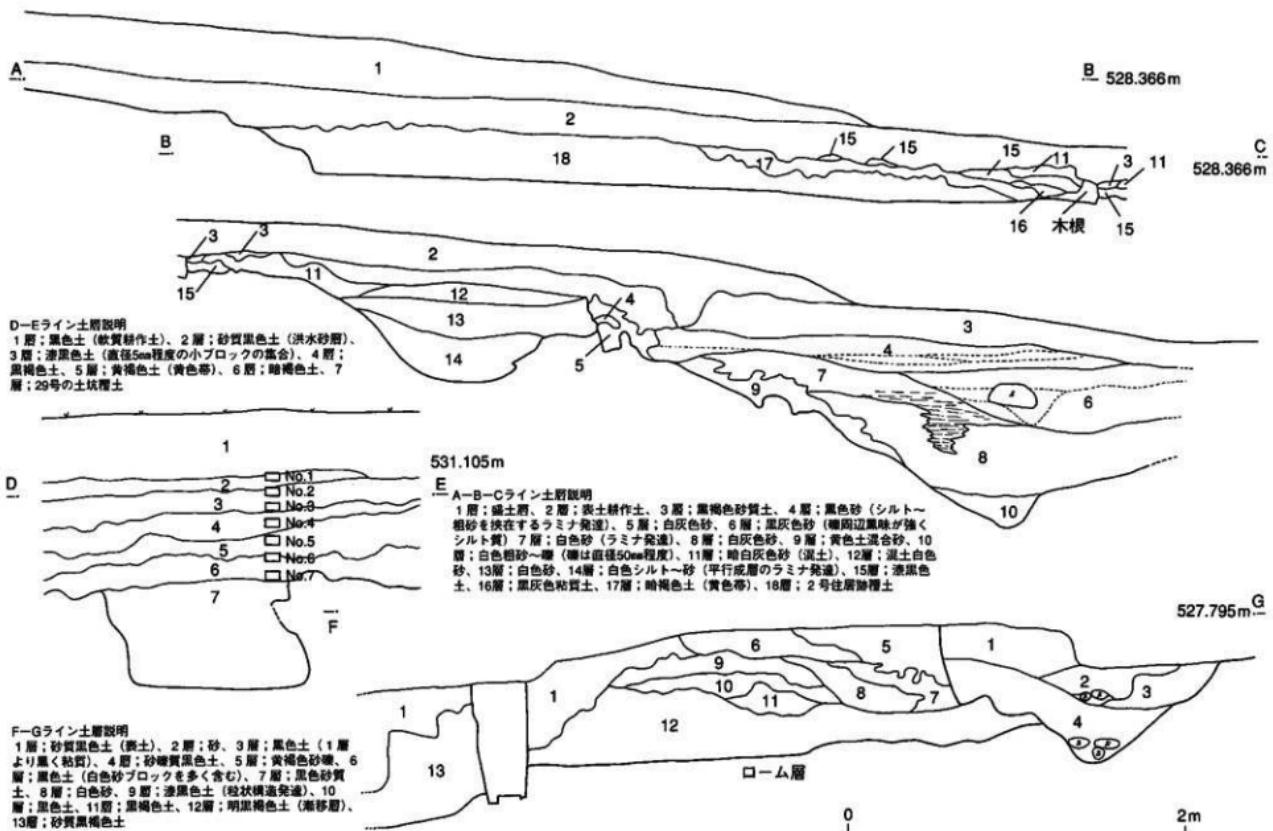


第1図 桂野遺跡（第4次調査）遺構分布図（1/500）

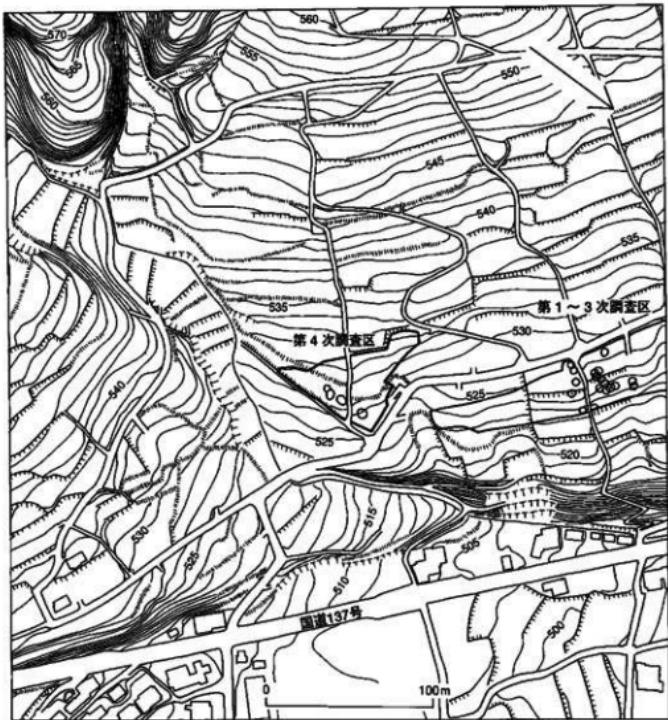
ケ台Ⅰ・Ⅱ式、貉沢式、新道式、藤内式、井戸尻式、曾利式、後期の壠ノ内Ⅱ式などの土器が見られる。土製品では五領ケ台Ⅰ式に伴う耳飾、块状耳飾りがあり、特に無孔臼形の耳飾としては最古に位置付けられる（小野1989）。土偶は五領ケ台式のものは足が1点のみで、他に出土した土偶は新道式期の壺を抱える形態が1点、曾利式期の頭と腕が1点ずつみられた。石器は砾石皿が各住居跡や中央南区から、スリ石が土坑や集石から出土した。打製石斧は土坑出土が多い。本遺跡の特長として黒曜石製の小型搔器が注目される。先細りの形態が多いが株式会社アルカに委託した使用痕分析の結果、皮革加工に用いられたことが推定された。

## 第2節 遺跡の立地

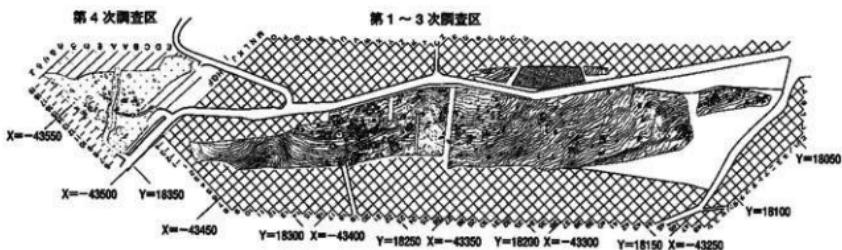
遺跡周辺の地形をみると（第5図）、御坂山塊から流れ出る金川が開削した河岸段丘の肩部分に位置する。遺跡の乗る地形面は、大塙山の東側に形成された小扇状地であり、北側に傾斜している。110/1000の勾配であり、集落が立地するにはかなり急な印象を受ける。遺跡の東縁部には河川砂を伴う埋没小河川がみられ遺構を削っている（第1図）。さらに小河川と遺跡との間に谷底平坦面がみられる（第3図）が、試掘の結果、礫を多量に含むローム質土層で、河川の營力で削られた面であり、遺物や遺構は確認できなかった。住居跡は遺跡の東側を流れる小河川を望むように、小河川に平行して直線的に配列し、しかも河床にかなり近い低い位置にある。集石群は住居跡周辺に若干はある



第2図 桂野遺跡基本土層図 (1/30、D-EラインのNo.1～7は、テフラ土壤サンプル番号:P77)



第3図 遺跡周辺の地形（1/3,000、○印は住居跡）

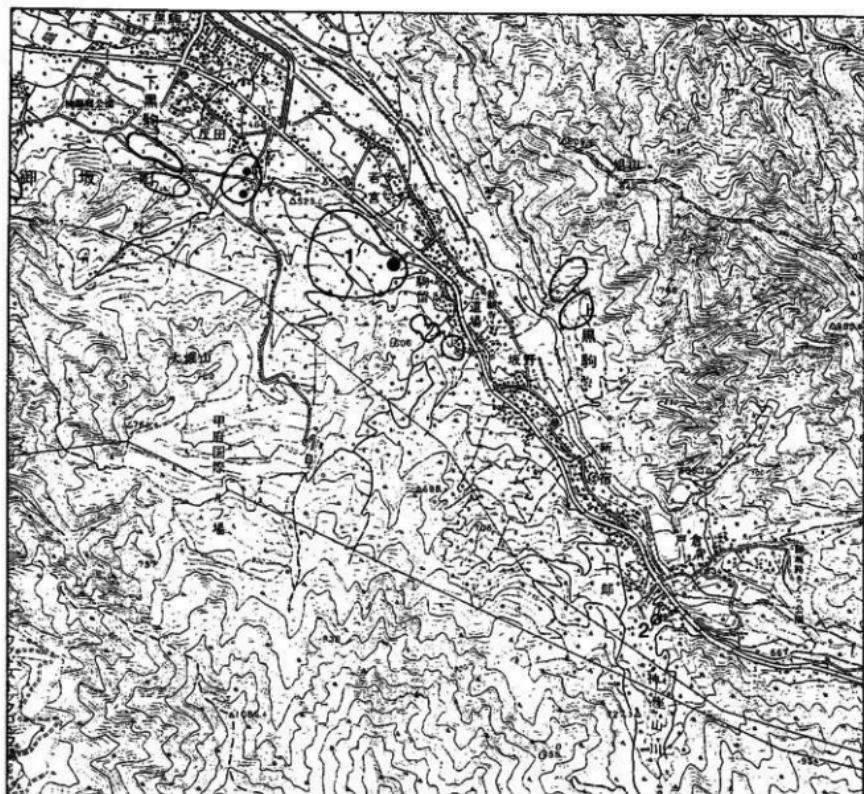


第4図 桂野遺跡第1～3次調査区と第4次調査区（1/3,000）

るもの、ほとんどは住居跡群より高い位置に団塊状に分布する。土坑群はあたかも住居跡群と集石群の間に割って入るように東縁部から南側に分布し、南側では北側の集石群と対峙するように団塊状に分布する。

### 第3節 基本土層

中央南区は土層の残りが特に良好で、南壁では基盤のローム層までに1.1mもの厚さの土層が確認できた。第2図



第5図 桂野遺跡と原山遺跡および周辺の遺跡（1/25,000）  
(1が桂野遺跡、大黒丸が第4次調査地点、2が原山遺跡)

のD-Eラインがその部分にあたり、本遺跡の基本土層である。この断面は五領ケ台式期の土坑（7層）を覆う土層が見られる。6層までがいわゆる黒色土であるが、注目されるのは中央の5層で黄褐色の土層である。今回、山梨文化財研究所に委託してテフラ分析を試みたところ、直上の4層中に天城カワゴ平軽石（KgP）のピークを確認した（第4章第1節参照）。この付近におおむね3千年前の年代を与え得る。その下位に黄色帯が見られる状況は県内各地で確認されつつある。場所によってはかなり黄色味が強く、ローム層と誤認される場合があるので注意を要する。

他の地区では、中央区北側の集石や土坑群がある地域で比較的黒色土の残りがよかつた以外は、ローム面まで耕作で削られている場合が多かった。A-B-Cラインでは2号住居跡が削られその上に暗褐色土（17層）と漆黒色土（15層）が乗っており、両者はそれぞれD-E断面の5層、3層にあたると思われる所以、すでに縄文時代から自然の削り込みを受けていたと解釈できる。

漆黒色土を覆って砂質の土層が発達し、溝の覆土を構成している。溝を覆う3層中から16世紀頃と思われるかわらけなどが出土しており、中世末までに溝が砂で埋積されていたと理解できる。この砂質の土層はD-E断面の2層にも見られ、河床が現在よりも高く洪水時の氾濫で砂が高所に堆積したか、人工的な水路に流れ込んだ洪水砂が堆積したと考えられる。

F-G断面は東区の東端ラインの中央部の断面で、9~12層は漆黒色土以下の基本土層を残している。砂や砂質土の堆積を伴う河川の營力で周囲が削剥されている。

#### 第4節 周辺の遺跡

桂野遺跡は1953年（昭和28）の農道工事で発見され、注目された。1975年（昭和50）に甲斐丘陵考古学研究会が学術発掘を行い、縄文時代集落の存在を確認した。1997~1999年（平成9~11）に農道工事に伴い御坂町教育委員会が発掘調査を実施した。これらの調査では縄文時代中期後半を中心に遺構や遺物が出土した。1996~2000年（平成8~12）の埋蔵文化財センターの調査では、縄文時代中期初頭を中心に遺構、遺物が確認されており、桂野遺跡の地点によって構成時期の違いがあることが確認された。

なお、周辺には縄文時代遺跡（第5図）はもちろん、古墳時代後期の古墳が分布している（第5図小黒丸）。また、古代の官道である御坂道が桂野遺跡の地形面より一段低い河岸段丘面を通っている。

### 第3章 遺構と遺物

#### 第1節 縄文時代早期の遺物（第6図1~13）

早期末の条痕文系土器が確認できた。1は口唇部の刻み、口縁部直下に横向沈線、斜方向の浅い押引き沈線が見られ、下吉井式と思われる。2は絡状帶圧痕文土器。3は東海系の壇屋式と思われる。4~13は条痕文土器。4~5以外は纖維を含む。なお、遺構は検出されなかった。

#### 第2節 縄文時代前期の遺構と遺物

諸磯b式期の住居跡1軒と土坑1基を確認した。

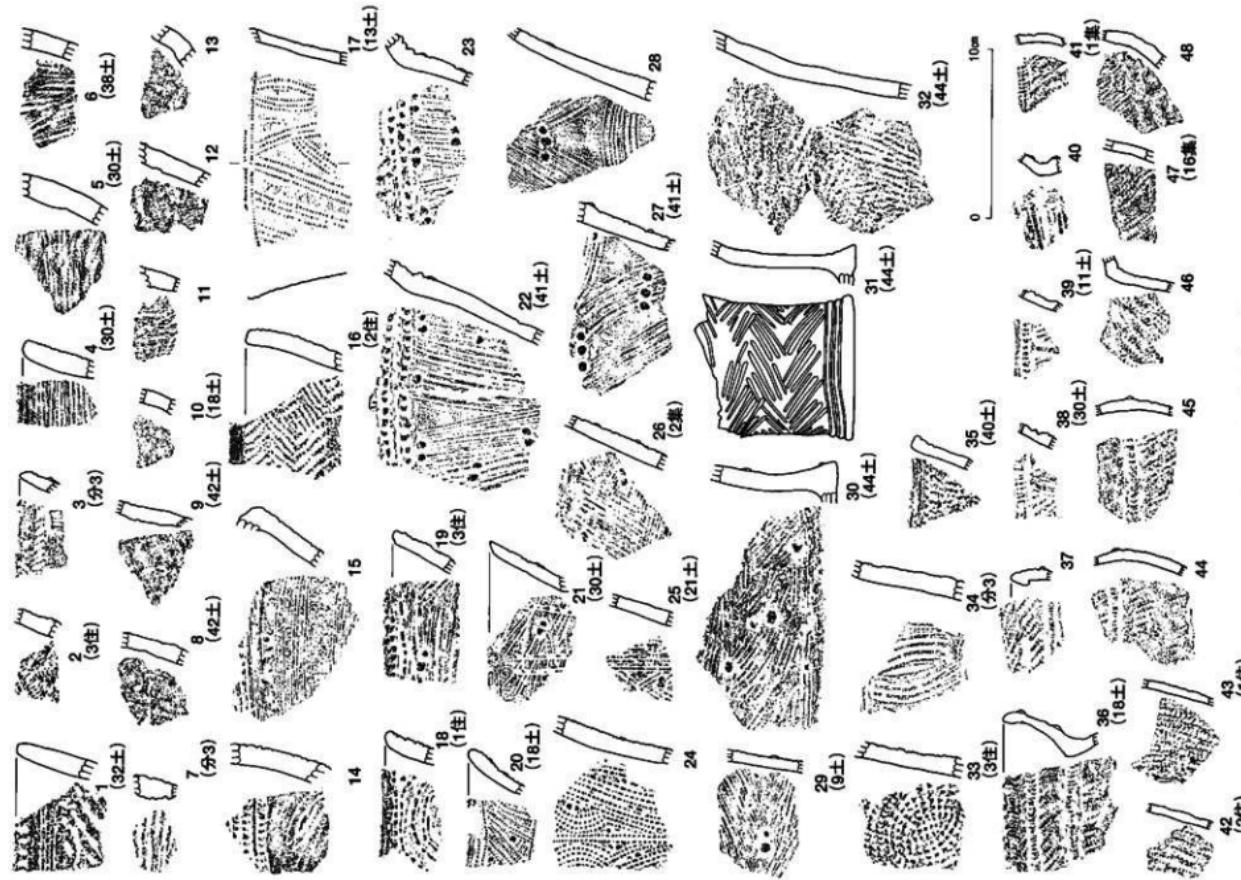
4号住居跡（第7図） 東区中央のりー12~13グリッドに位置する。3号住居跡に北側を若干切られ、南側を風倒木痕で失っている。直径4.2mの円形プランと思われる。残存最大深度が20cmと浅い。中央西よりに2基の炉址がある。直径30cm弱、深さ5cm程度。1号炉址の焼土が明瞭で、2号炉址は覆土に焼土粒子を含む。深さ40cm以上のピットがP1~4、40cm未満30cm以上がP5~8、30cm未満20cm以上がP9~15。それ以外のピットは10cm未満の浅いもの。おそらく30cm以上の深さが主柱穴となり、5本柱の構造であった可能性がある。

4号住居跡出土遺物（第8図） 1は口縁部が波状で強く内傾する。無地の上に刻みのある浮線文を幾重にも施している。表面が白褐色を呈する。2は縄文地文の浅鉢。3~4~6~7は縄文地文に刻みのある浮線文を施したもので、同一個体。5は有孔土器で脣部に黒漆で方形の区画を塗り潰し、その上に赤漆で縦線文様を描いた彩文土器である。胴部下半部に縄文が施されている。これらは諸磯b式の土器群であり、住居跡床面からの出土でこの住居跡の所属時期を示すものである。8~10~12は口縁部に押捺浮線文を施し、矢羽根状の集合沈線を地文に対をなす貼付文を施している、諸磯c式土器である。13は十三菩提式土器、14~19は五領ヶ台II式土器で、いずれも覆土上層か風倒木痕内から出土している。石器はスリ石1点（第59図6）と礫石皿が3点出土している（第64図1~3）。

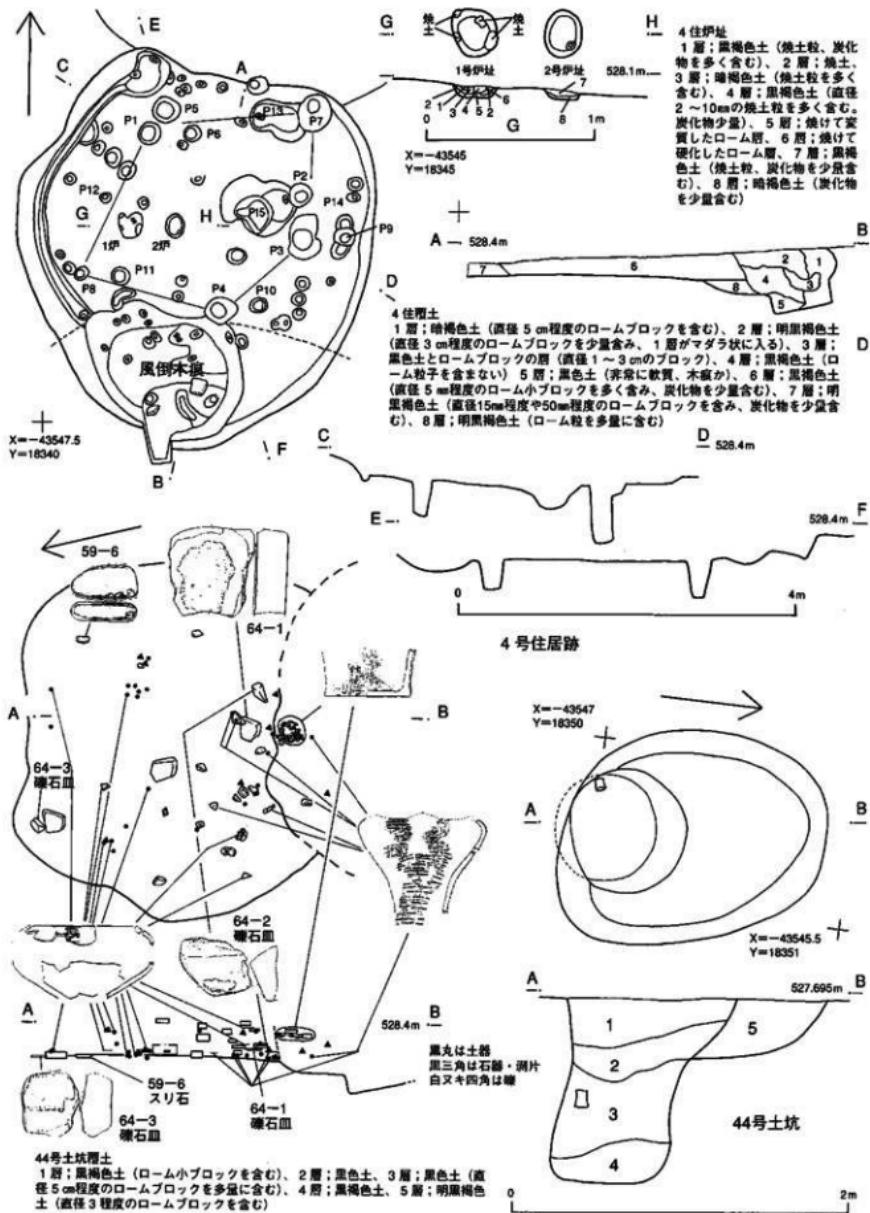
44号土坑（第7図） 東区中央部のよー14グリッドに位置する。南北1.5m、東西1.25m、深さ35cmの長楕円の土坑を、直径70cm、深さ1.1mの深い土坑が切り込んでいる。後者の中位から第6図31が出土した。

44号土坑出土土器（第6図30~32） 30は矢羽根状の集合沈線を地文に粘土粒の貼付文を施した底部、31は矢羽根状の集合沈線の小形土器底部、32は縄文のみである。いずれも諸磯c式段階。

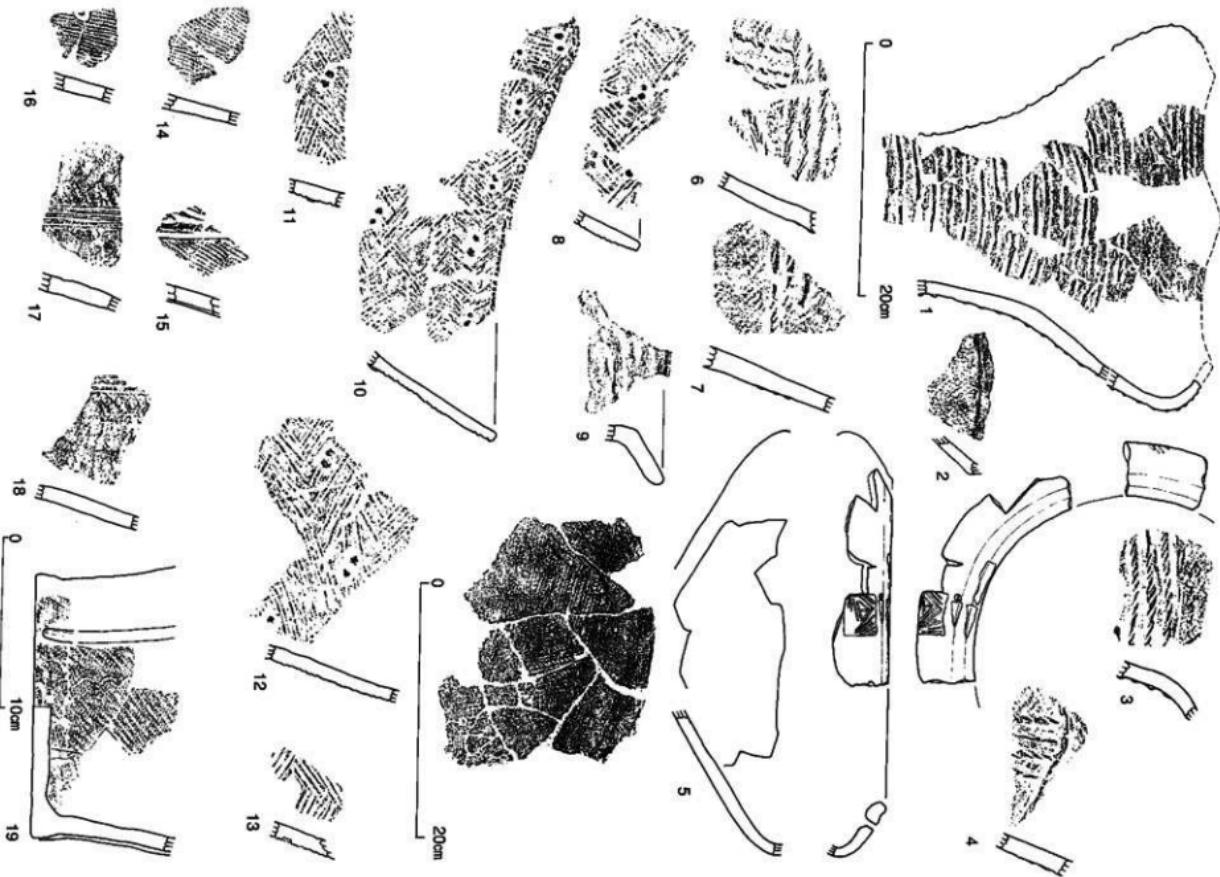
その他の縄文前期土器（第6図14~29、33~48） 14~15は諸磯b式段階、16は羽状縄文で諸磯b式に伴うと思われる。17~35が結節浮線文、結節沈線文、貼付文などを施した諸磯c式の土器群。36~48が十三菩提式並行の関西系土器、大歳山式土器群である。これらは、遺構覆土に混在したり遺構外出土品である。



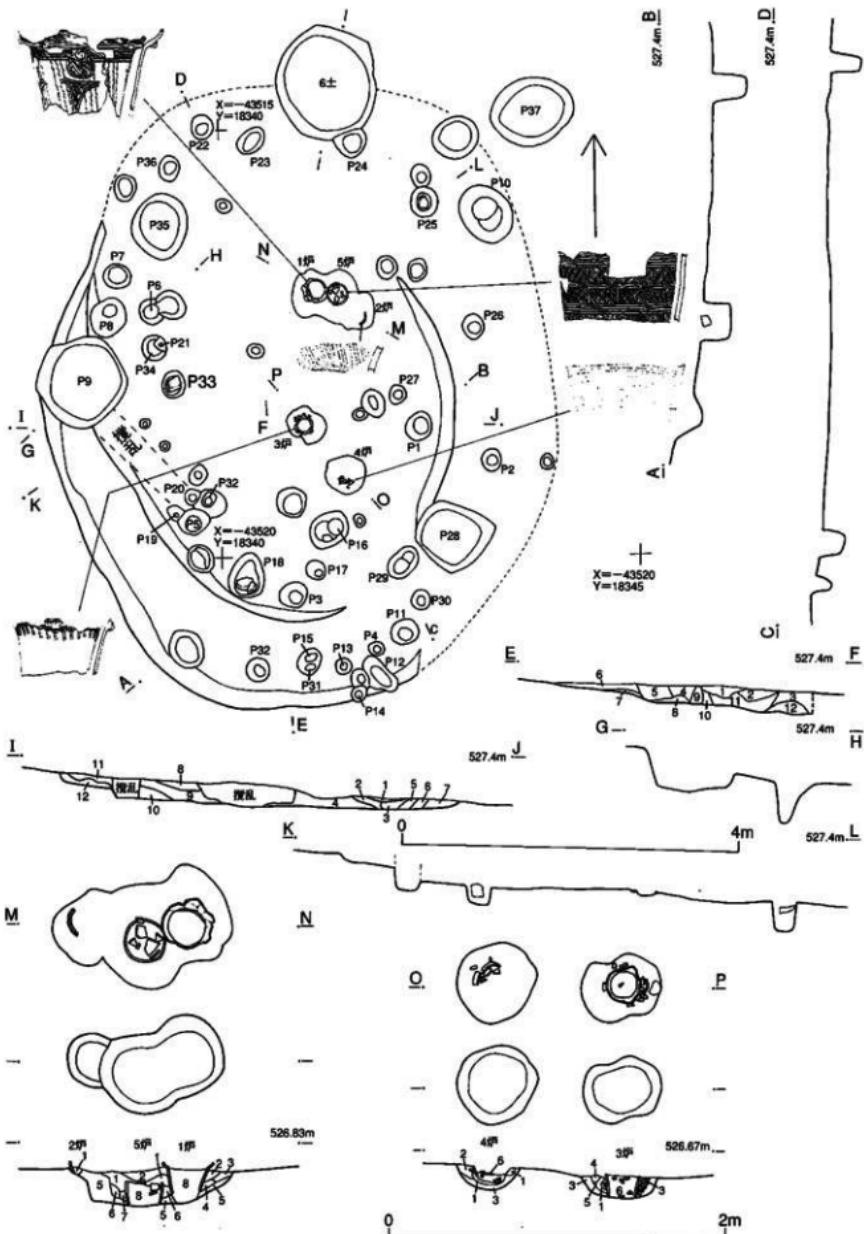
第6図 梶文時代早・前期の土器（1/3）



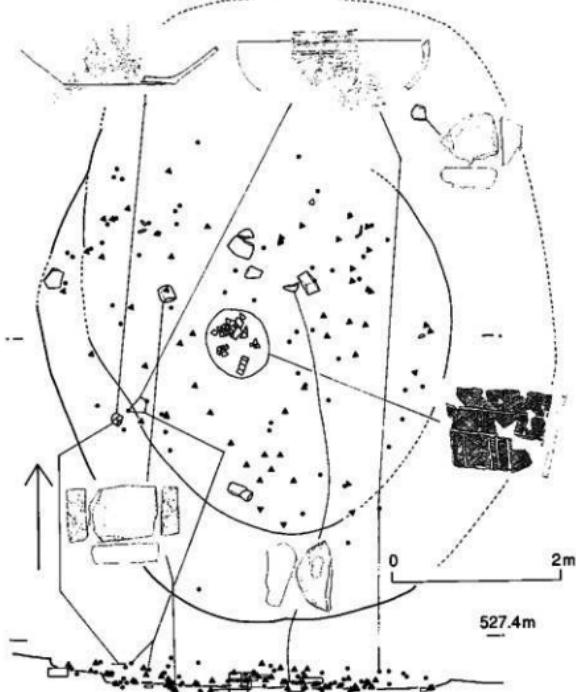
第7図 繩文時代前期の遺構 (4号住居跡 1/60, 炉址 1/30, 44号土坑 1/30)



第8図 桶文時代前期の土器 (1/3, 4号住居跡, 1・5は1/4)



第9図 1号住居跡 (1/60, 炉址 1/30)



第10図 1号住居跡遺物出土状況 (1/60)

### 第3節 縄文時代中期初頭の造構と遺物

#### 1. 住居跡

1号住居跡（第9・10図） 北区のりー8・ー9グリッドに位置する。壁が確認されたのは西から南部分で、他是耕作で消失している。ピットの分布範囲からプランを推定すると、長さが南北7.4m、東西6mの長楕円形である。内側に10cmほどの段があり東西4m、南北4mの北に開いたU字状のプランを呈する。埋甕炉を5基確認した。1・2・5号炉址は住居跡北側中央にあり（北群）、北西—南東方向に直列する。5号は1号より古く、2号は破片のみ残存で5号構築時に壊されたと思われ、2号→5号→1号の順に構築されたと思われる。3・4号炉址は住居跡南側中央にあり（南群）、北北西—南東方向に約80cm（心々）の距離をおいて並ぶ。南群は床面精査中に床面下より出土しており、北群より古いと考えられる。40cmより深いピットはP1~9、30cm以上のピットがP10~23、20cm以上のピットがP24~37で、他のピットは10cm未満の浅いもの。深さ30cm以上のピットで主柱穴を考えると、P3・16~18群が北群炉址に、P4・11~15群が南群炉址に伴う柱穴群と考えられ、南側が規模縮小した立て替えを想定可能である。なお、P18・25・33には大型礫が埋納され、家屋魔絶祭祀の可能性がある。

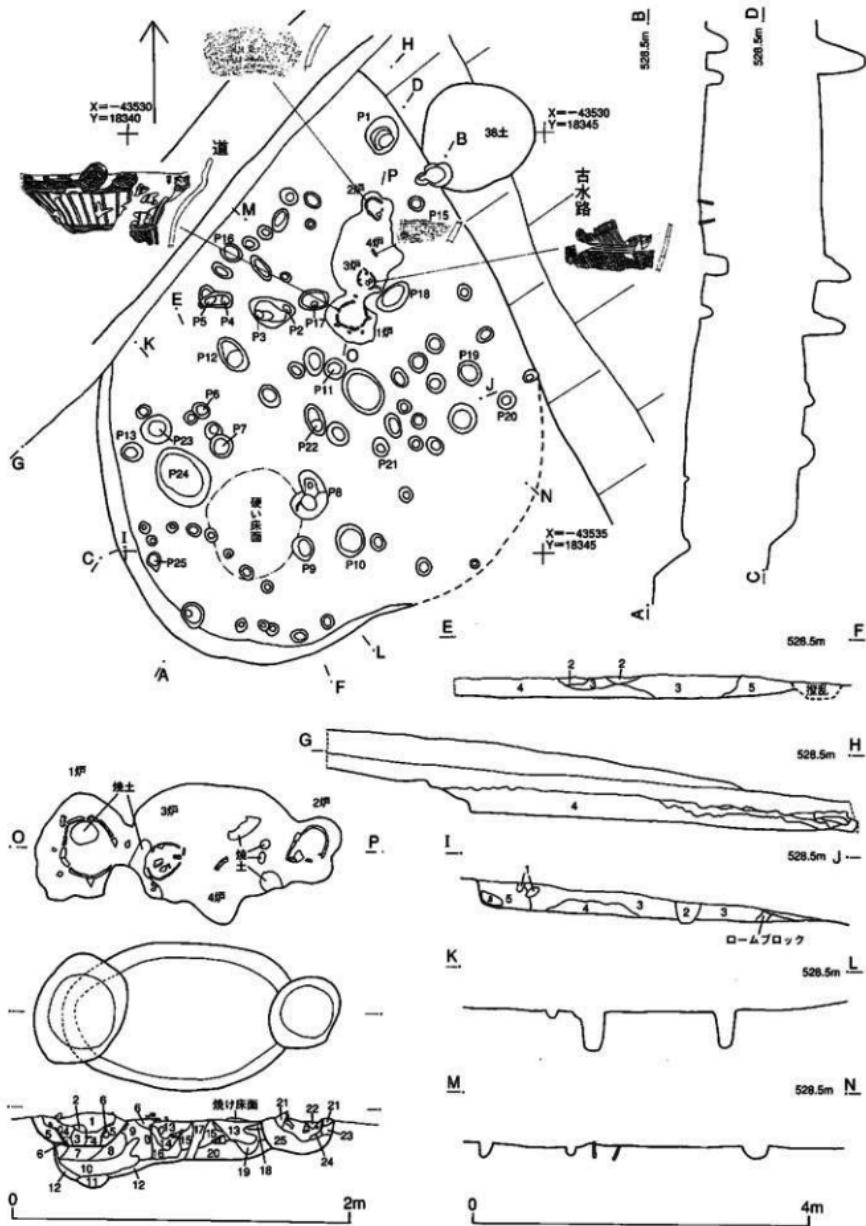
2号住居跡（第11・12図） 東区北端のりー11グリッドに位置する。北西部を道に北東部を水路で壊されており、壁は南西部のみに残存する。基本土層の節でも触れたが、G-Hラインの土層断面から住居跡北部の削剥は縄文時代からすでに始まっていたと思われる。残存部の南北長が7m、東西が5.2mで、長楕円形プランと思われる。炉址は

1号住居跡E-Fライン  
1層：暗褐色軟質土（ロームブロック、焼土、炭化物を含む）。2層：明黒褐色粘質土（直径1mm程度のローム粒子を少々含む）。3層：明黒褐色土（直径1mm程度のローム粒子を少々含み焼土を含む）。4層：暗褐色粘質土（ロームブロックをかなり含む）。5層：暗褐色土（直径1mm程度のローム粒子を多少含む）。6層：暗褐色軟質土（直径1mm程度のローム粒子を多く含む）。7層：明黒褐色粘質土（4層より明るくロームブロックをかなり含む）。8層：暗褐色粘質土（直径1~3mmのローム粒子を多少含み焼土を含む）。9層：暗褐色粘質土（6層より硬くローム粒子、焼土、炭化物を含む）。10層：暗褐色粘質土（含物がありない）。11層：暗褐色粘質土（底径1cm以下のロームブロックを多く含み焼土粒子を8層より多く含む）。12層：暗褐色粘質土（ローム粒子、焼土を少量含む）。

1号住居跡J-Jライン  
1層：黒色土（淤泥土）。2層：暗褐色軟質土（焼土を微量含む）。3層：明黒褐色粘質土（直径1mm程度のローム粒子を多く含む）。4層：明黒褐色土（ローム粒子を多く含む）。5層：暗褐色土（1~3mmのローム粒子を少々含み焼土を含む）。6層：黒褐色土（ローム粒子を少し含み5層より焼土少ない）。7層：明黒褐色土（直径1mm程度のローム粒子を多く含む）。8層：明黒褐色土（1mm程度のローム粒子、焼土を少し含む）。9層：明黒褐色土（直径1mm程度のローム粒子を多く含む）。10層：暗褐色粘質土（直径1mm程度のローム粒子を少し含む）。11層：暗褐色粘質土（焼土を少し含む）。12層：暗褐色粘質土（ロームブロックをかなり含む）。

1号住居跡1・2・5号炉址  
1層：焼土、2層：黒褐色土（1~3mmの焼土を多く含みやや硬質）。3層：黒色土（発土粒を十合含む）。4層：黒褐色土（2層より明るく焼土を含む）。5層：暗褐色土、6層：黒色土（焼土を少々含むG）。7層：暗褐色土（焼土ブロック含む）。8層：黒色土（焼土、炭化物を少し含む）。9層：暗褐色土（焼土、炭化物を少し含む）。

1号住居跡3・4号炉址  
1層：焼土、2層：明黒褐色土（1~2mmの焼土を多く含みやや硬質）。3層：暗褐色土。4層：暗褐色土（焼土ブロックを含む）。5層：暗褐色土（焼土粒多く含む）。6層：黒色土（焼土、炭化物を少し含む）。



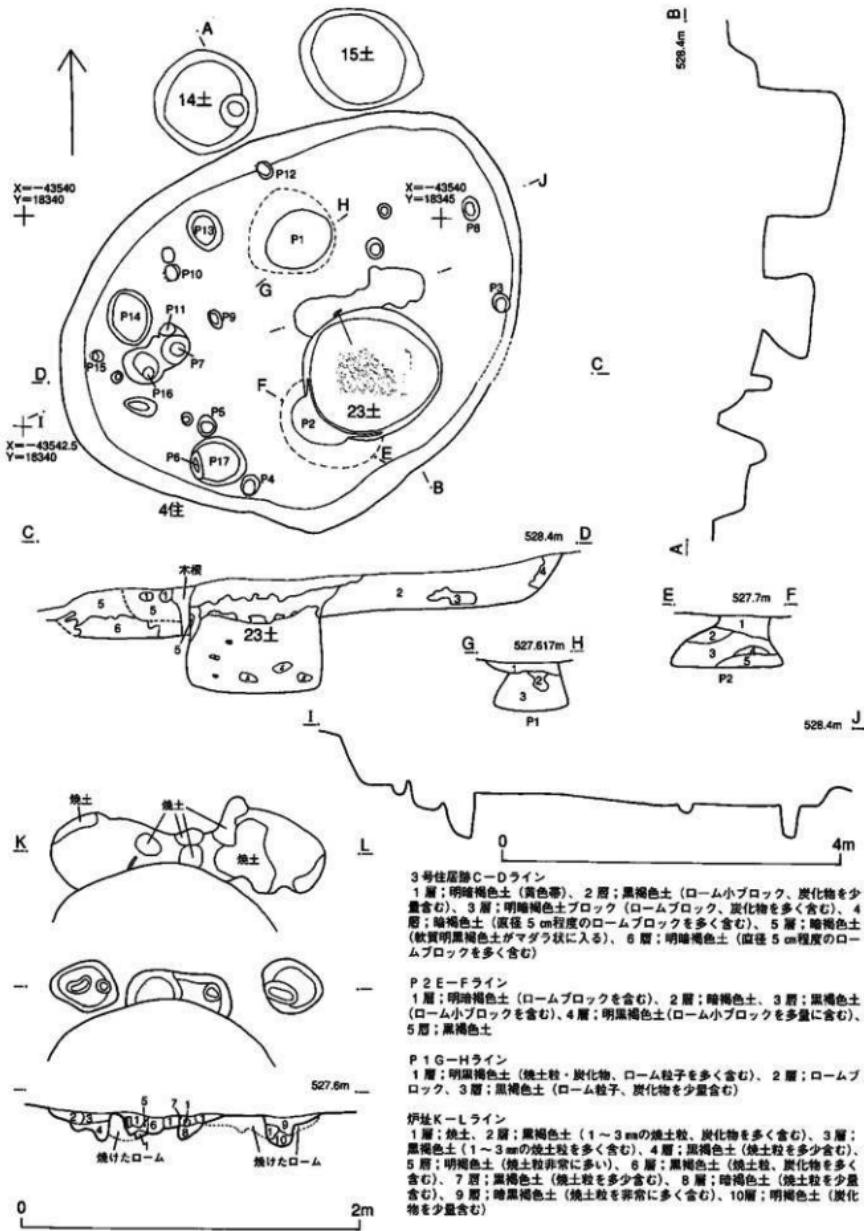
第11図 2号住居跡 (1/60, 炉址 1/30)



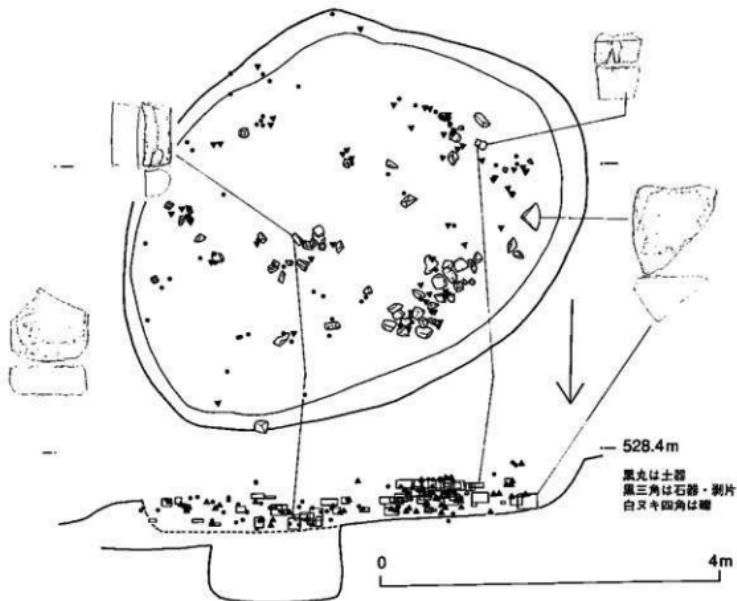
第12図 2号住居跡遺物出土状況 (1/60)

住居跡の北部中央にあり、4基の埋甕が南北方向に直列する。1・2炉より3・4炉の方が古い。なお、P8内に比較的大型の土器片が確認され、位置的にも住居跡南側中央部で直列する炉址の延長線上にあり、硬い床面が周囲に見られるなど炉址の存在を想定させるが、焼土がなく70cmと深いピットである点が難点である。このピットは上部を多くの大型礫でふさがれており、家屋廃絶祭祀の可能性がある。40cm以上の深さのピットはP1～10、30cm以上がP11～13、20cm以上がP14～25である。特に深いピットの大半が住居跡東部にあり構造的な配列状況を示さない。しかし、炉址が北部にあり、南部に炉址の可能性のある部分や硬い床面の存在を考えると、南部を中心とした住居跡の後に北部を中心とした住居跡を立て替えたとの想定も可能である。

**3号住居跡 (第13・14図)** 東区中央部のりー12・ー13グリッドにある。南東部で4住を切っている。長軸が北東ー西南方向で6m、短軸が4.5mである。残存状況が良好で壁の最大高が50cm。ただし、南東部は縄文時代以来の削剥や土壤化の影響で壁の立ち上がりが不鮮明であった。炉址は中央東によりあり、長さ1.5m、幅0.5mで長軸が東北東ー南南西方向で、四つの焼土を伴う掘り込みが直列する。中央西よりの掘り込みに土器片が立って出土しており、唯一埋甕のなごりを示す。炉址の南側に23号土坑が切り込んでおり、炉体の一部が失われている。ピットの内、P1、P2は底部が広がる袋状土坑で深さ60cmである。これ以外で40cm以上の深さのピットはP3～7、30cm以上がP8～11、深さ20cm以上がP12～17で直径が大きいものが多い。深いピットが住居跡西側に集中し、東側には2本しかない。主柱穴を想定すると、P3、P8の2本と、P4～6の群、P7・9～11の群のそれぞれから1～2本がその候補として上げられる。



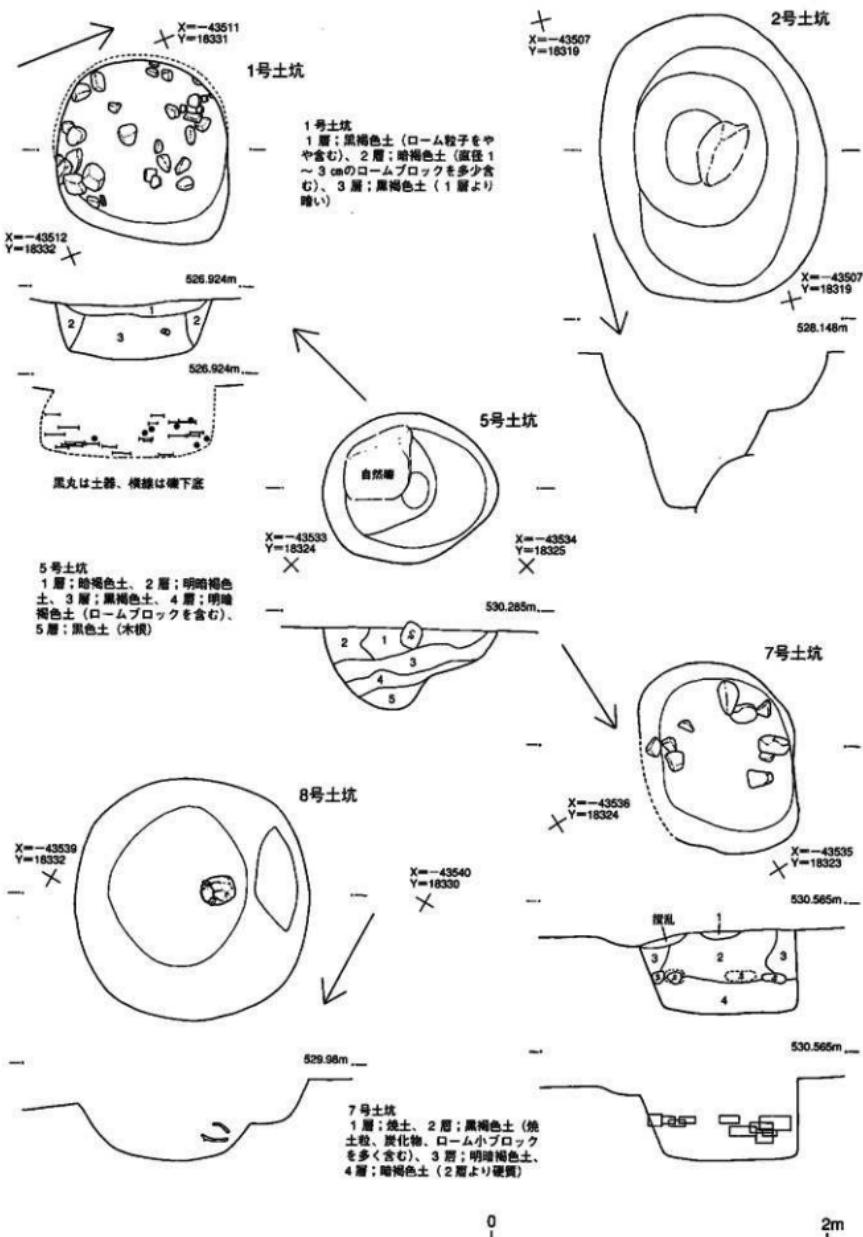
第13圖 3號住居跡（1/60，爐址 1/30）



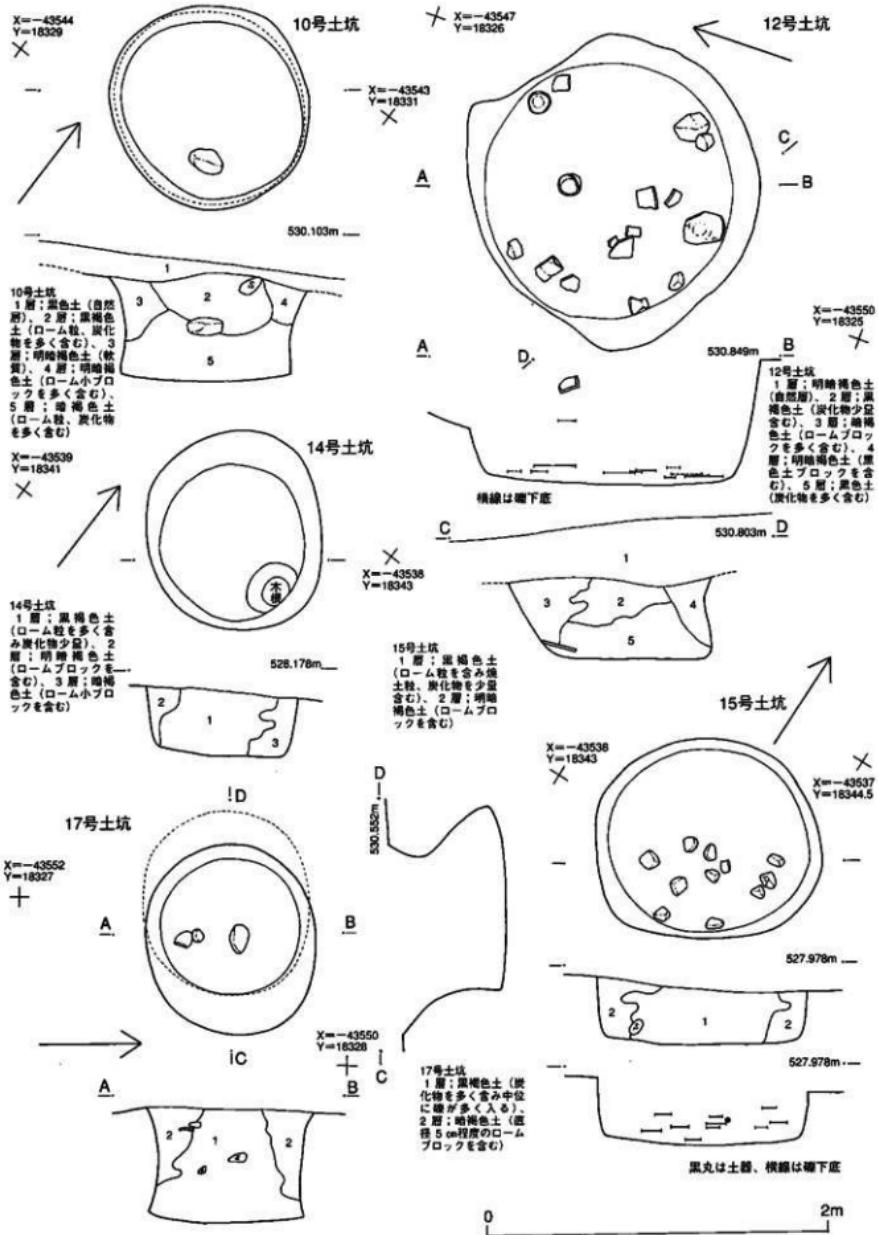
第14図 3号住居跡遺物出土状況 (1/60)

## 2. 土坑 (第15~21図)

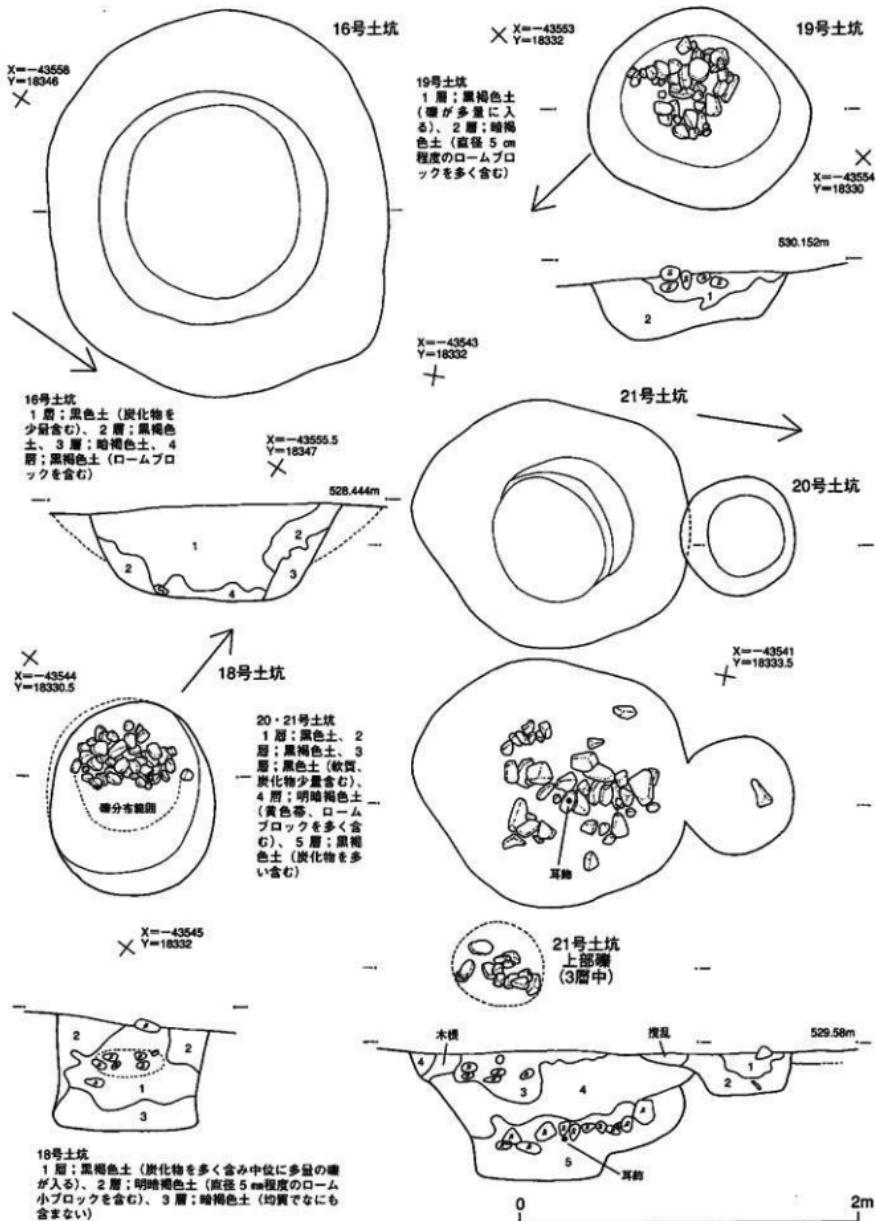
五領ヶ台式期の土坑は37基ある。1号土坑は北区北部のれー7グリッドの北西部に位置し、直径1mの不整円形、深さ30cm。下半部に砾や土器片が底面より浮いて出土。2号土坑は北区西端部のれー8グリッドにあり、南北1.7m、東西1.3mの楕円形で、深さ90cm、底面が直径30cmと狭く自然砾が露出。中段がある。5号土坑は中央区東側、わーー11グリッド西部にあり、直径1m前後の不整円形、深さ30cmで中央部に木根が入る。7号土坑は中央区東側のわーー12グリッド北側にあり、1.1×0.9mの楕円形で深さ45cm。土坑確認段階で上面に多量の焼土が出土。覆土中位の周囲に季大程度の砾が埋置されていた。すなわち、底部20cmほどを水平に埋め戻しその面の周囲に砾を並べそれを25cmほど埋めてその上面で焚火をして土坑中央部に厚い焼土層(5cm以上、10cmはあったと思われる)を形成するという埋め戻し過程が読み取れる。8号土坑は中央南地区の北側、れーー12グリッド南西部にあり、直径1.4mの円形で深さ40cm、底部がポール状に丸く北東部に中段がある。中段直下から小形有孔鉢付土器がほぼ完形で底面から5~10cm浮いて出土。10号土坑は中央南区のれーー13グリッド南西部にあり、直径1.2mの整円形で中位が直径95cmとすばり、底部が直径1mと広がる壁中央がオーバーハングする形態である。深さ60cm。底面は中央部が周囲に比べて5cmほど窪む盆状。覆土中央に直径20cmほどの大型砾が埋置されていた。12号土坑は中央南区西側のろーー14グリッド南西部にあり、直径1.7mの円形。最大深70cmで底面は平坦。底面上から多数の遺物が出土。14号土坑は東区中央の3住の北に接して、りーー12グリッド南側に位置する。1×1.2mのほぼ円形で底面は平坦。深さ40cm。15号土坑は14号の西に隣接する。1.2×1.3mのほぼ円形で底部はほぼ平坦。深さ35cm。覆土下半部から砾が少量出土。16号土坑は東区南側のろーー16グリッドにあり、直径1.5mの円形。深さ60cm。土坑周囲をやや掘りすぎた。遺物は確認できなかった。17号土坑は中央南区のろーー15グリッド北部にあり、確認面では直径1×1.1mの円形で、壁中央が直径80cmとすばりオーバーハングし、底部が1×1.1mと広がる形態で、東西側断面は10号土



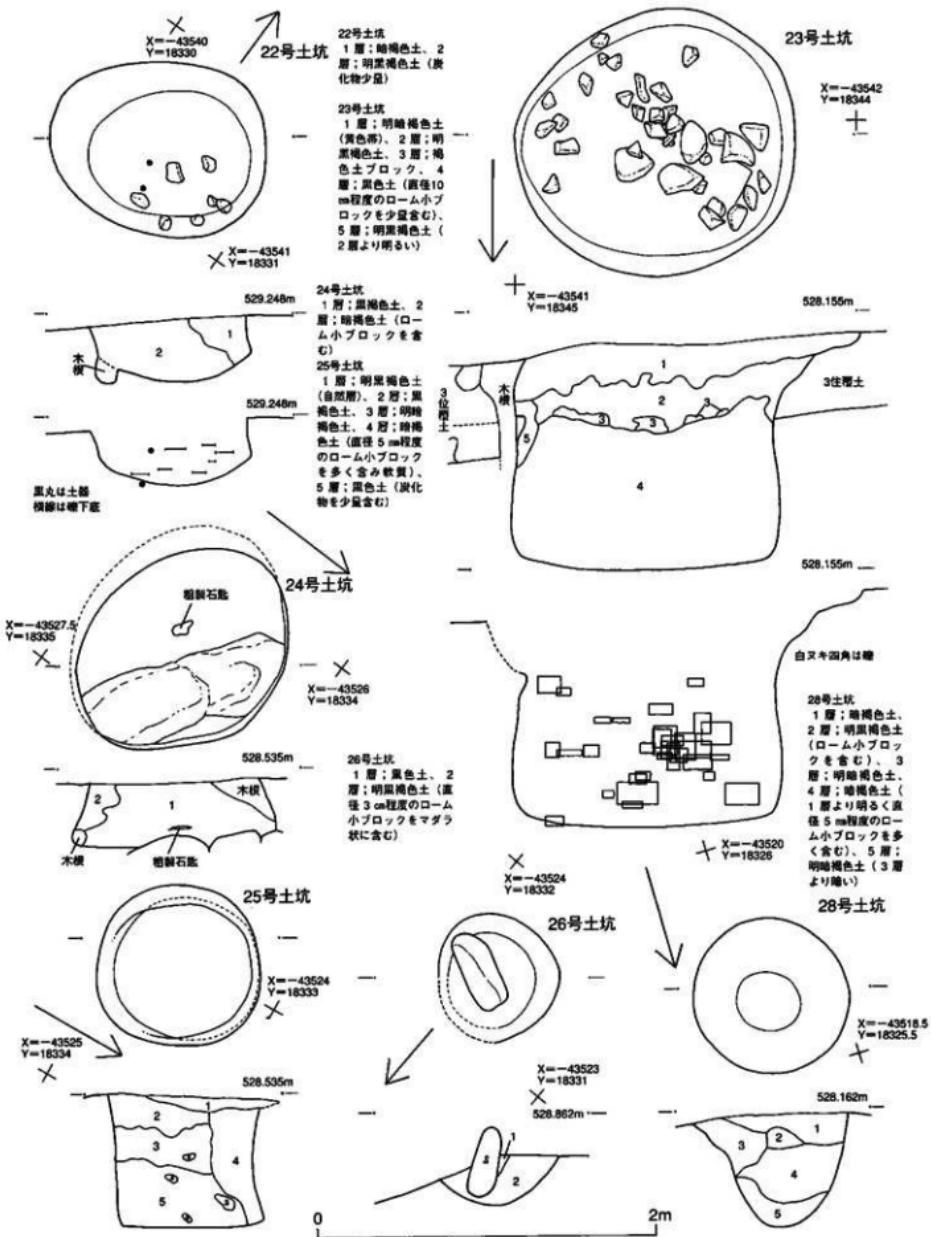
第15図 土坑(1) (1/30, 1・2・5・7・8号土坑)



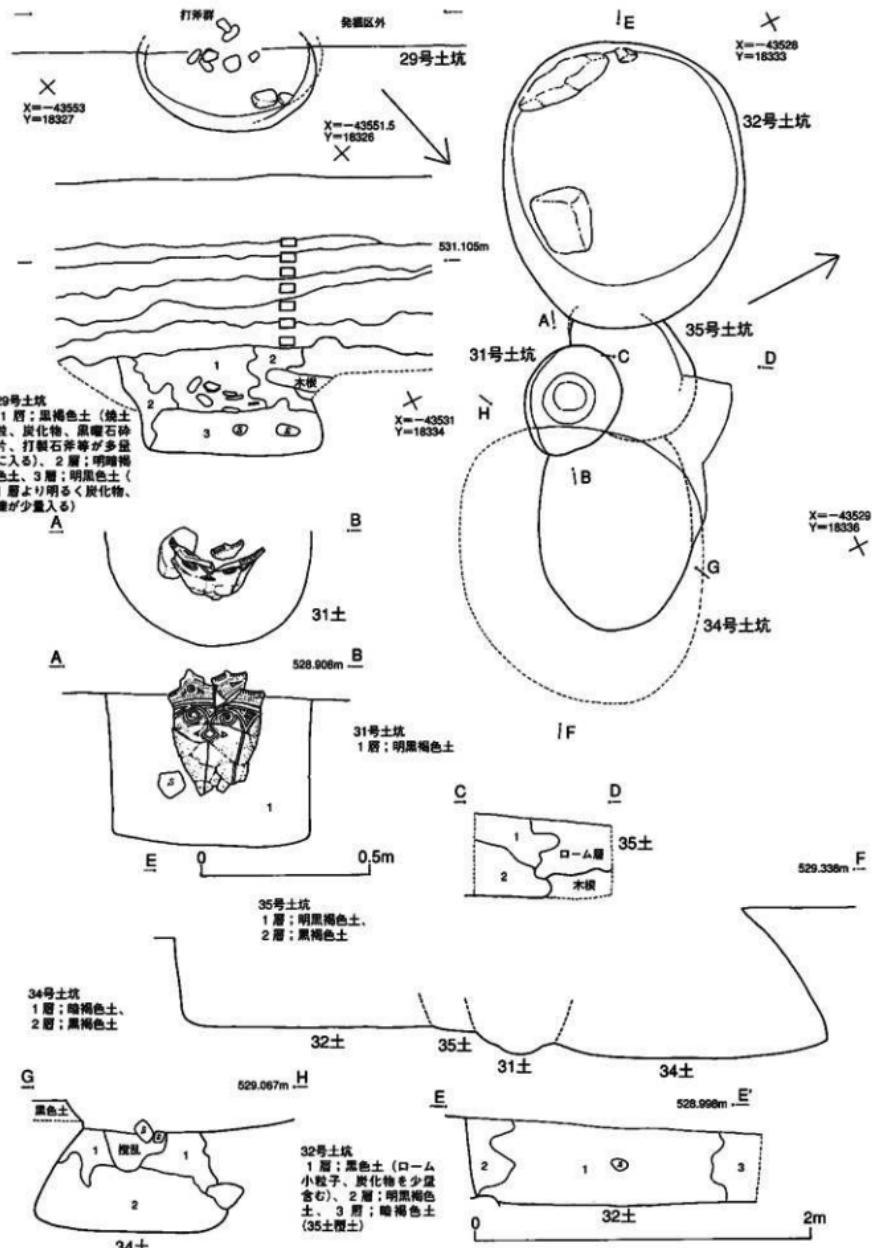
第16図 土坑(2) (1/30, 10・12・14・15・17号土坑)



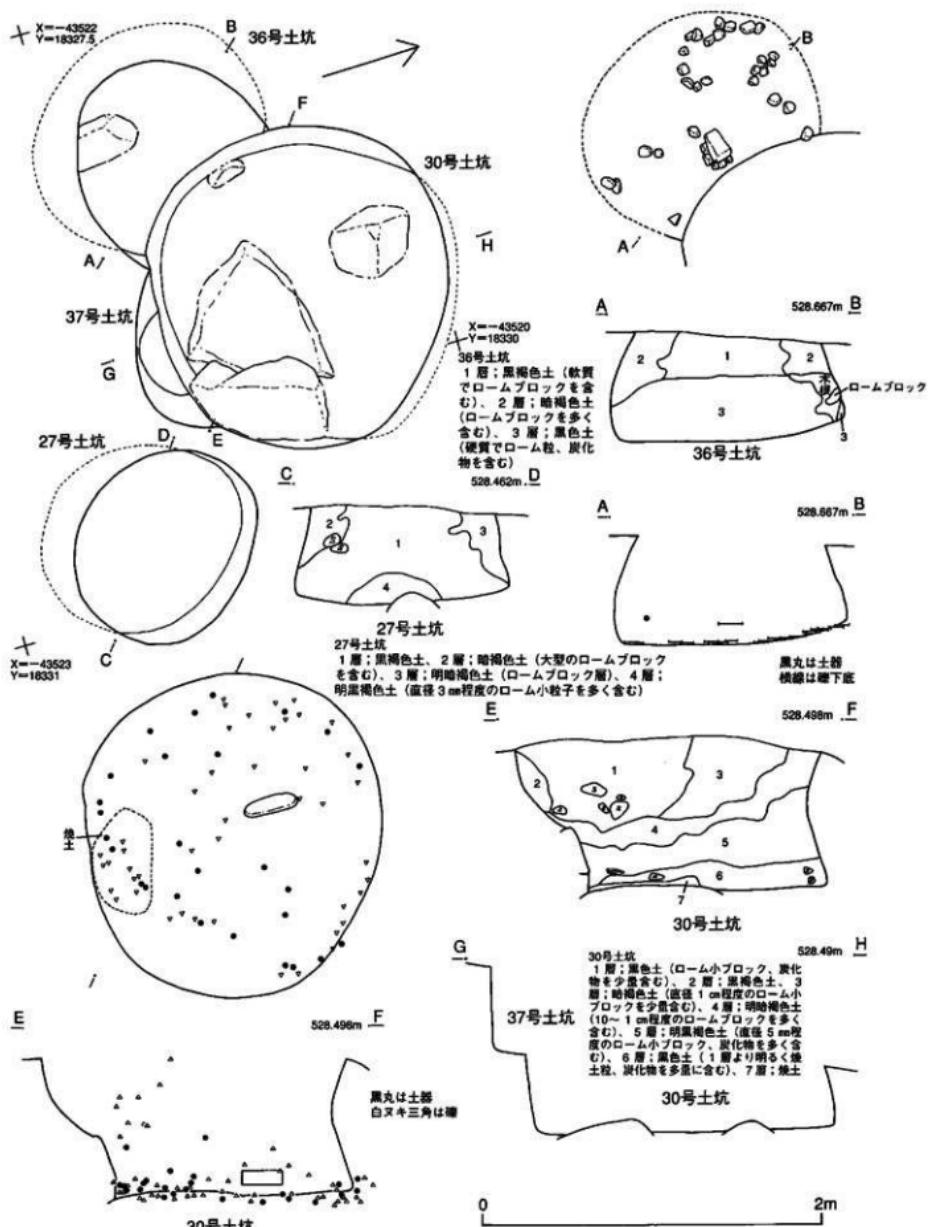
第17図 土坑(3) (1/30, 16・18~21号土坑)



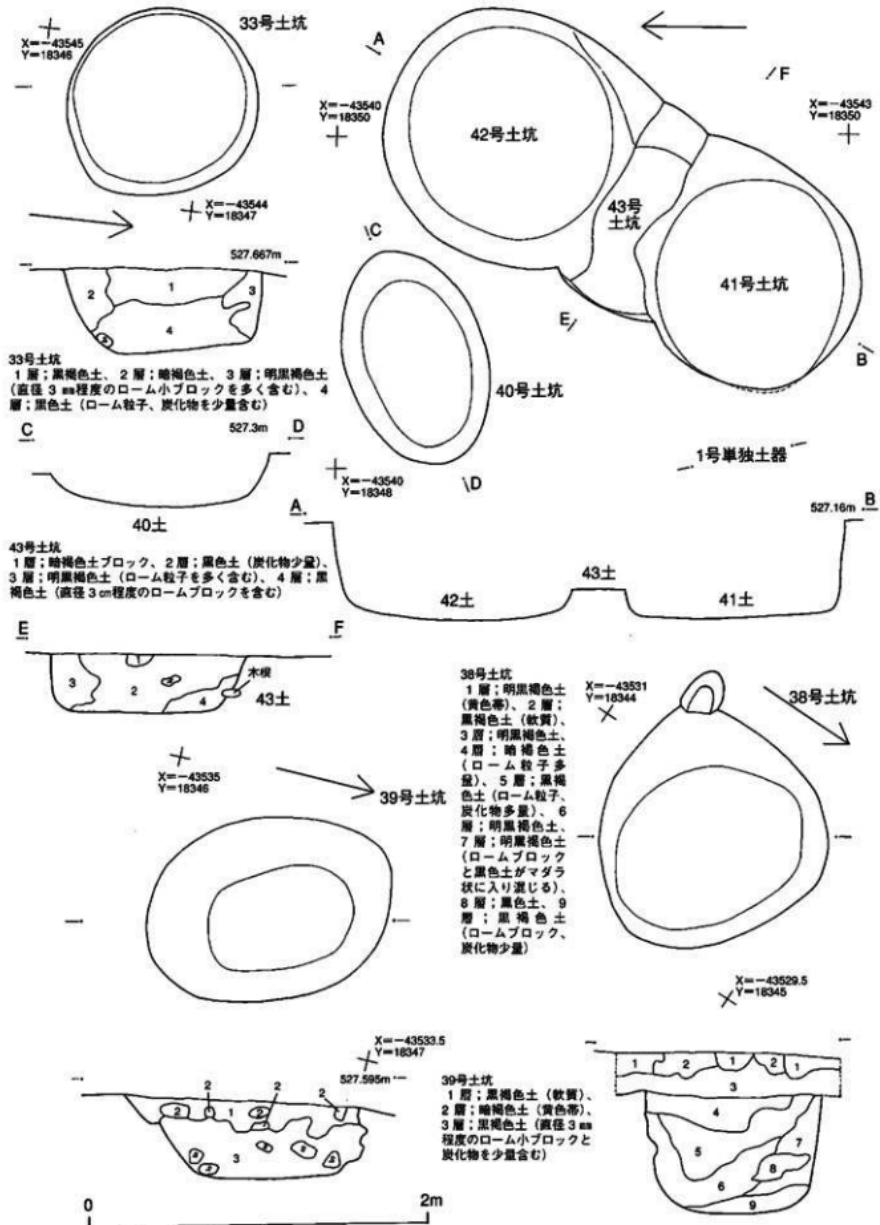
第18図 土坑(4) (1/30, 22~26・28号土坑)



第19圖 土坑(5) (1/30, 29·32·34·35号土坑, 1/15, 31号土坑)



第20図 土坑(6) (1/30, 27・30・36・37号土坑)

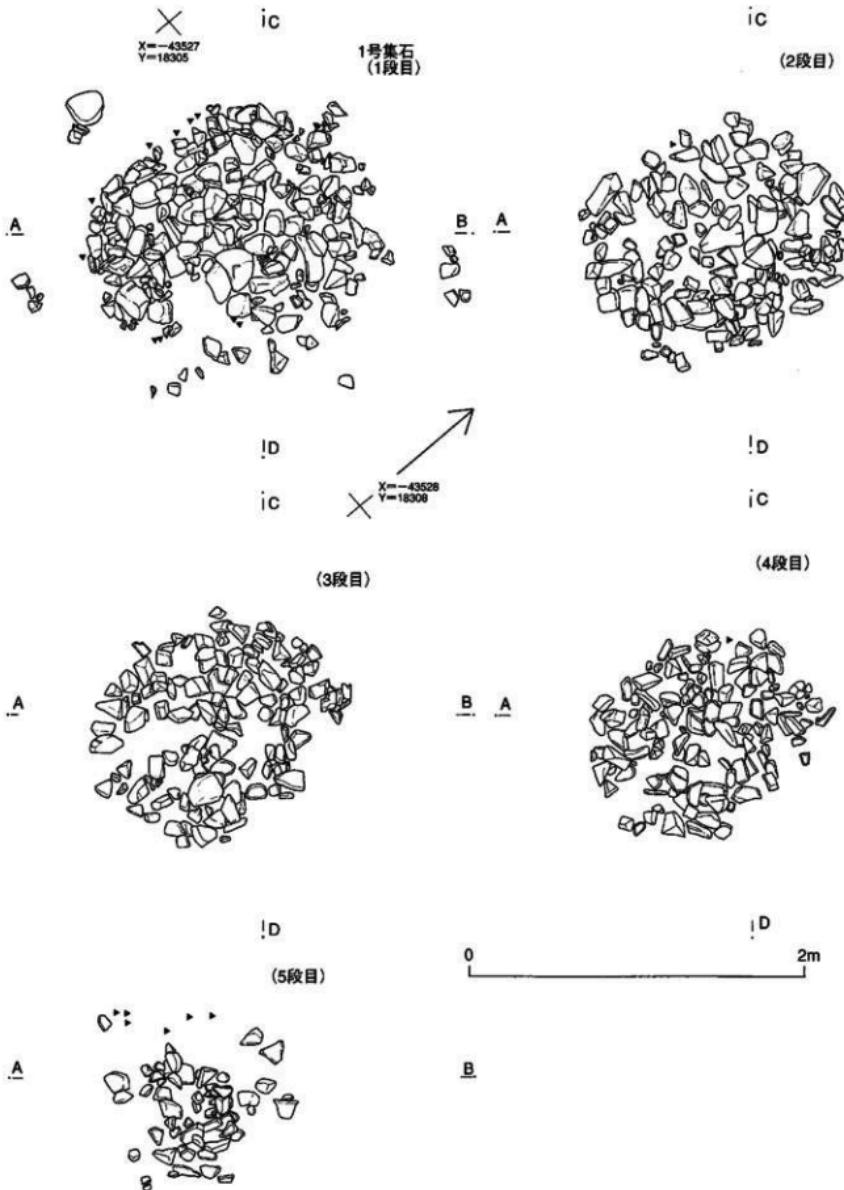


第21図 土坑(?) (1/30, 38~43号土坑)

坑と近似し南北断面は袋状を呈する。深さ65cm。覆土中位に大型疊あり。18号土坑は10土の東に隣接する。 $1 \times 1.1$ mの円形で壁がややオーバーハングし底面が若干広くなっている。深さ65cm。覆土中央部に多量の疊が直径60cm、厚さ15cmの範囲に集中して出土。土器片や炭化物も混在した。19号土坑は中央南区れー15グリッド南西部にあり、 $1.2 \times 1.3$ mの不整円形で底部も不安定。深さ35cm。覆土上部の直径60cm、厚さ15cmの範囲に疊が集中出土。20号土坑は中央南区北部のれー13グリッド北部にあり、直径70cmの円形で、深さ25cm。21土を切る。覆土上部に大型疊。21号土坑は20土の南に隣接し確認面が $1.45 \times 1.65$ mの不整円形、底部が $0.6 \times 0.75$ mの楕円形。深さ80cm。覆土上部の3層中に直径50cmの範囲で疊が集中出土。また、下層の5層中から大型疊を中心として集中出土、底面から10~20cm浮いており、北側が高く南側に傾斜して面的に分布している。この疊の中央下面から耳栓が1点出土した。22号土坑は8土の南に隣接し、 $1 \times 1.3$ mの楕円形で深さ35cm。覆土下半部で疊や土器が若干出土。23号土坑は3住中央を切り込んでおり、 $1.6 \times 1.7$ mのほぼ円形で確認面からの深さ1.3m。壁はややオーバーハングする。覆土下半部から疊が多く出土。24号土坑は中央区東側のれー10グリッド東側にあり、 $1.1 \times 1.4$ mの楕円形で深さ40cm。壁はオーバーハングし袋状を呈する。中央部で粗製石匙が10cmほど浮いて出土。25号土坑は24土の北西に隣接。確認面が直径95cmの円形、壁中央部75~85cm、底部直径85cmの整円形で壁がややオーバーハングする形態。深さ80cm。26号土坑は25土の北西に隣接し、直径70cmの円形で底部はボール状。深さ30cm。中央に45×50cmの三角形状の大型疊を直立させている。27号土坑は26土の北西に隣接し $1 \times 1.2$ mの楕円形で深さ60cm。南側に突き出る袋状。28号土坑は中央北部のろー8グリッド南西部にあり、直径90cm、深さ65cmのボール状。29号土坑は中央南区西側のろー15グリッド西側にある。半分が发掘区外にある。調査部分の直径1.1m、深さ60cm。覆土中位で打製石斧が集中出土、黒曜石碎片なども多く混在した。30号土坑は27土の北西に隣接し、 $1.8 \times 1.9$ mの円形で深さ80cm。北壁がややオーバーハングする。覆土下部で多量の遺物が出土。南部底面に35×60cm、厚さ5cmの焼土層が見られた。31号土坑は中央区東端部のれー10グリッド南東端部にある。直径60cmの不整円形で中央に五領ヶ台II式土器の縦1/3ほどの個体が立てて埋納されていた。土器の下部に接して疊があり土器を安定させる役目と思われる。深さ40cmで底部中央が窪む。32号土坑は31土の北西に隣接し、 $1.45 \times 1.7$ mの楕円形で深さ40cm。35土に切られていると思われる。33号土坑は東区中央のらー13グリッド南西部にあり、直径1.1mの円形で深さ50cm。34号土坑は31土の南東に隣接し、確認面が $0.9 \times 1.2$ (推定)mの楕円形、底面が $1.5 \times 1.7$ mの楕円形で南側に広がる袋状土坑で、31土に切られている。深さ90cm。35号土坑は31土の北に隣接し31土に切られている。推定形態は70×90cmの楕円形で深さ50cm。36号土坑は30土に北東部を切られている。確認面の直径が1.15m、底面のつ直径が1.45mで南西方向に広がる袋状土坑である。深さ65cm。底面から多くの疊が出土した。37号土坑は30土に大半を切られており、辛うじて奥行20cmが残存した。深さ50cm。38号土坑は東区北端のりー10グリッド南東隅にあり、 $1.35 \times 1.3$ mの不整円形。深さ70cm。39号土坑は38土の南東にあり $1.1 \times 1.5$ mの楕円形で深さ45cm。40号土坑は東区中央のらー13グリッド北東隅にあり、 $0.85 \times 1.35$ mの楕円形で深さ25cm。41号土坑は40土の南に隣接し、直径1.25mの円形で深さ55cm。42号土坑は41土の北東に隣接し、直径1.5mの円形で深さ55cm。43号土坑は北側を42土、南側を41土に切られ、直径1.2mと推定され、深さ35cm。

### 3. 集石(第22~30図)

1号集石は中央区西端のAー10グリッドにあり $1.5 \times 1.8$ mの規模。 $1.7 \times 2.1$ m、深さ50cmの不整円形の土坑内にあり、底部配石を伴う。集石は厚さ30cmで底部配石との間に5cm程度の間層がある。底部配石と土坑底部との間に15~20cmの間層があり縄文地文の土器片が出土した。底部配石の中央部に $45 \times 25 \times 12$ cm重さ22.5kgの巨疊が配石の下に埋設されていた。なお、集石本体と底部配石の構成疊2個体が接合する。2号集石は1集の北に隣接し、直径1mの規模。直径1.1m、深さ65cmの円形土坑内にある。底部配石は見られない。集石は厚さ60cmで断面がボール状で土坑上部を閉塞しており、土坑下部に30cmほどの間層がある。3号集石は中央区のわー9グリッド南部にあり集石群Aの北端部に位置する。 $0.5 \times 1$ mの規模の底部配石である。疊分散分布域の一部が3号集石の構成疊である可能性がある。4号集石は3集の北に隣接し $1 \times 1.3$ mの規模。上面形が $1.25 \times 1.5$ mの楕円形、底部が直径80cmの円形で深さ85cmの土坑の上部を厚さ40cmほどの断面ボール状に閉塞する。土坑下部に50cmほどの間層がある。5



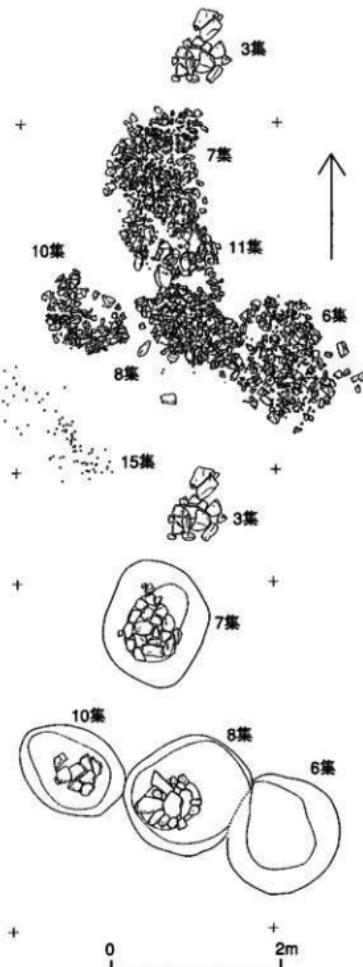
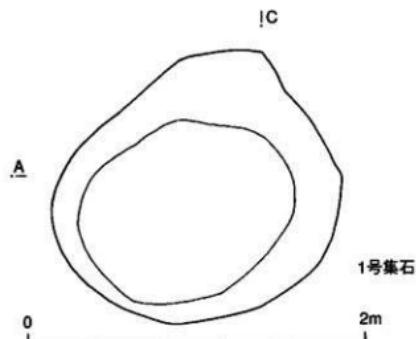
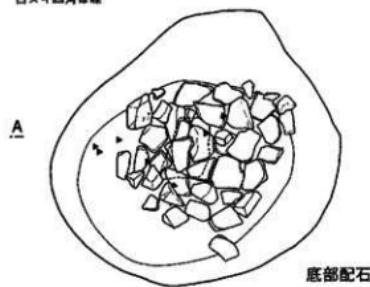
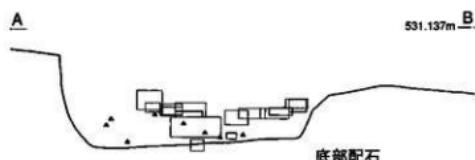
第22図 集石(1) (1/30, 1号集石-1-)



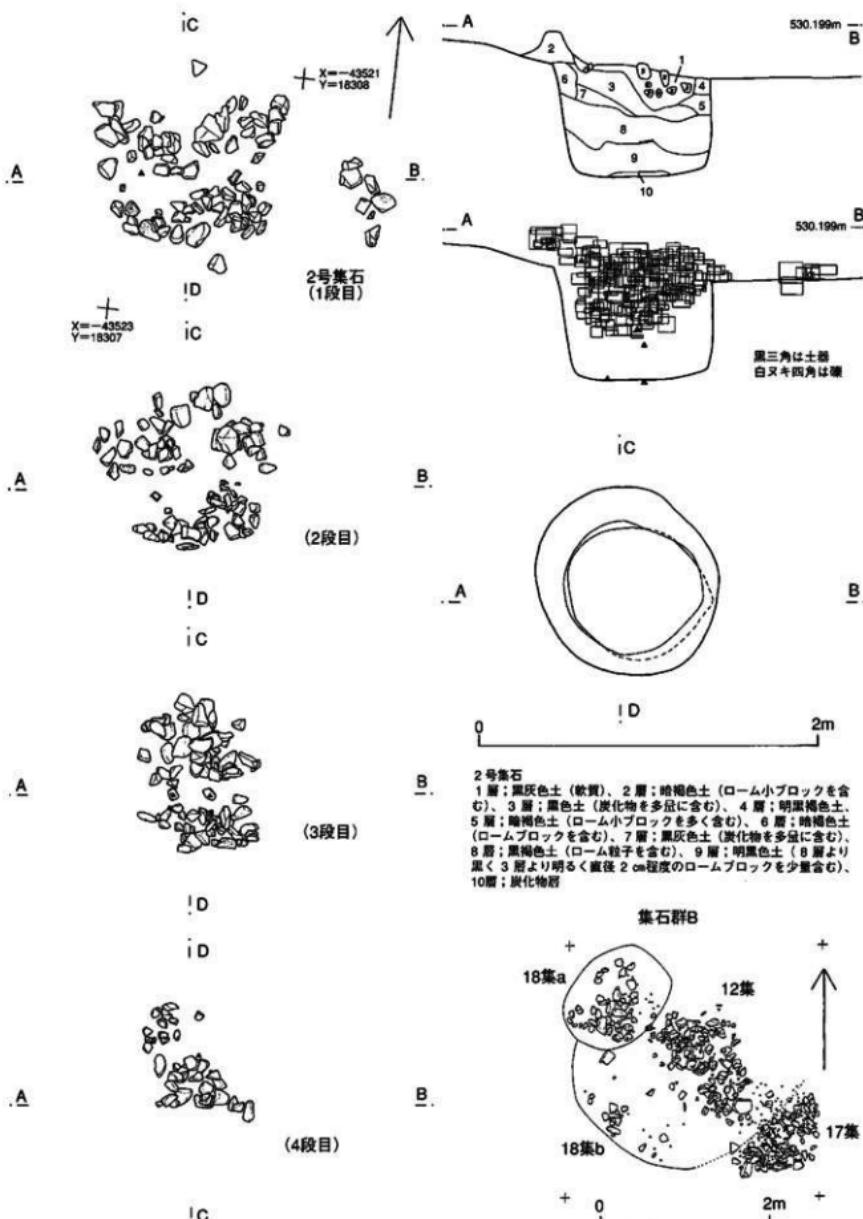
1号集石  
1層：黒褐色土（炭化物をあまり含まない）。2層：明暗褐色土（ロームブロックを含む）。3層：明黒褐色土（ローム小ブロックを含む）。4層：暗褐色土（ロームブロックを含む）、礫周囲の土層は黒色土で炭化物を多量に含む。



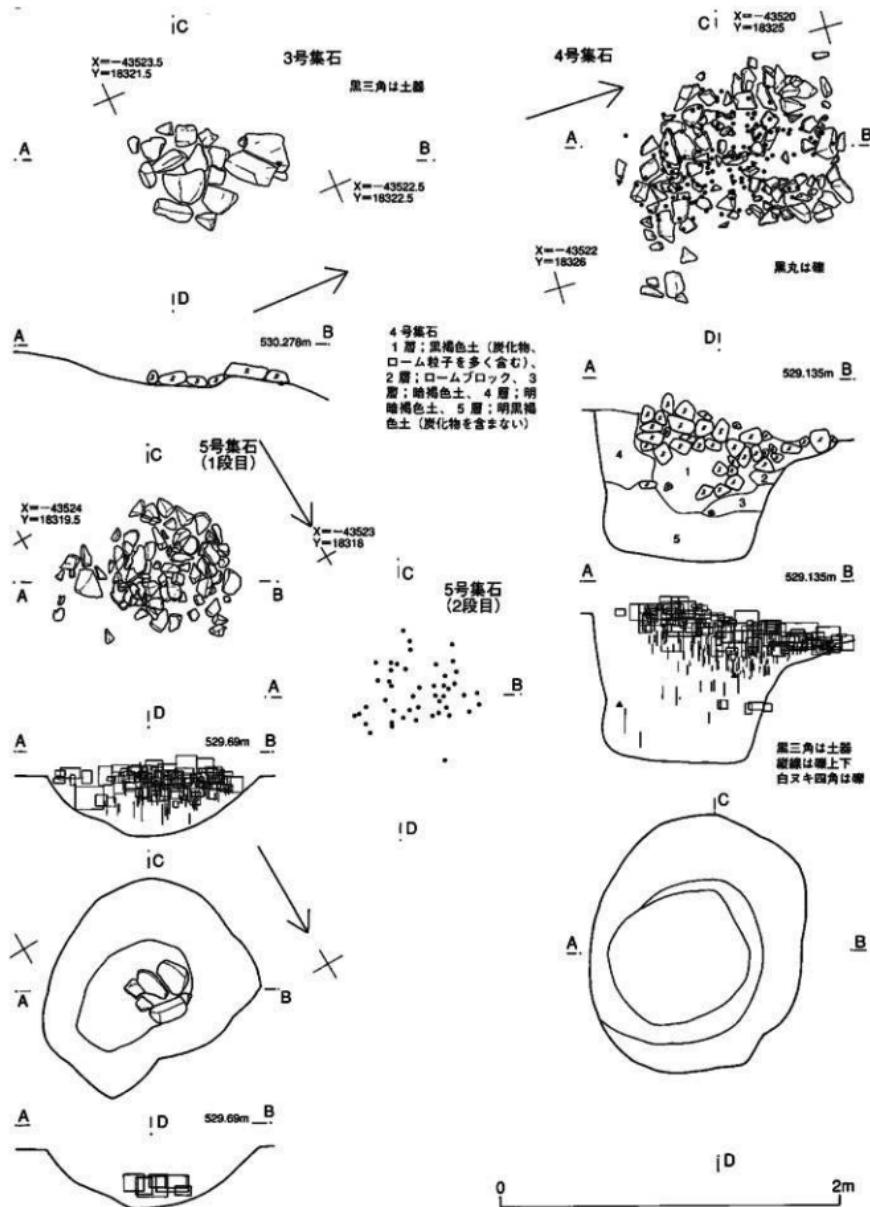
集石群A



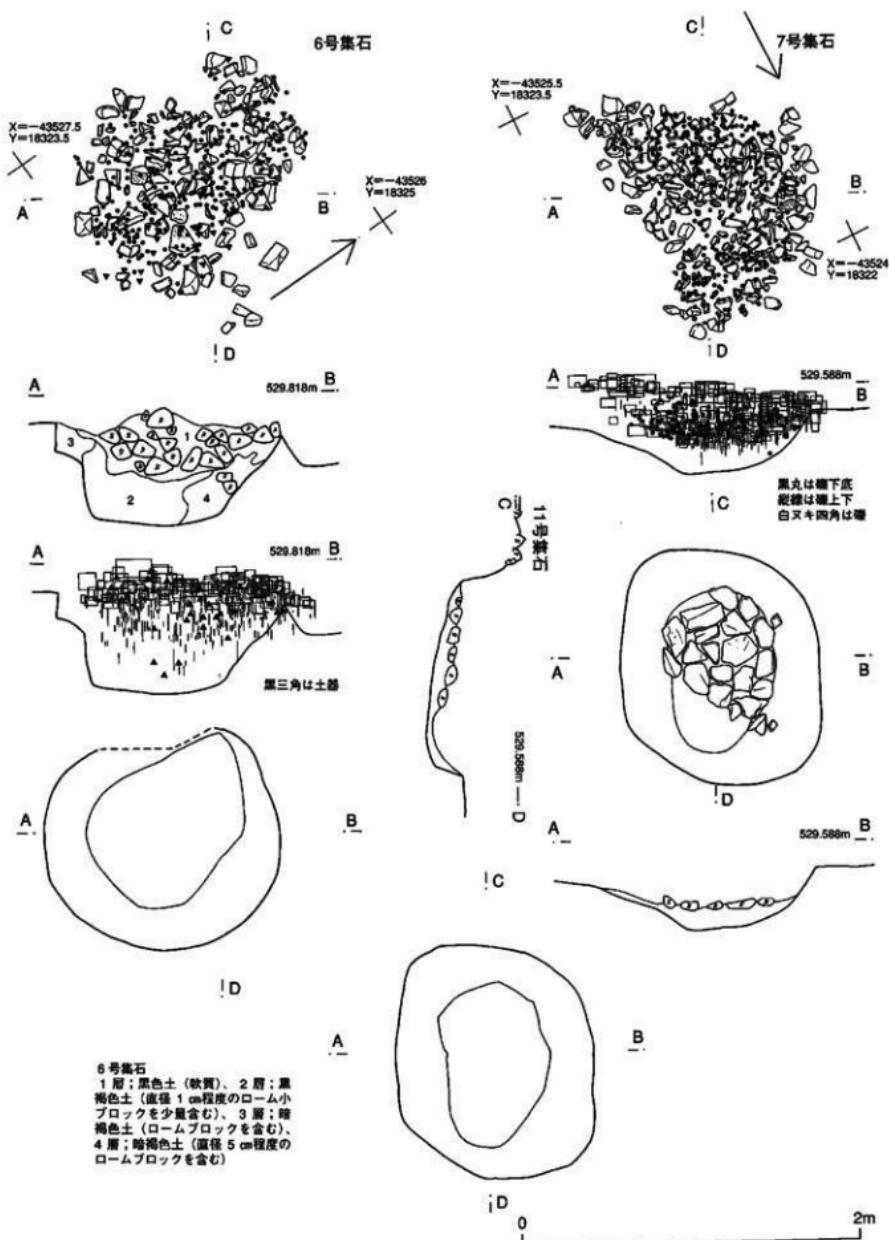
第23図 集石(2) (1/30, 1号集石—2—, 1/60, 集石群A)

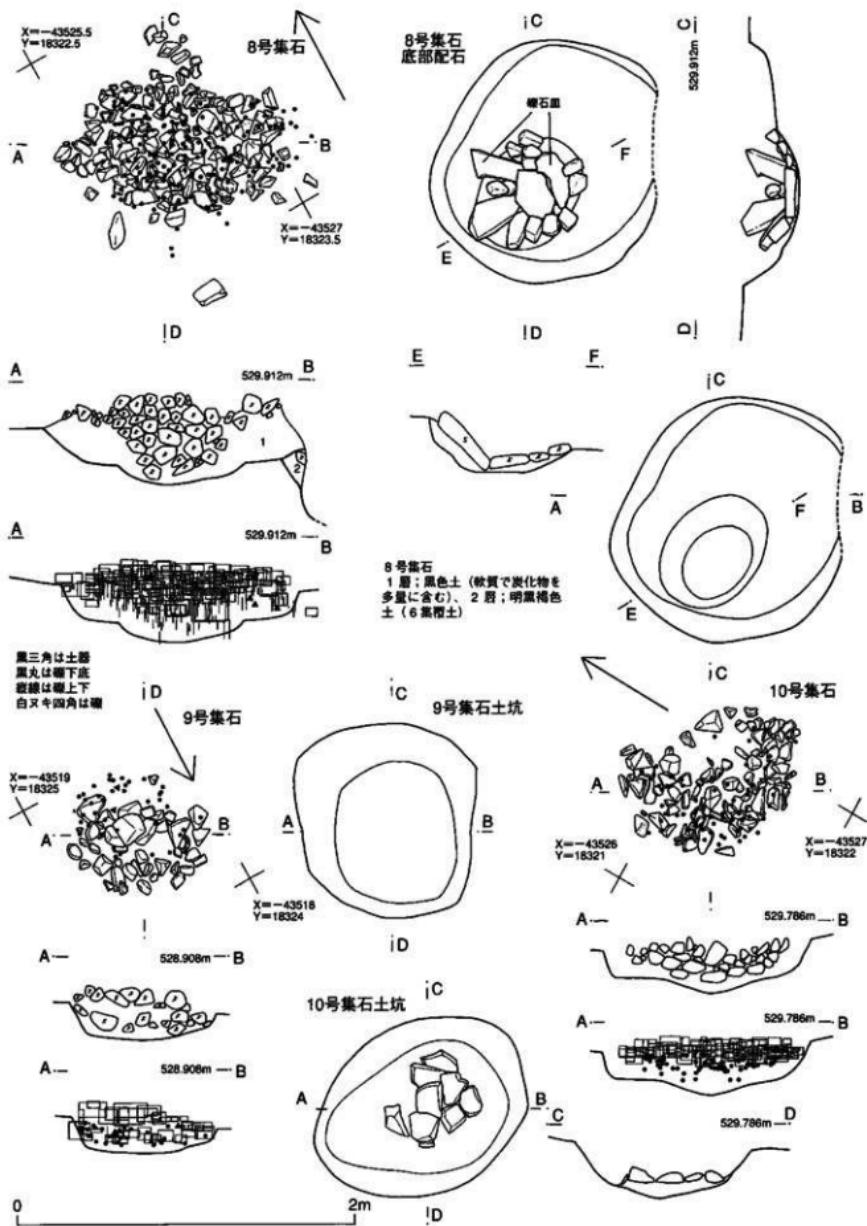


第24図 集石(3) (1/30, 2号集石, 1/60, 集石群B)

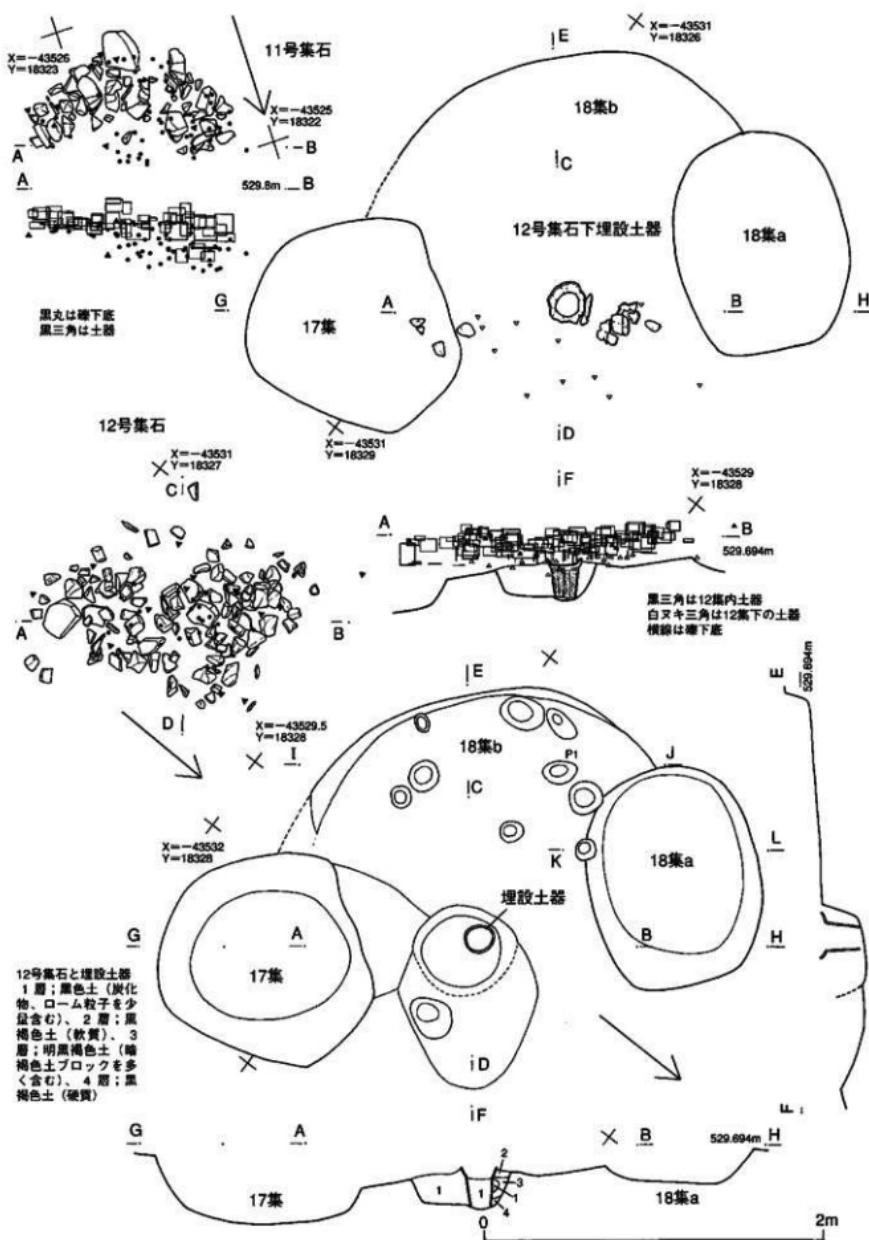


第25図 集石(4) (1/30, 3~5号集石)

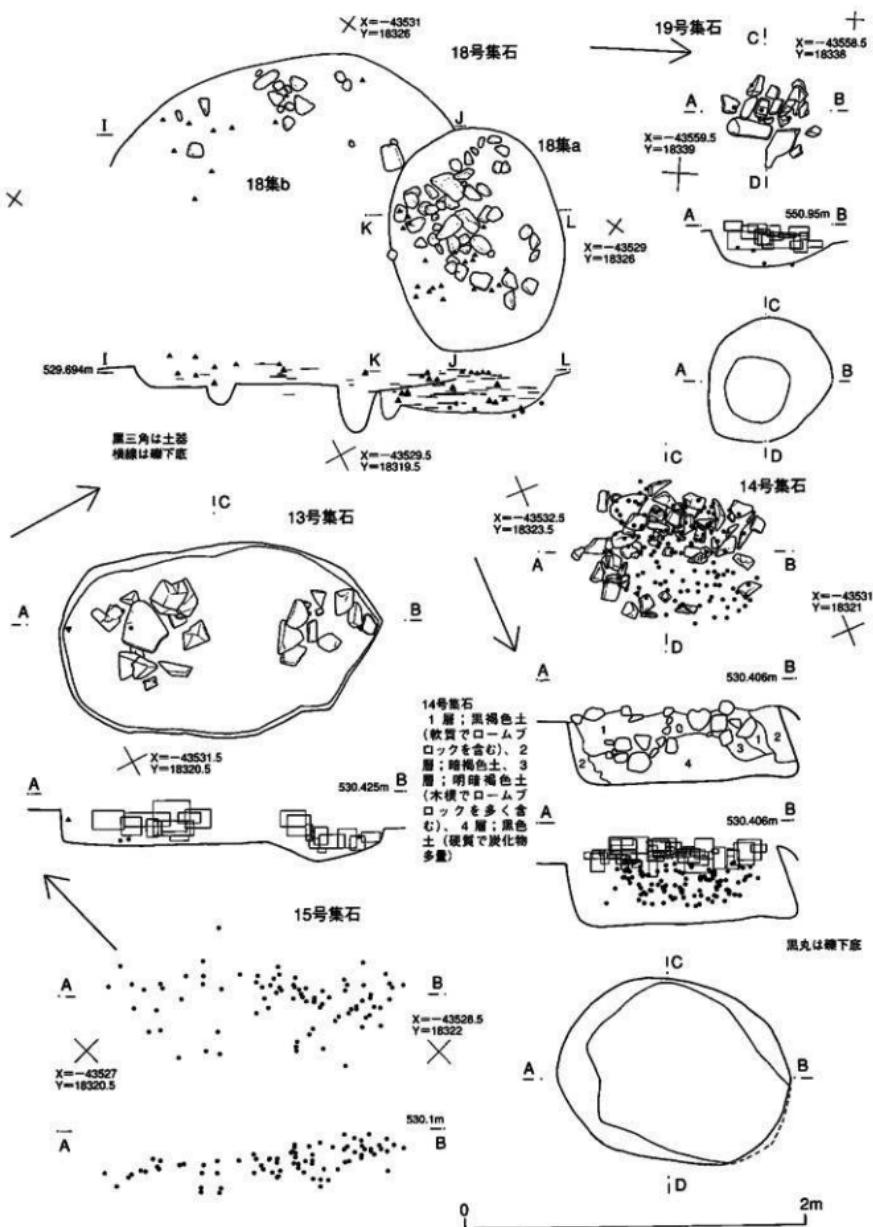




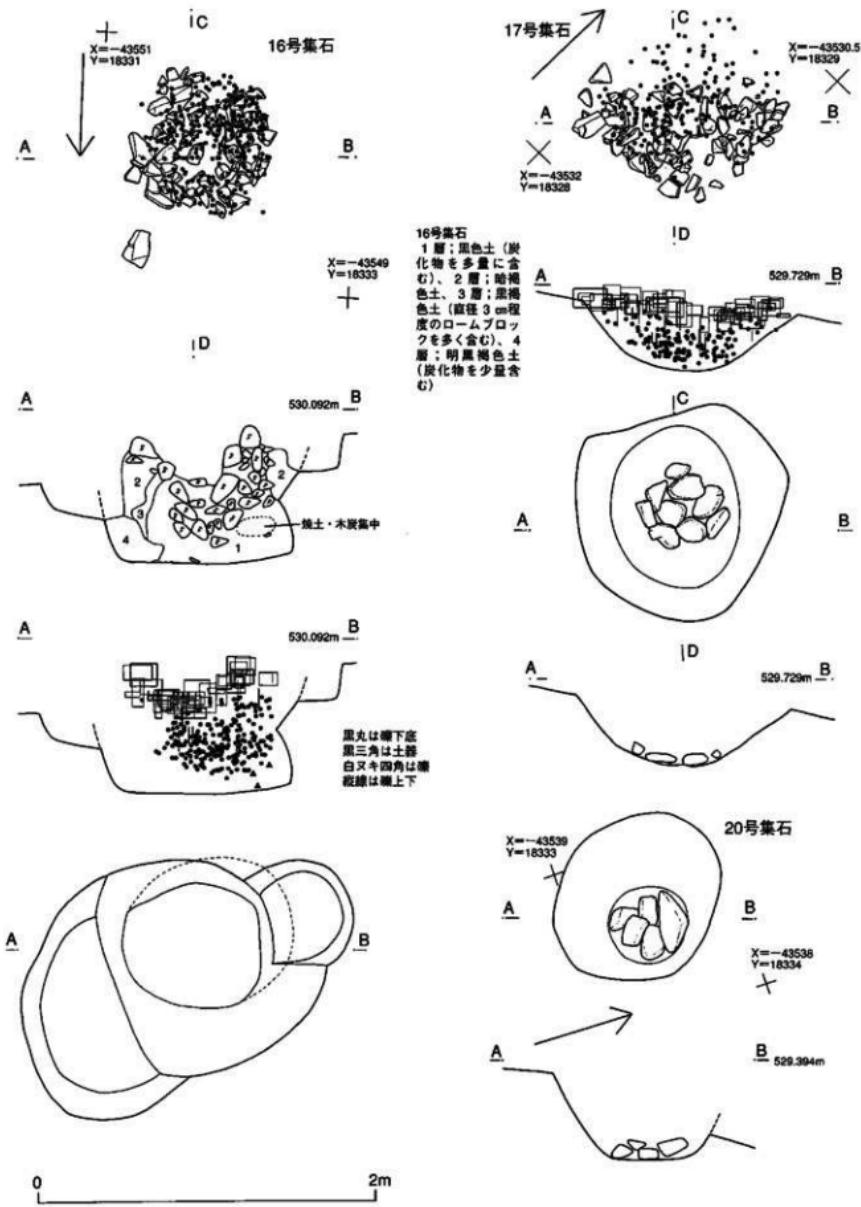
第27図 集石(6) (1/30, 8~10号集石)



第28図 集石(7) (1/30, 11・12号集石, 埋設土器)



第29図 集石(8) (1/30, 13~15・18・19号集石)



第30図 集石(9) (1/30, 16・17・20号集石)

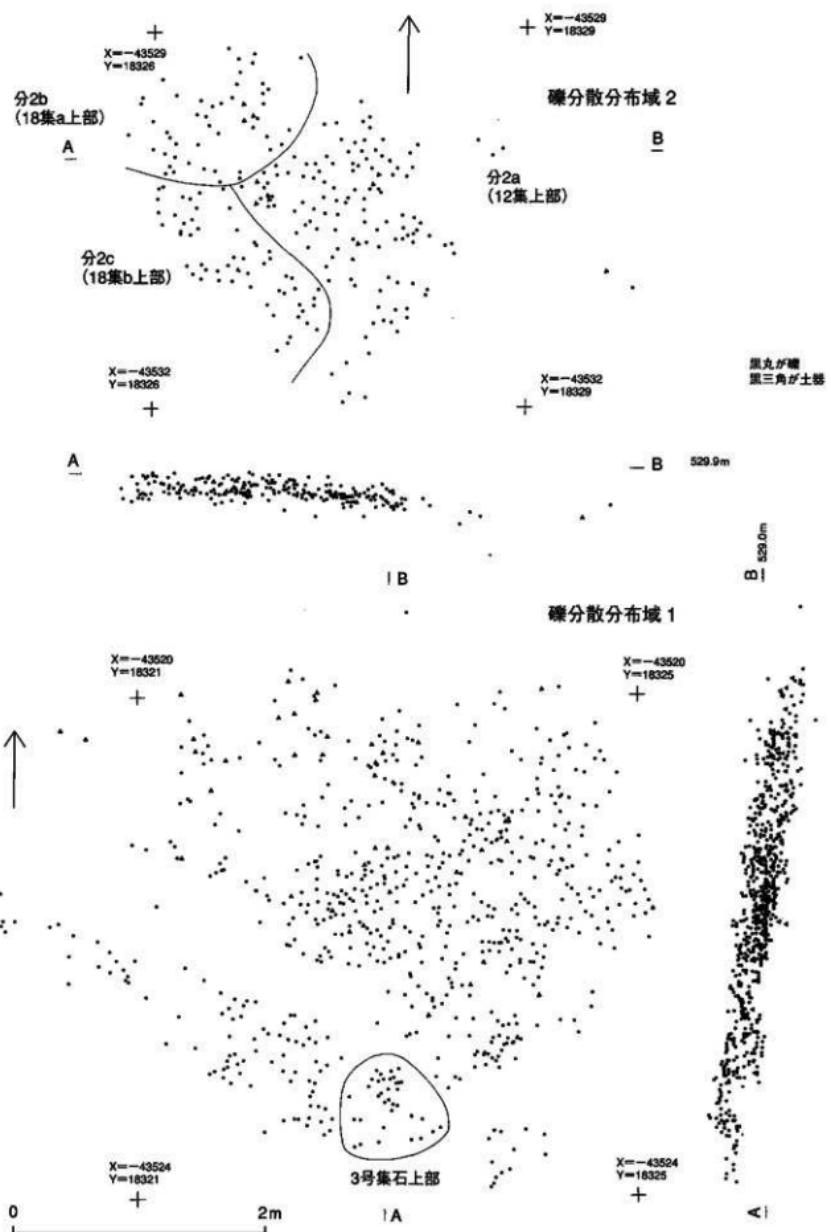
号集石は3集の西に隣接し $0.8 \times 1$ mの規模。直径1.3mの不整円形の平面で深さ35cmのポール状の土坑内にある。底部配石があり集石本体との間には間層はないが、土坑底部との間に10cmほどの間層がある。6号集石は集石群Aの東端部にあり、 $1.2 \times 1.4$ mの規模。直径1.4mの不整円形で深さ60cmの土坑の上部を厚さ50cmで閉塞する。底部配石ではなく、集石本体と土坑底部との間に30cmほどの間層がある。6集は8集と1個体の集石間接合個体を持つ。7号集石は集石群Aの北部、3集の南に隣接する。 $1.3 \times 1.5$ mの三角形状に分布する。 $1.2 \times 1.4$ mの梢円形で深さ40cmの土坑内にあり、底部配石を伴う。底部配石と土坑底部との間に10cmほどの間層が入る。7集は11集と1個体、14集と1個体の集石間接合個体を持つ。8号集石は集石群Aの中央部にあり、 $0.9 \times 1.4$ mの規模。直径1.4m、深さ20cmほどの浅い土坑の上部を厚さ40cmで閉塞し、土坑底面間に10cmの間層を持つ。底部配石を伴い $0.55 \times 0.75$ m、深さ10cmの円形土坑の中に納まっている。底部に2枚の大型の平石を敷き、その周囲に斜めに礫を配している。西側に立てられた礫が大型であったかも兜の鎧形に似る。なお、鎧形の右側と底石の右とが接合し礫石皿となった。9号集石は4集の北に隣接し、直径80cmの規模。 $1 \times 1.15$ m、深さ20cmの土坑を伴う。10号集石は集石群Aの西部にあり、直径1mほどの規模。 $1 \times 1.35$ m、深さ30cmの平面梢円形、断面ポール状の土坑が伴う。底部配石があり、土坑底部との間に10cmほどの間層がある。11集と1個体の接合個体を共有する。11号集石は集石群A中央にあり、 $0.7 \times 1.2$ mの規模。土坑は確認できなかったが、垂直分布の上下幅が最大40cmあり、土坑を伴っていた可能性がある。底部配石は伴わない。10集と接合関係を持つ。12号集石は中央区東部のローー11グリッド北部の集石群B内にある。 $1 \times 1.6$ mの規模で土器片が多数混在したり下底面から出土。中央下部には五領ケ台II式土器の埋設土器が見られた。埋設土器の周囲には焼土は確認できず、炉址としての機能は考えられない。埋設土器は直径60cm、深さ25cmの円形土坑の西側に正位で立てられていた。底部が取られていた。埋設土器を中心として半径1.5mほどの半円形の壁が南西側にあり、ピットが見られる。P1が深さ27.8cmと深いものの他は20cmより浅い。また、床面とおぼしき硬面化も見られなかった。半円形の掘り込みには18号集石bが $0.5 \times 1.5$ mの範囲で分布する。また、12集の北西には18号集石aがあり、直径1mで $1 \times 1.3$ m、深さ20cmの土坑を伴う。東側には17集があるが、12集がこれを切っている。13号集石は中央区の集石群Aの南に隣接し、直径70cmと直径50cmの2つの部分からなる。両者は $1.1 \times 1.9$ mで深さ20cmの梢円形の土坑内にある。14号集石は13集の東に隣接し、 $0.8 \times 1.1$ mの規模で、 $1.1 \times 1.4$ m、深さ40cmの土坑の上部を厚さ40cmで閉塞する。土坑底部との間に10cmほどの間層がある。7集と接合個体を共有する。15号集石は集石群Aの南端にあり、 $0.6 \times 1.8$ mの範囲に分散分布する。土坑は確認できなかったが30cmほどの垂直分布幅を持つ。16号集石は中央南区のローー15グリッド北端にあり、直径90cmの規模。 $0.9 \times 1$ mの底部で袋状を呈する土坑に70cmの厚さで納まっている。周囲に2基の浅い土坑がありこれを切っている。底部に10cm以上の間層がある。17号集石は集石群Bの東に位置し、 $1 \times 1.2$ mの規模。直径1.25mで深さ40cmの平面梢円形、断面ポール状の土坑を伴い、底部配石を持つ。それぞれの間に間層はない。19号集石は中央南区南端のローー16グリッド南東部にあり、直径60cmの規模。直径70cm、深さ20cmの円形、ポール状の土坑を伴う。底部との間に10cmの間層がある。20号集石は直径1m、深さ50cmの平面円形の土坑内に入っていた。底部に底部配石を伴う。礫分散分布域1は中央区の北でわーー9グリッドにある。 $4 \times 5$ mの規模で垂直分布幅は40cm。南部に3集上部がある。礫分散分布域2は中央区のローー11グリッド北部にあり、直径2.5mの規模。垂直分布幅は25cm。12集上部の分2a、18集a上部の分2b、18集b上部の分2cの3つの区域に区分できる。礫分散分布域3は中央区東端部にあり、 $3 \times 6$ mの規模で垂直分布幅50cm。

#### 4. 埋設土器（第28図）、単独出土土器（第33図）

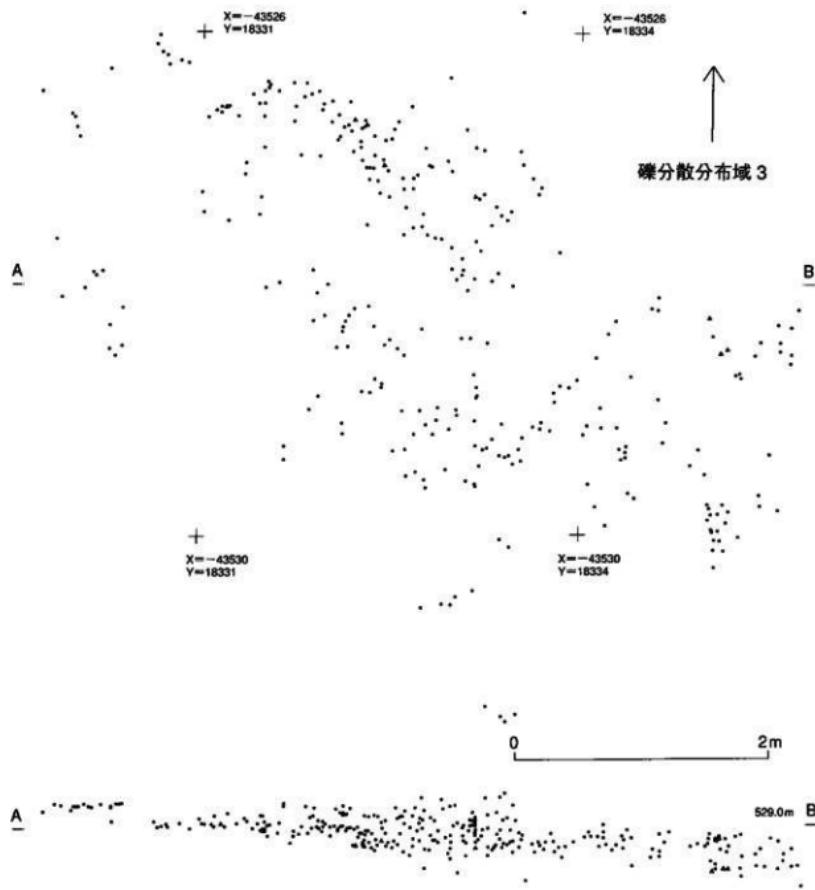
中央区東側のローー11グリッド北側の12号集石下から五領ケ台II式の埋設土器を確認した。詳細は12集で記載した。単独出土土器は2ヵ所で確認した。1号は東区中央のローー13グリッドのあり41土南に隣接する。底部を欠いた縦半分の個体が横臥した状態で出土。土器は五領ケ台I式。2号は東区南部のローー15グリッド南西部にあり、底部が立った状態で出土。磨製石斧、黒曜石原石、礫が1点ずつ隣接して出土。

#### 5. 土器

1住は第34・35図で五領ケ台I式土器。第34図1は北炉の1号炉体で胴部に縦位の結節繩文をもつ桶状把手付土器。2は北炉の5号炉体で斜格子状の集合沈線文土器の胴部。3は南炉の3号炉体でY字状文の桶状把手付土器。4は住

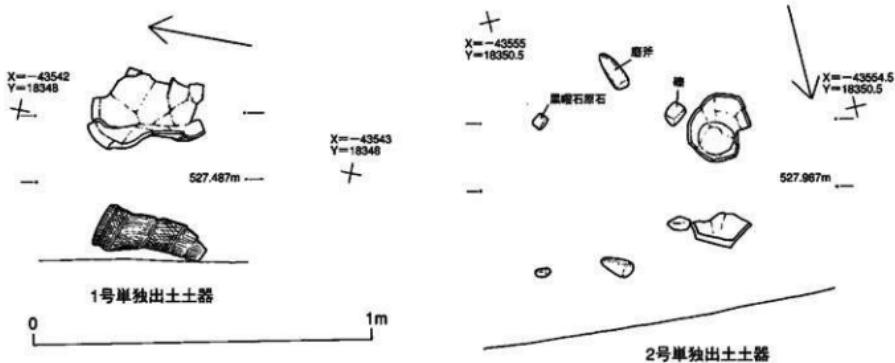


第31図 磨分散分布域 1・2 (1/40)

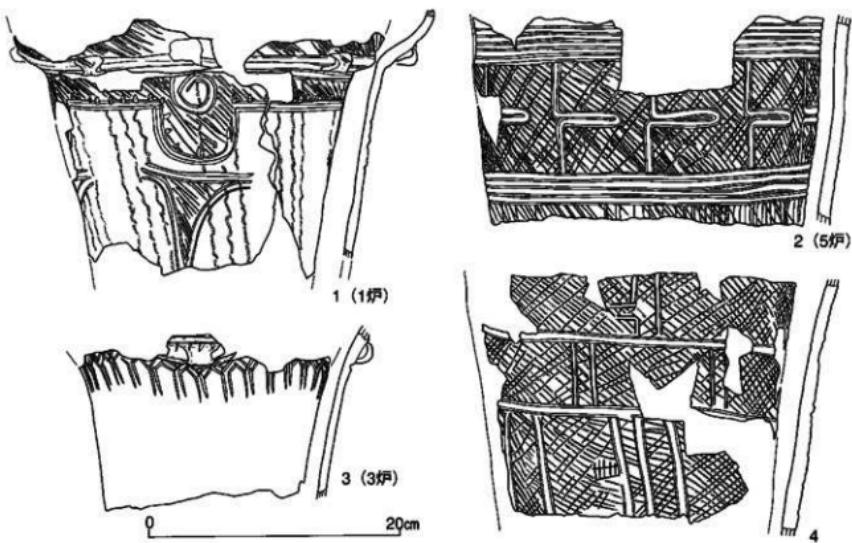


第32図 石器分散分布域 3 (1/40)

居跡中央の床面上出土で斜格子状の集合沈線文土器。第35図 1~18は集合沈線文土器で、1・2・4・9の口縁部が「く」字状に強く屈曲し、他の口縁部も強く内傾する。12が北炉の2号炉体。15が3号炉体内出土。19~36は繩文系土器。19・20・24・25は口縁部に細線文を持つ。21~23はY字状文、26・30は空間がない構造把手を持つ。36は浅鉢底部か。21が4号炉体。2住は第36・37図。第36図1は1号炉体で頭部に間隔の空く縦位の並行沈線文で口縁部の屈曲が弱い。2は3号炉体で粗い斜格子状集合沈線文土器。3は頭部に縦位条線。4~13は繩文地文に横位の押圧隆帯をめぐらせている。9は他と別個体。14~19は底部、第37図1~30が集合沈線文土器。31~45が繩文系土器。1~5が2号炉体。7が4号炉体。6が1号炉体内出土。31・36は細線文の文様帶の周囲を陰刻し浮かび上がらせしており、胎土も他の土器と違い黒く輝石が目立つ。32~34は細線文の文様帶を深い沈線で浮かび上がらせ、周囲に刺突を施している。3住は第38図。1~19、21~25が集合沈線文土器、20、26~32が繩文地文の土器。33が無文。27が炉体。3・5~13・25は細い沈線で比較的古い要素と思われる。

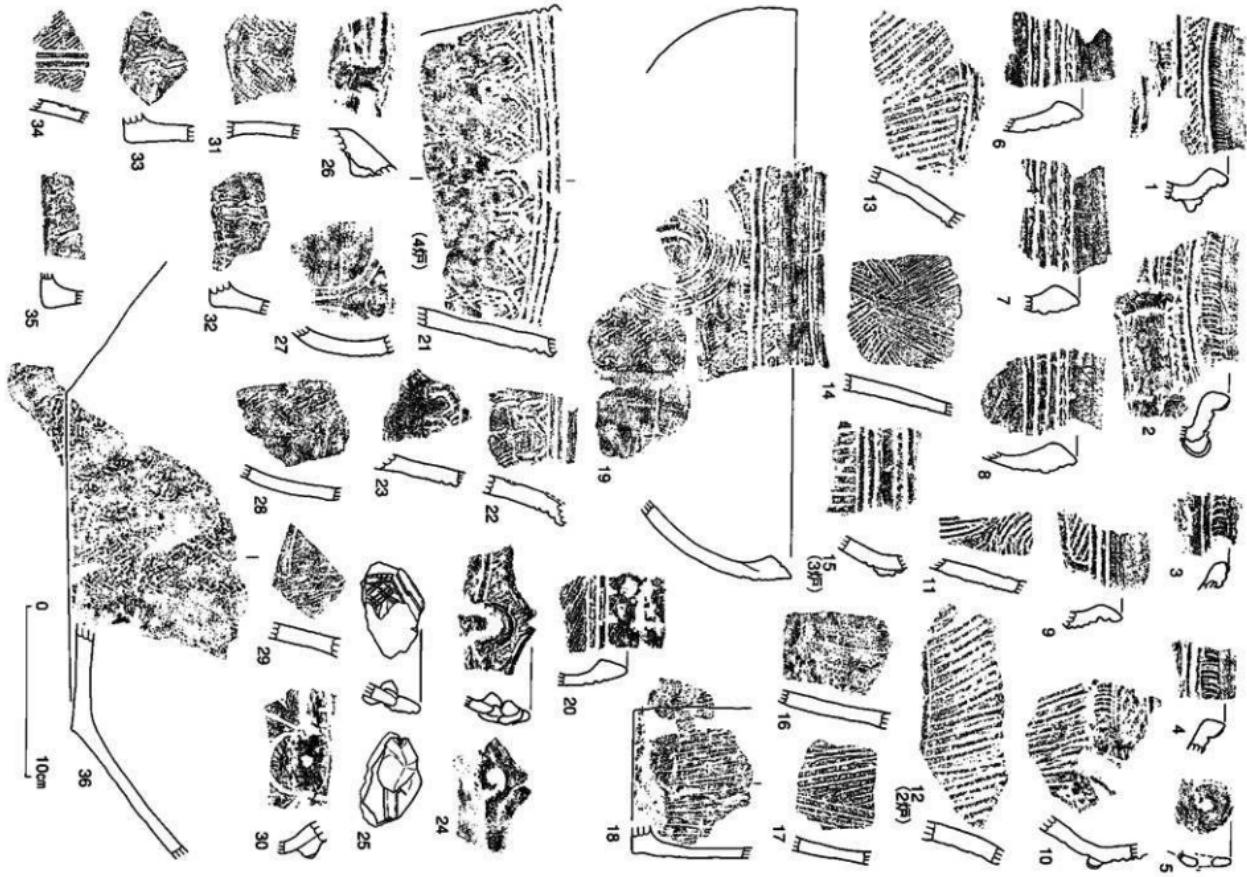


第33図 単独出土土器 (1/15)

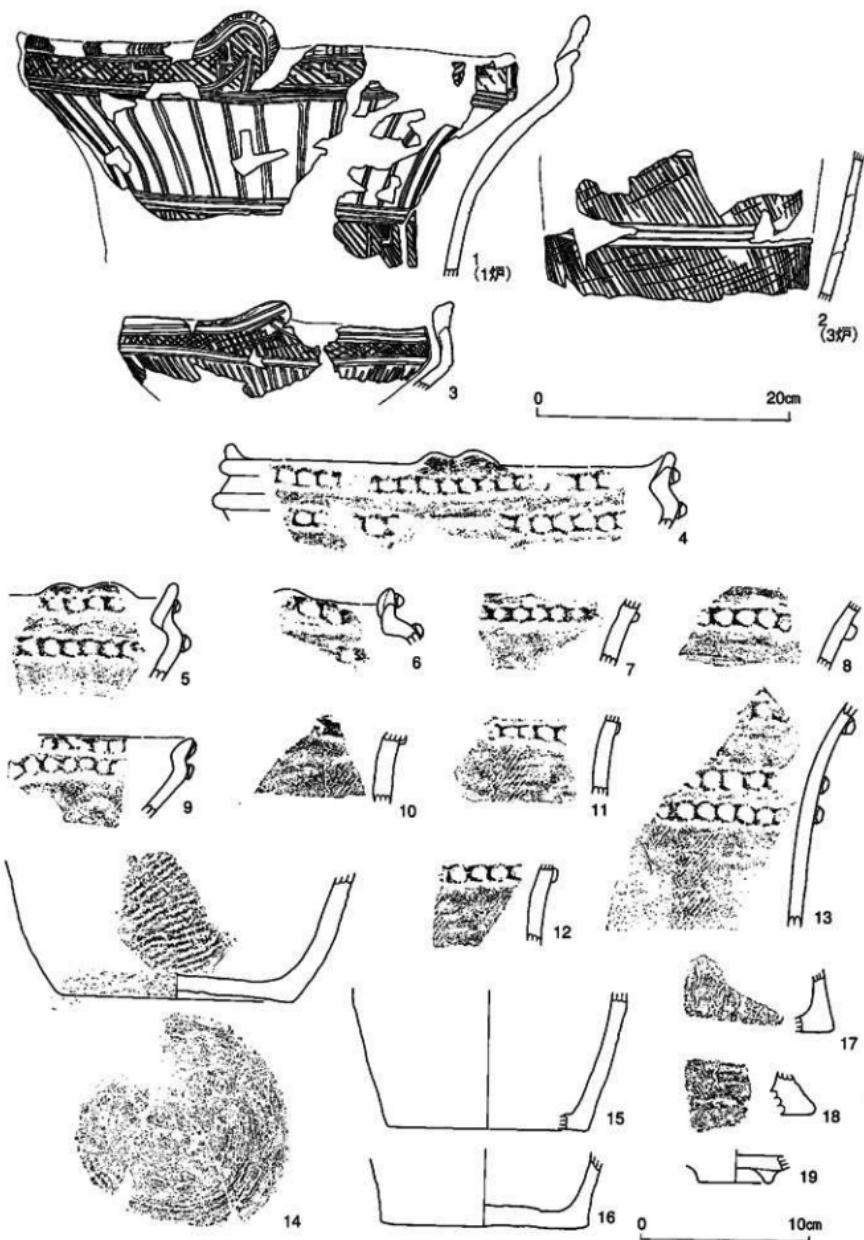


第34図 出土土器(1) (1/4) (1住戸址他)

土坑は第39~43図。ほとんどが五領ヶ台I式土器。第39図1・3は1土の集合沈線文土器。2は爪形文様で前期。4~6が5土。4が5土で細線文と押圧隆帯。5は5土で細線文。7~14が6土。7・8が集合沈線文土器、9~14が繩文系土器。14は縦位の隆帯があり五領ヶ台II式土器。15~30が8土。15~23は細かな集合沈線文土器。15は斜行沈線の上に格子状に細い粘土紐を貼付。24~28は繩文地文に押圧隆帯で口縁部は粗い斜行沈線の上に格子状に太い粘土紐を貼付。30は小形有孔飼付土器で底部は上げ底。31~35は10土。36~45は11土。すべて集合沈線文土器。39は小形土器。第40図はすべて12土。第43図12も12土。1~25が集合沈線文土器。26~43、第43図12が繩文系土器。15は口縁部内面に爪形文で浅鉢。17~25は同一個体で波状の口縁部に帯状の粘土板を貼付。口縁部直下にすだれ状の沈線文の文様帯を形成し、その下縁部にY字状文をめぐらしている。集合沈線と繩文系の折衷型と思われる。41には内面に

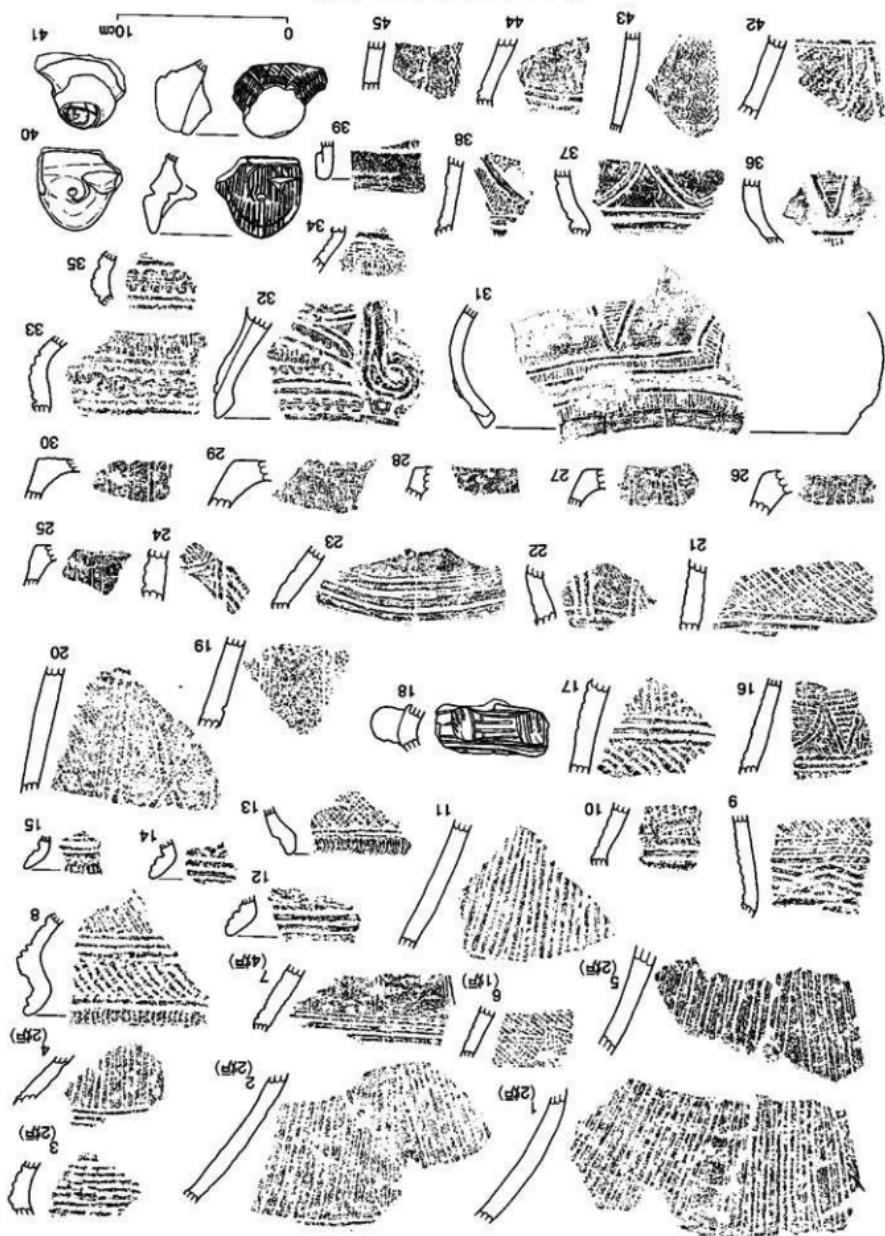


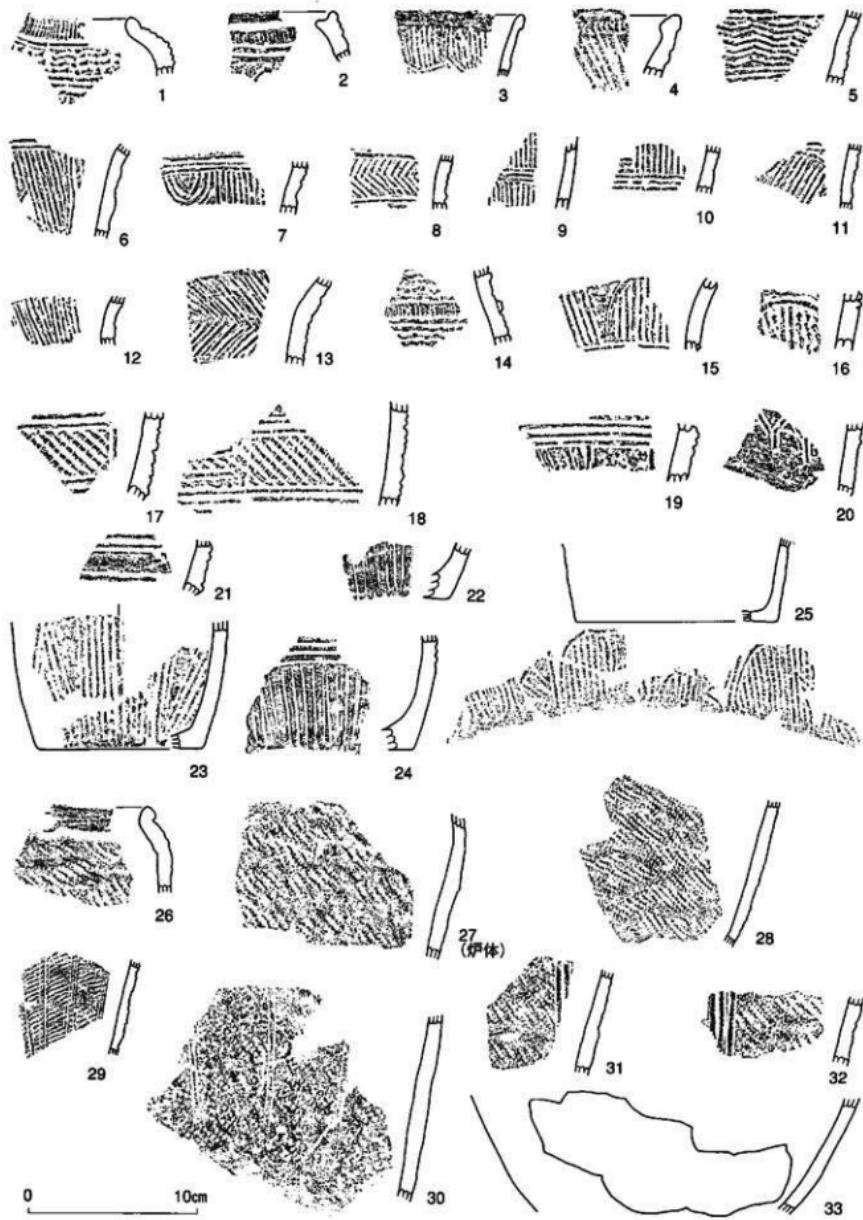
第35図 出土土器(2) (1/3) (1住)



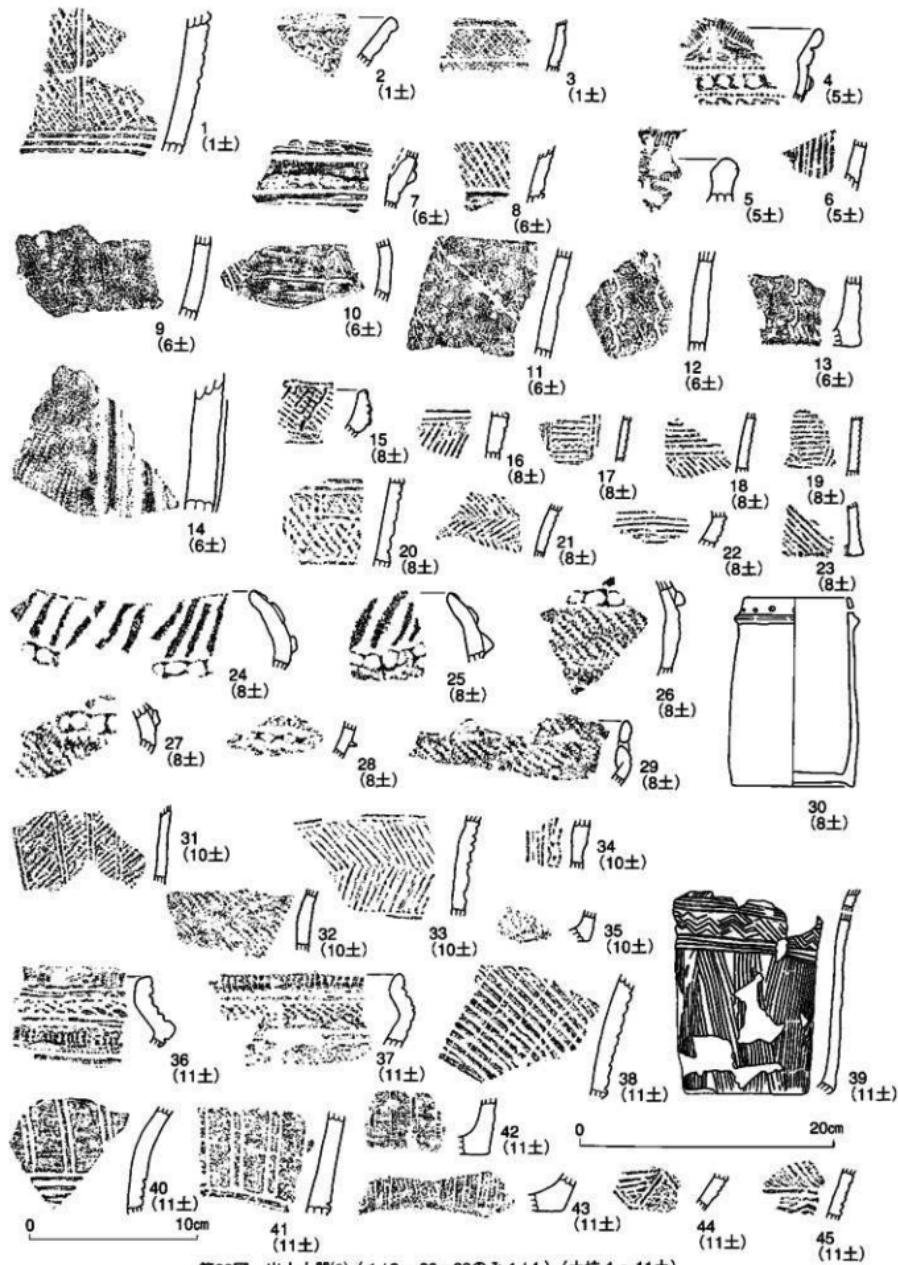
第36図 出土土器(3)(1/4・1/3)(2住炉址他)

第37圖 出土土器(4) (1/3) (2件)

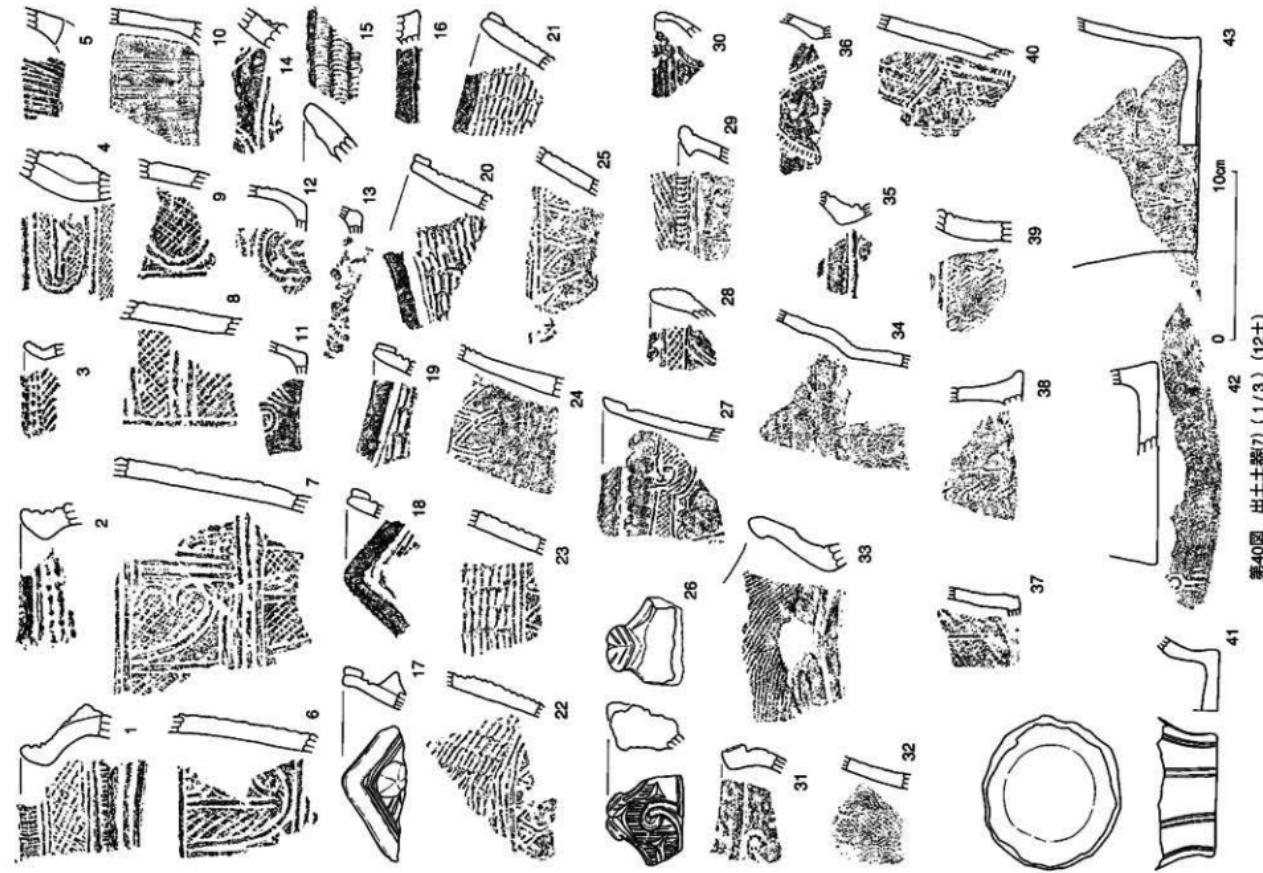




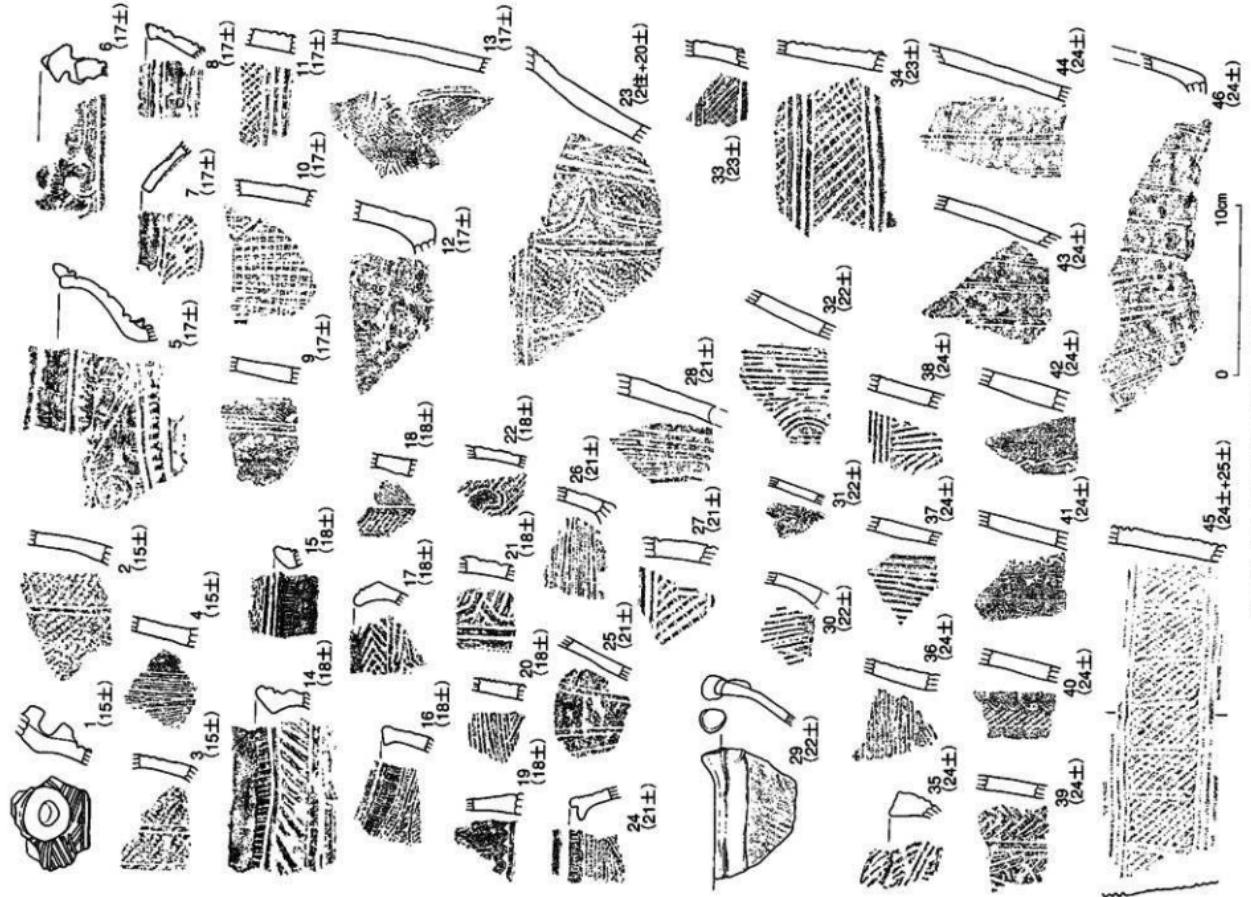
第38図 出土土器(5) (1/3) (3住)



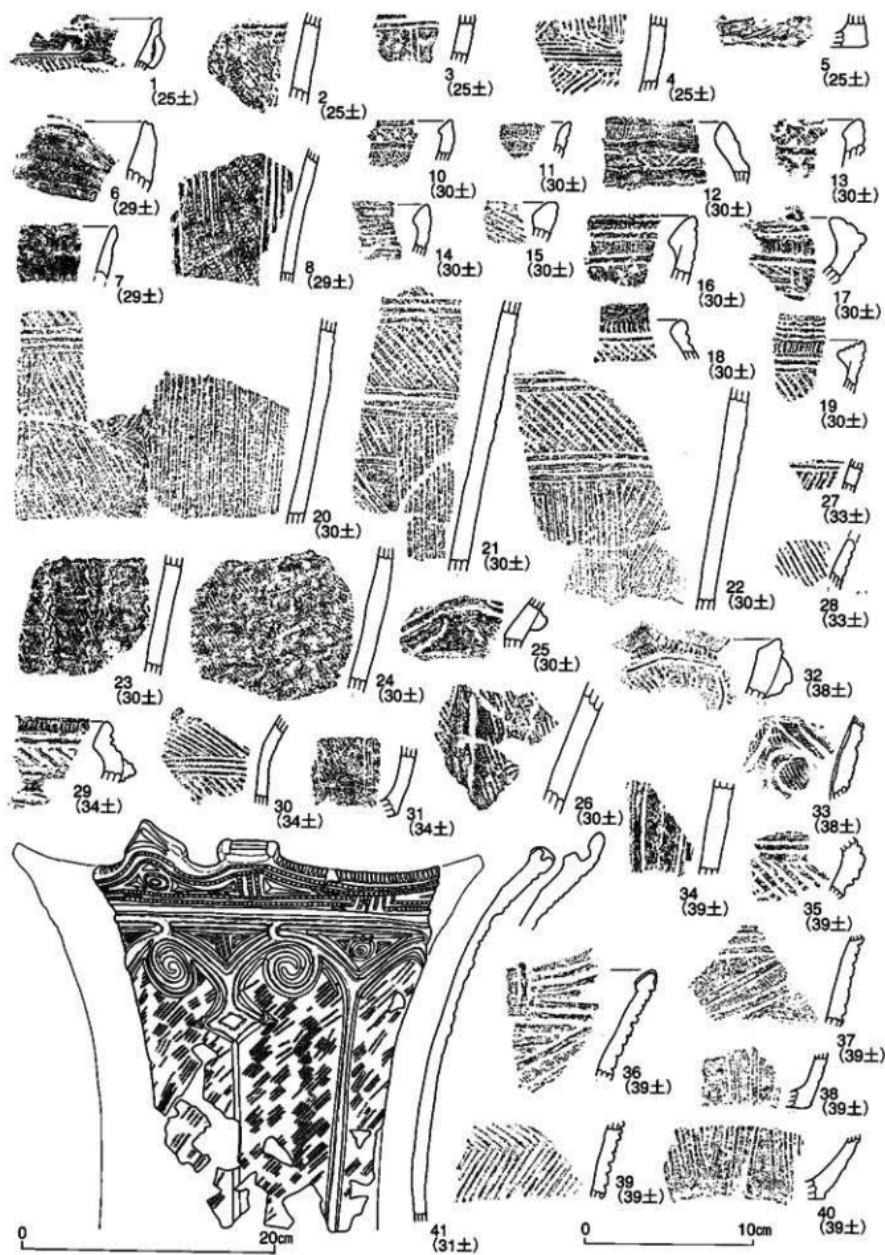
第39図 出土土器(6) (1/3, 30・39のみ1/4) (土坑1~11土)



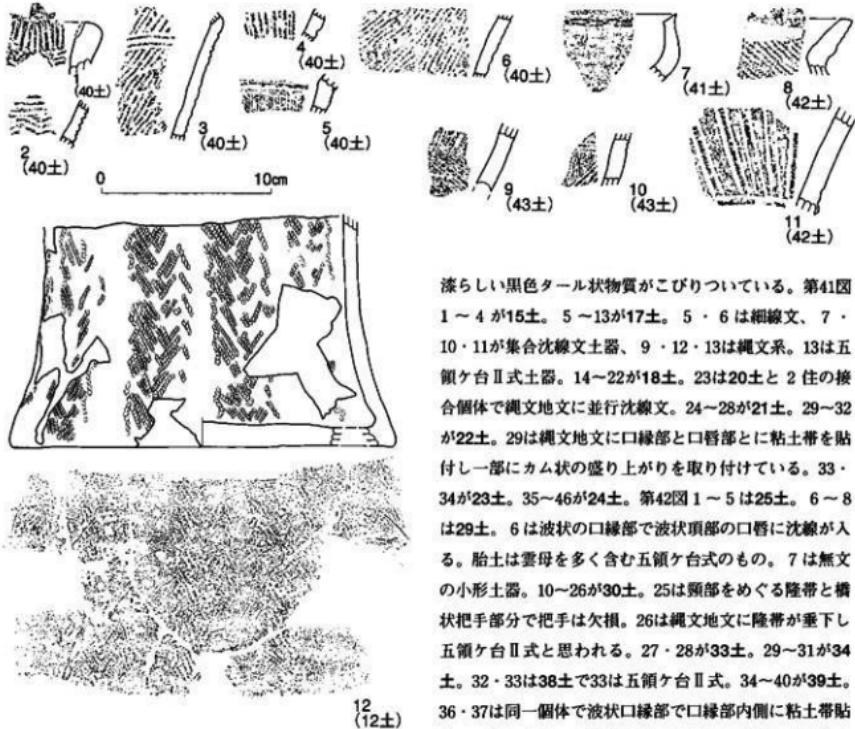
第40圖 出土器物 (1/3) (12±)



第41図 出土土器8 (1/3) (15~24±)



第42図 出土土器(9) (1/3, 41のみ1/4) (25~39土)



第43図 出土土器(10) (1/3) (40~43土, 12土)

31土で、直立して出土した大型破片。五領ケ台Ⅱ式。第43図1~6が40土。7が41土。8~11が42土。9~10が43土。12が12土で土坑上位に浮いて出土。

集石出土は第44~45図。大半が五領ケ台Ⅰ式土器。第44図1~8が1集。8は4集との接合資料。9~12が2集。13が3集。14~20が4集。18は五領ケ台Ⅱ式。21~26が6集。28~29が8集。30が7集。31~32が9集。33~38、第45図1~15が12集。第45図1~15は五領ケ台Ⅱ式土器。1は集石直下の埋設土器。16が14集。17~22が16集。23が18集。第46図は縦分散分布域。1が分1。2~5が分2。6~7が分3。3~5は五領ケ台Ⅱ式でそれ以外が五領ケ台Ⅰ式。

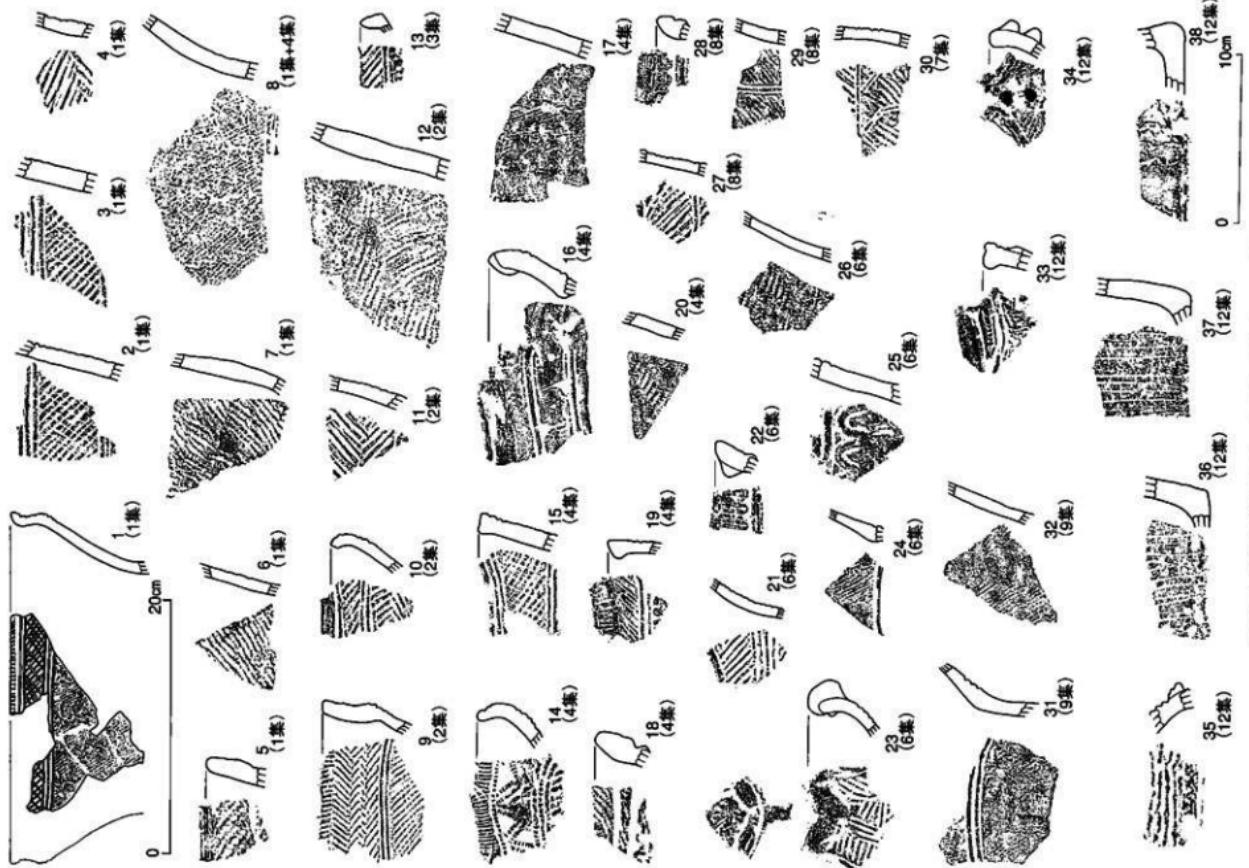
単独出土土器と遺構外出土も第46図。8が1号で五領ケ台Ⅰ式の集合沈線文土器。9が2号で五領ケ台Ⅱ式。10~14が五領ケ台Ⅰ式。15~17が五領ケ台Ⅱ式。

#### 6. 土製品

第47図1は1住の土偶の脚部と思われる。2は21土の無孔の臼形耳飾。外縁がふくらみ同時期の玦状耳飾からの変化が追える資料。3~4が中央南区出土の块状耳飾欠損品。

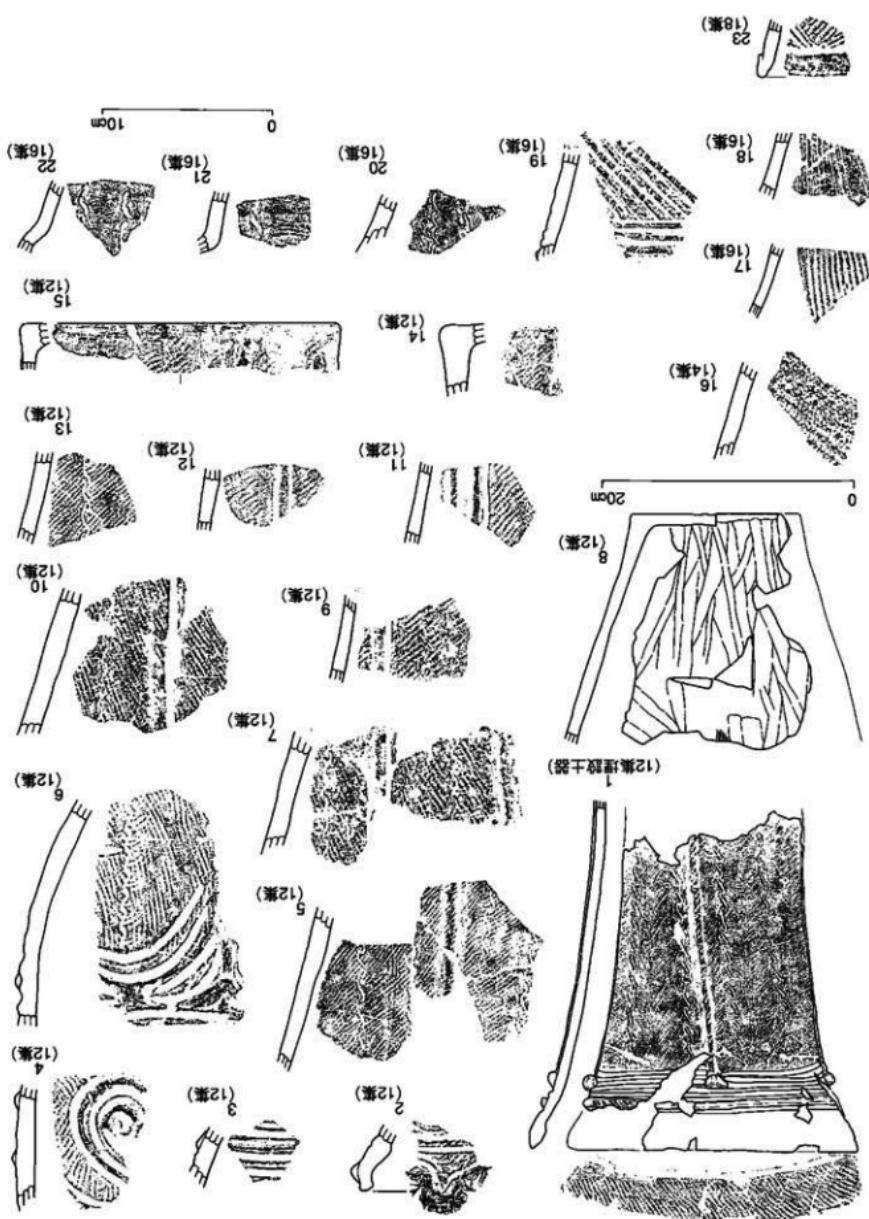
#### 7. 石器

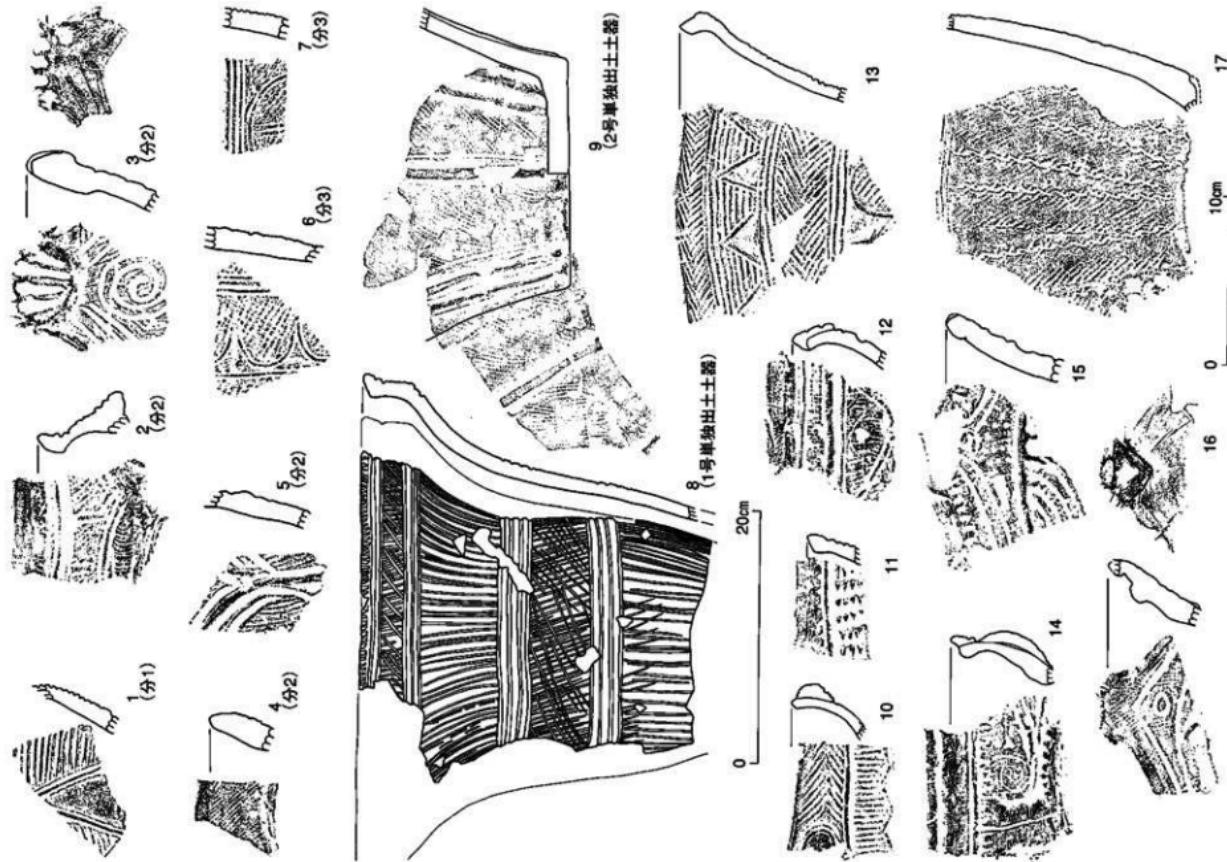
第1表に遺構出土の石器組成を示した。特徴的な石器について図化し第48~66図に示した。第48図1~10が石鏃。1が水晶、他は黒曜石で2が神津島産と思われる。4は円基、5~9は肩を持つ。11~12は黒曜石製の削器。13~15は二次加工剥片。第49~50図は小型の搔器。ここでの定義は「片面調整の凸刃・円刃で50°以上の刃角のもの」。



第44図 出土土器(1) (1/3, 1の3&1/4) (1~12集)

第45圖 出土土器(1/3, 1+2切面1/4) (12~18號)

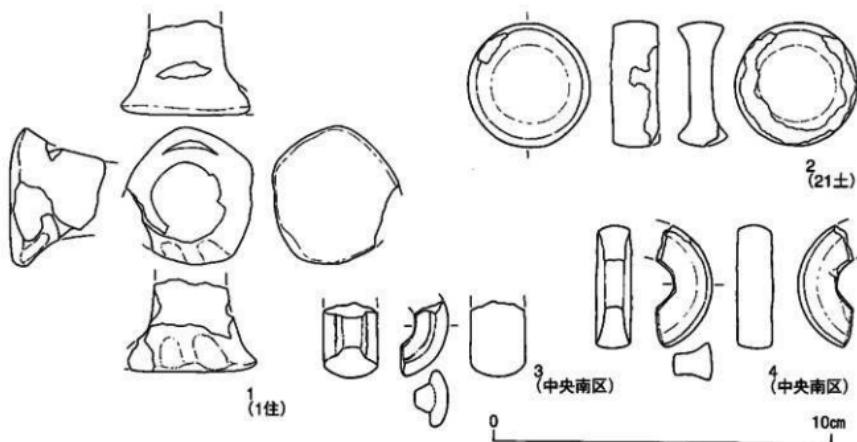




第46図 出土土器(3)(1/3、8のみ1/4) (縦分量分布図、遺構外)

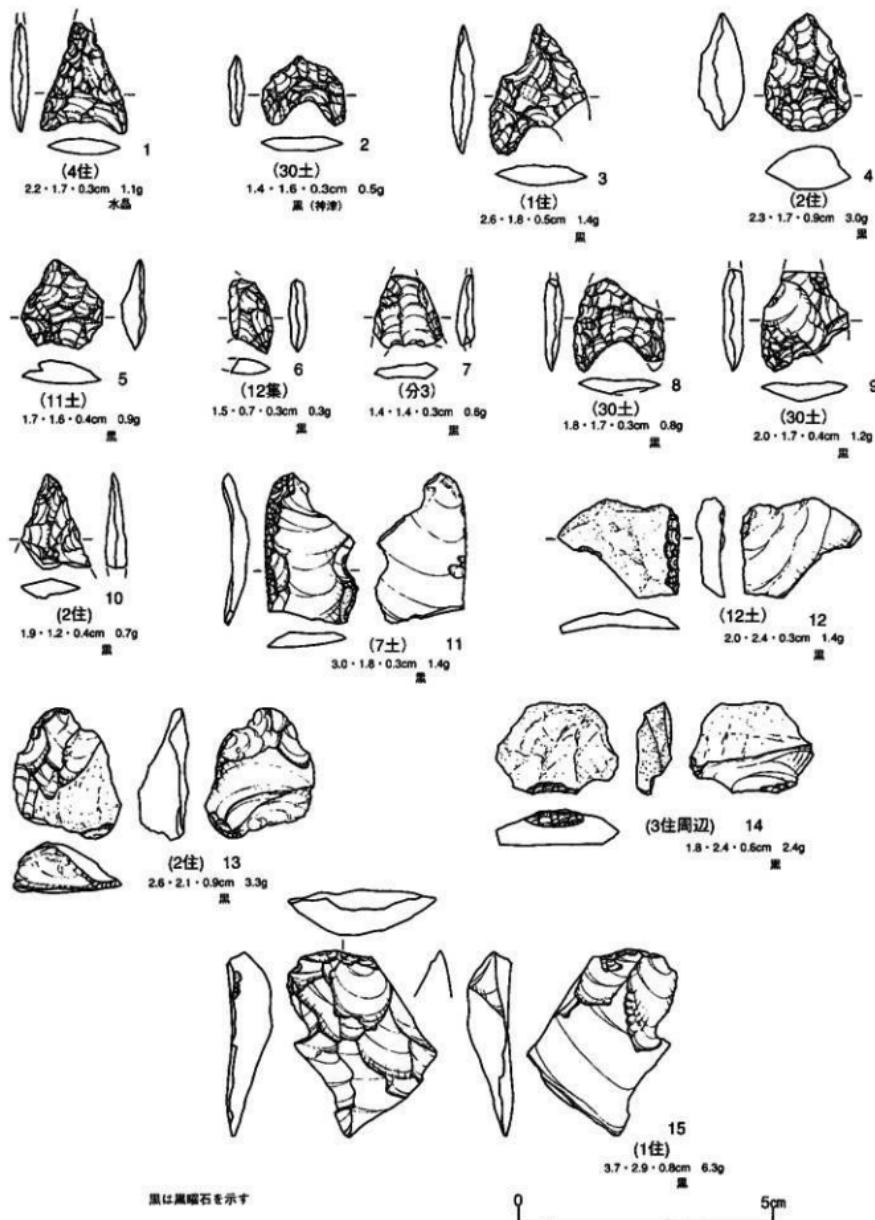
第1表 石器組成表

通撰名	時期	石器	削器	RF	種器	石器	剥形	石核	原石	石片	磨斧	打斧	被刃	大削	確認	敲石	磨石	石頭	○割片は黒曜石洞片、○碎片は黒曜石碎片、他の割片のMはメノウ、Dは打製石斧柄整削片、Dgは泥岩、Hはカルンフェルス		
																			○割片	○碎片	
1住	五I	1	0	1	1	0	1	2	1	1	5	0	0	0	1	0	2	26	10	D1M1	
2住	五I	2	1	1	3	5	5	1	4	0	0	6	0	0	0	1	3	4	35	6	M1D0D1
3住	五I	0	0	1	0	2	5	1	3	0	0	2	0	0	0	2	1	4	20	3	H1
4住	縄b	1	0	0	0	0	0	2	3	0	1	0	0	0	0	0	1	3	4	0	D1
5住	縄1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0
2土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
6土	縄1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0
7土	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	2	0	5	4
8土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9土	縄1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	6	1	D1
12土	五I	0	1	0	1	0	2	1	10	0	0	4	0	2	0	0	0	0	8	0	0
13土	縄1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
14土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
15土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
16土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
17土	五I	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0
18土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
19土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
21土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	D1
22土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
23土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
24土	五I	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	6	0	0
25土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
26土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
27土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
28土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
29土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	0	0	0	0	0	2	0	D2
30土	五I	3	0	0	0	0	2	4	6	0	0	1	0	1	0	0	0	0	2	4	0
31土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
32土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
33土	五I	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
34土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
35土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
36土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
37土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
38土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	D1
39土	五I	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	5	1
40土	五I	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3	0	D1
41土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
42土	五I	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	D1
43土	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
44土	縄b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1集	五I	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0
2集	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3集	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4集	五I	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0
5集	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6集	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
7集	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8集	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
9集	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0
10集	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
11集	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
12集	五I	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	3	1	D1
13集	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
14集	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
15集	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
16集	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	D1
17集	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	0
18集	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	D1
19集	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20集	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
分1	五I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
分2	五I	0	1	0	0	3	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	24	5
分3	五I	1	0	0	1	1	2	2	3	1	0	1	0	0	0	0	0	1	5	0	D2

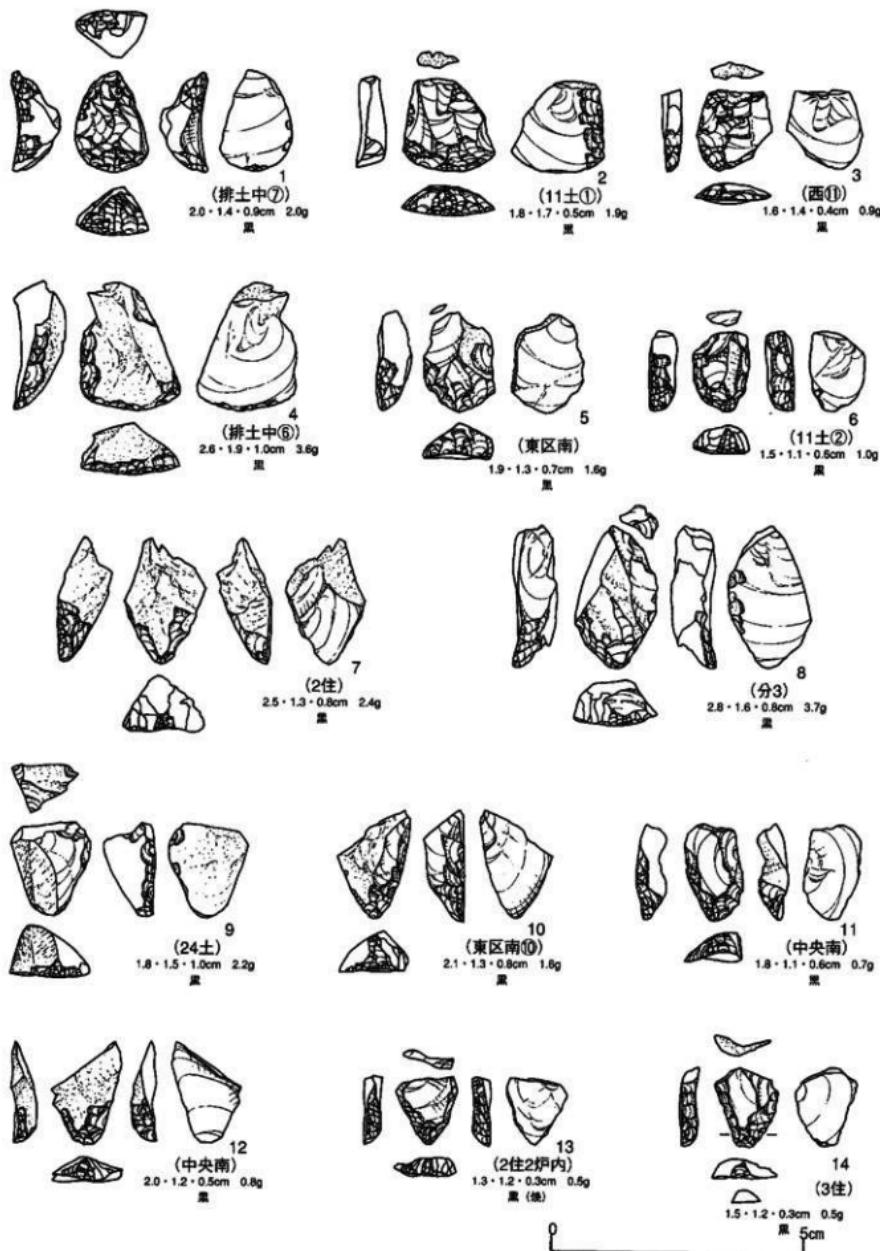


第47図 出出土製品 (2/3)

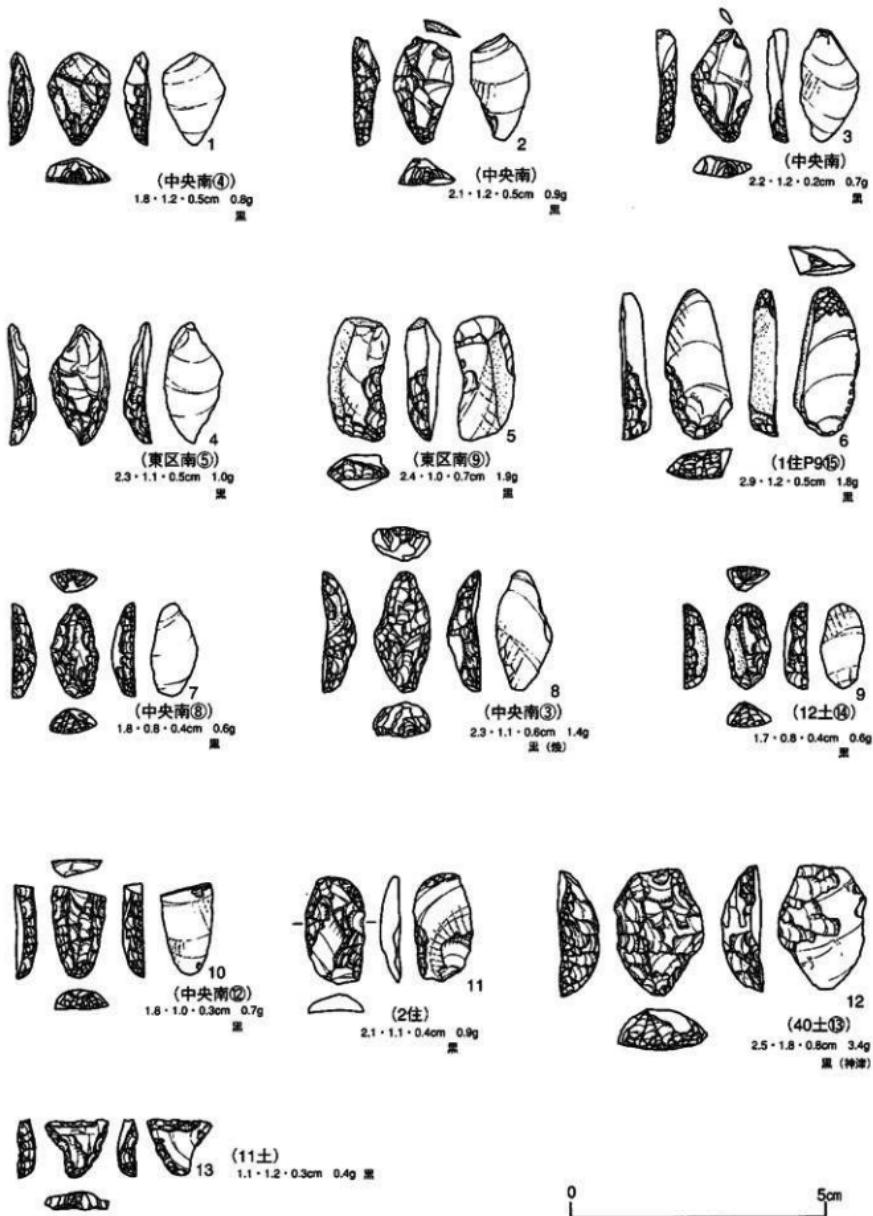
一般的にいう搔器は刃部半径 5 mm 以上で 1 ~ 6。本遺跡では 5 mm 未満 2 mm 以上が多い点 (第49図 7 ~ 14、第50図 1 ~ 10)。後者は刃部に接する両縁に直線的な急角度調整がなされ、全周するものもある (第50図 7 ~ 10)。第49図 10、第50図 7 ~ 10 の刃部 (7 は両端) に曲げ剥離が観察され、刃部を窓かせた搔き取りの動作が考えられる (アルカ太田氏教示)。第51図は石錐。ここでの定義は「平坦な両面調整で素材の一端を尖らせたもの」(1 ~ 6)、「比較的平坦な凹ないし直線の片面調整で素材の一端を尖らせたもの」(7 ~ 13)。第52図 1 ~ 5 は横形石器。6 ~ 10 は石核。第53図は黒曜石原石。すべていわゆるズリ石で 1 ~ 2 ~ 8 に分割剥離面が見られる。第54図 1 ~ 2 は横形石匙。3 ~ 4 は削器。5 は石槍。6 は小型磨製石斧。第55図は打製石斧。9 ~ 14 は 29 土内でまとまって出土。第56図 1 は粗製石匙。2 は横刃形石器。3 ~ 6 は大型削器。第57図 直線的な打撃痕を持つ敲石。3 は礫器。4 は小型磨製石斧。5 は赤色碧玉 (赤玉) の石核。第58図 1 は乳棒形磨製石斧の破片。2 は礫器。3 ~ 5 は敲打による剥離面と敲打面を持つ石器で 4 ~ 5 はナタ形を呈する。第58図 6 ~ 9、第59図は帯状の粗スリ面を持ち断面三角形の石器 (いわゆる稜ズリ石) で 6 ~ 9 が粗スリ面が幅 1 cm 以内、敲打による小剥離が見られる。第59図 1 ~ 5 は粗スリ面の幅が 1 ~ 3 cm で敲打による小剥離はあまり見られない。6 は諸説有り式期のスリ石。7 ~ 10 は光沢をもつ鏡面スリ面も持つもので粗スリ面の幅が 1.5 ~ 3.5 cm と広い。これらは素材種の石材や断面形態、大きさが近似し一連の作業に供されたものと思われる。11 は粗スリ面と敲打剥離が弧状に展開する半月状の形態を有する。鏡面スリ面も持つ。第60図は断面円ないし楕円形で枕状を呈するスリ石で、粗スリ面幅が 2 ~ 5 cm と幅広で、1 ~ 3 が鏡面スリ面を広く持ち小口を敲打痕が覆う。2 は幅広の粗スリ面のみ。4 ~ 7 は広口面が両面鏡面スリ面、横口面が両面粗スリ面、小口面が両面敲打痕が覆ういわゆるセンケン石。粗スリ面幅は 2.5 ~ 5 cm と幅広。4 ~ 5 は凹石でもあり 6 ~ 7 は鏡面スリによって凹が消失した可能性がある。8 ~ 10 は平面・断面ともに楕円形で広く鏡面スリ面が覆う。横口面に粗スリ面が若干残存する。横口の粗スリの後に広口の鏡面スリ作業の順で作業が繰り返された可能性が高い。9 では凹が残存する。4 ~ 7 は安山岩で土坑内、9 ~ 10 は花崗岩で集石内であり、作業動作は近似するものの作業対象などが異なる可能性も考えられる。第61図 1 ~ 3 は棒状の敲石およびスリ石。4 は敲石。5 ~ 6 は黒曜石皿で 6 は広く敲打面も持つ。第62 ~ 66 図は石皿の類。第62図 1 は粗い鏡面スリ面を持つ。2 は両小口を錯交状に剥離した加工皿。3 は一部に鏡面スリ面を持つ。第62図 4 ~ 5、第63 ~ 66 図は平坦面を広く鏡面スリ面が覆う疊石皿。第65図 4 のみ安山岩製の一般的な石皿。他の疊石皿は花崗岩製。



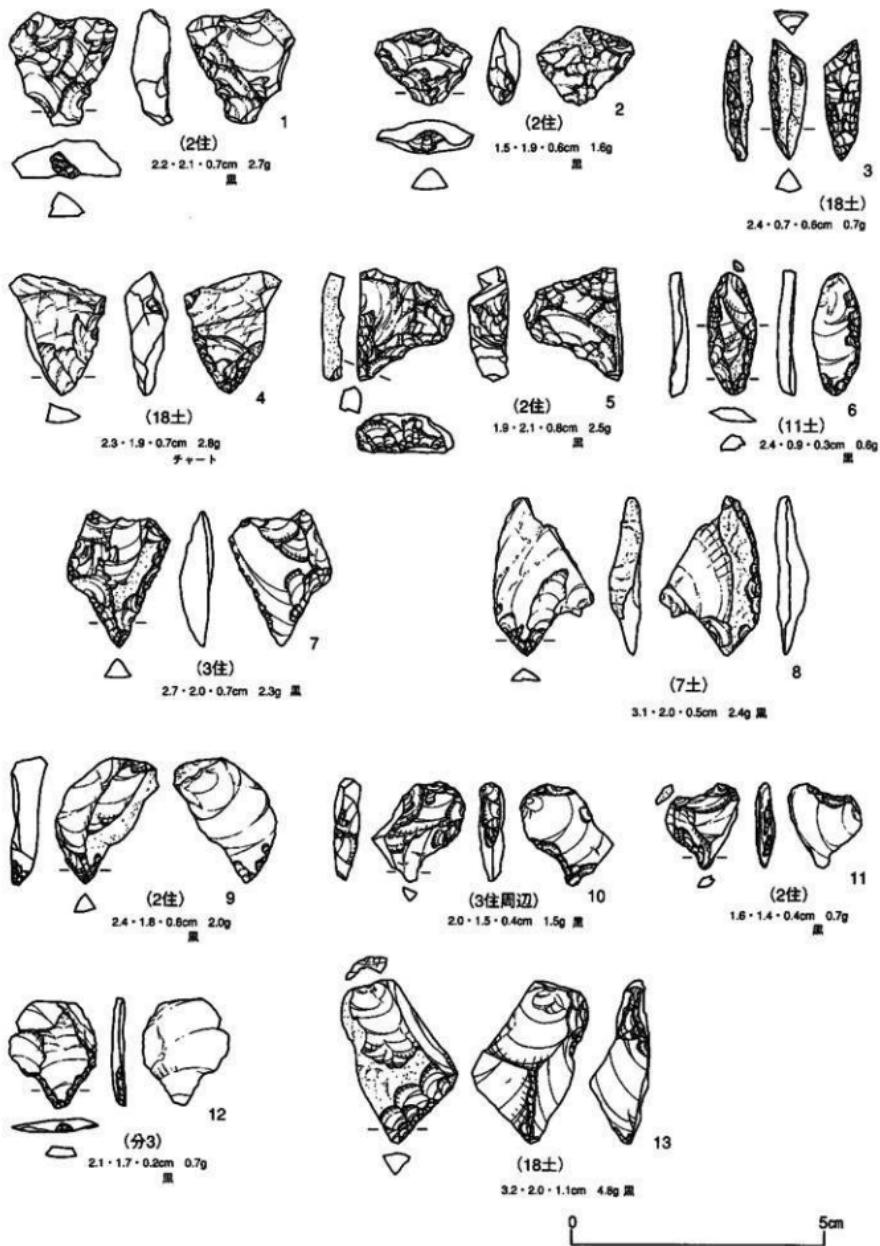
第48図 出土石器(1) (1/1) (石鎚、削器、二次加工剥片)



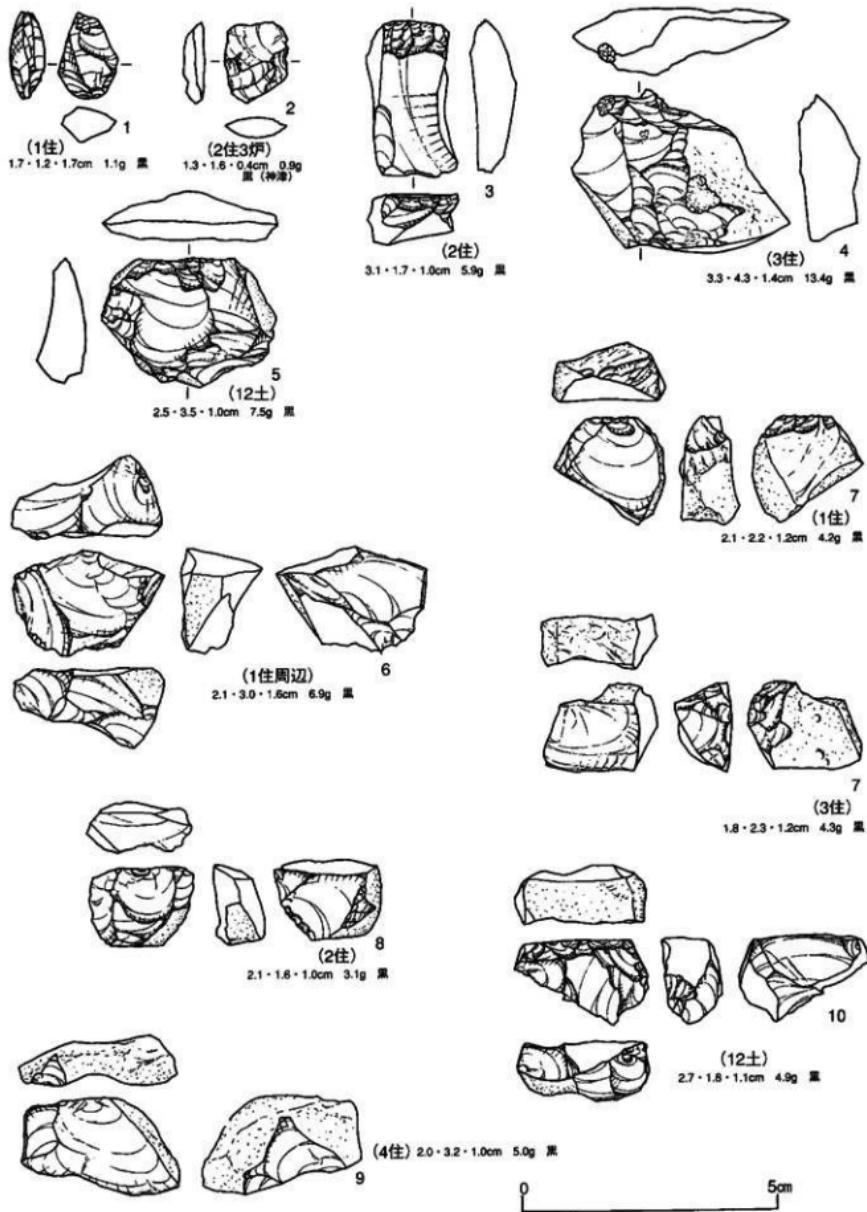
第49図 出土石器(2) (1/1) (小型搔器、丸番号は使用痕分析番号)



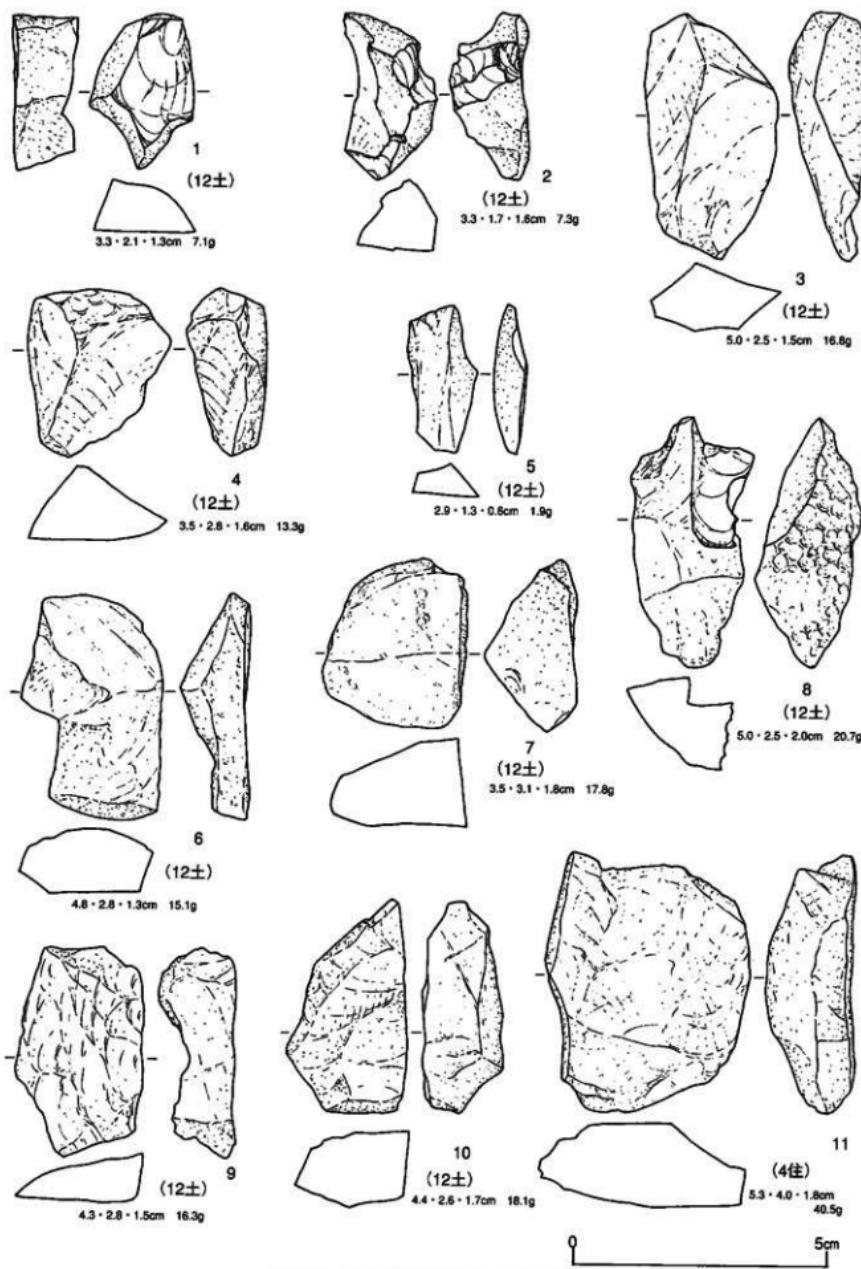
第50図 出土石器(3) (1/1) (小型搔器、丸番号は使用痕分析番号)



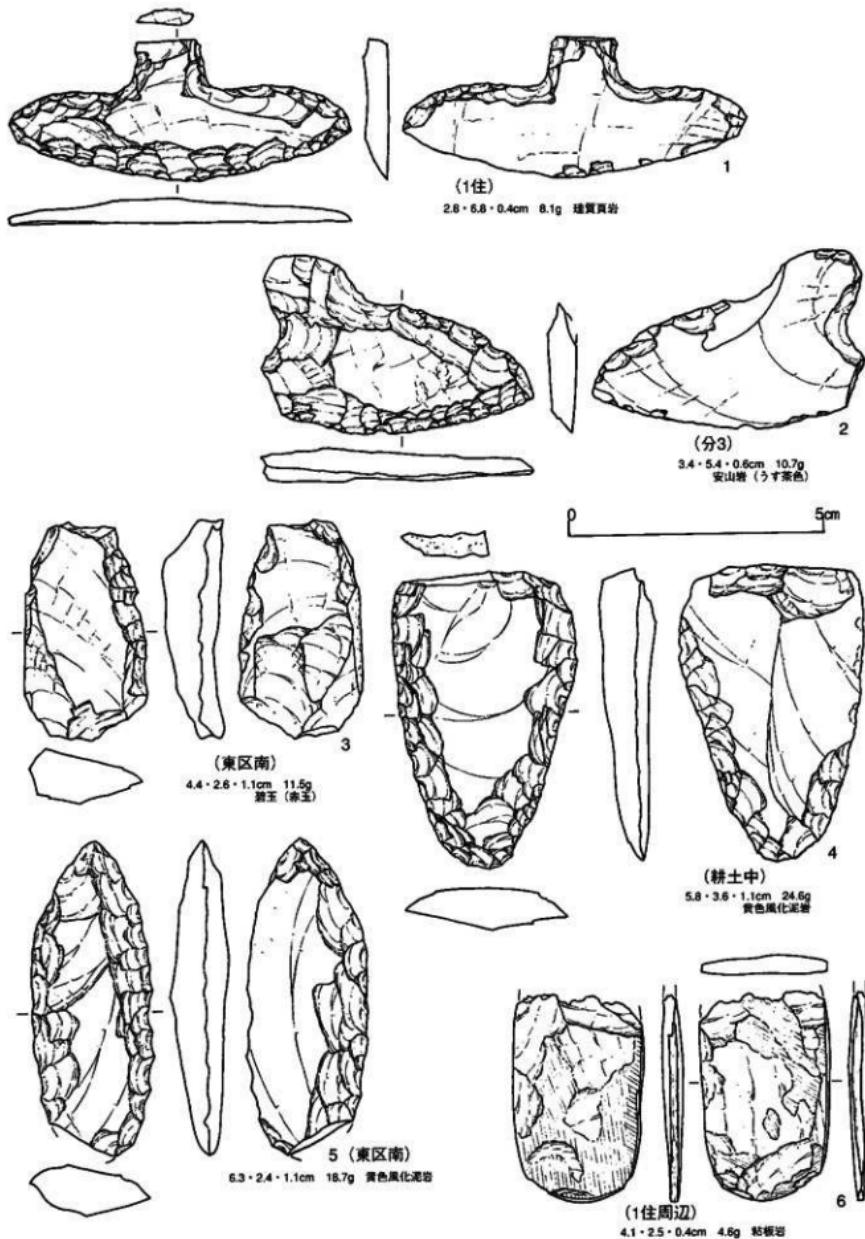
第51図 出土石器(4) (1 / 1) (石錐)



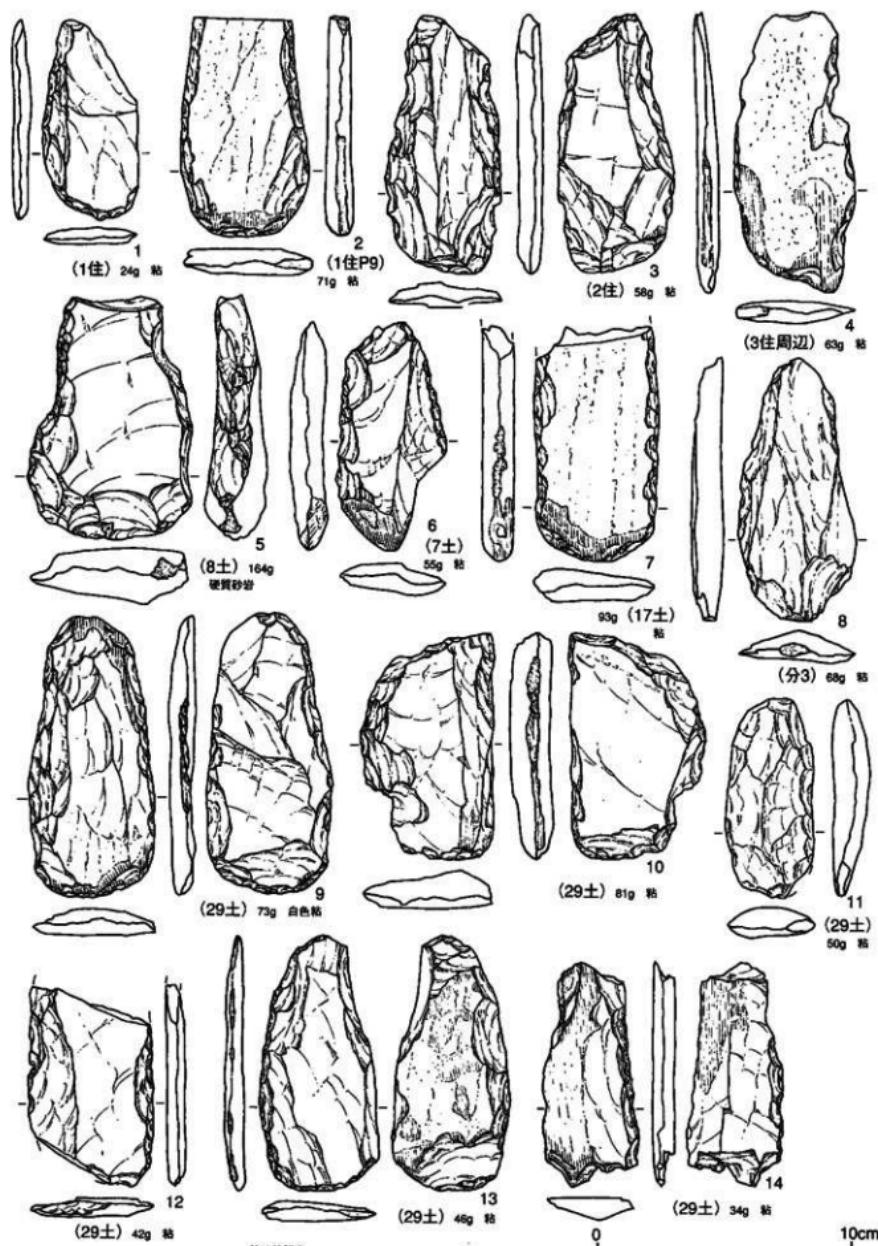
第52図 出土石器(5) (1/1) (楔形石器, 石核)



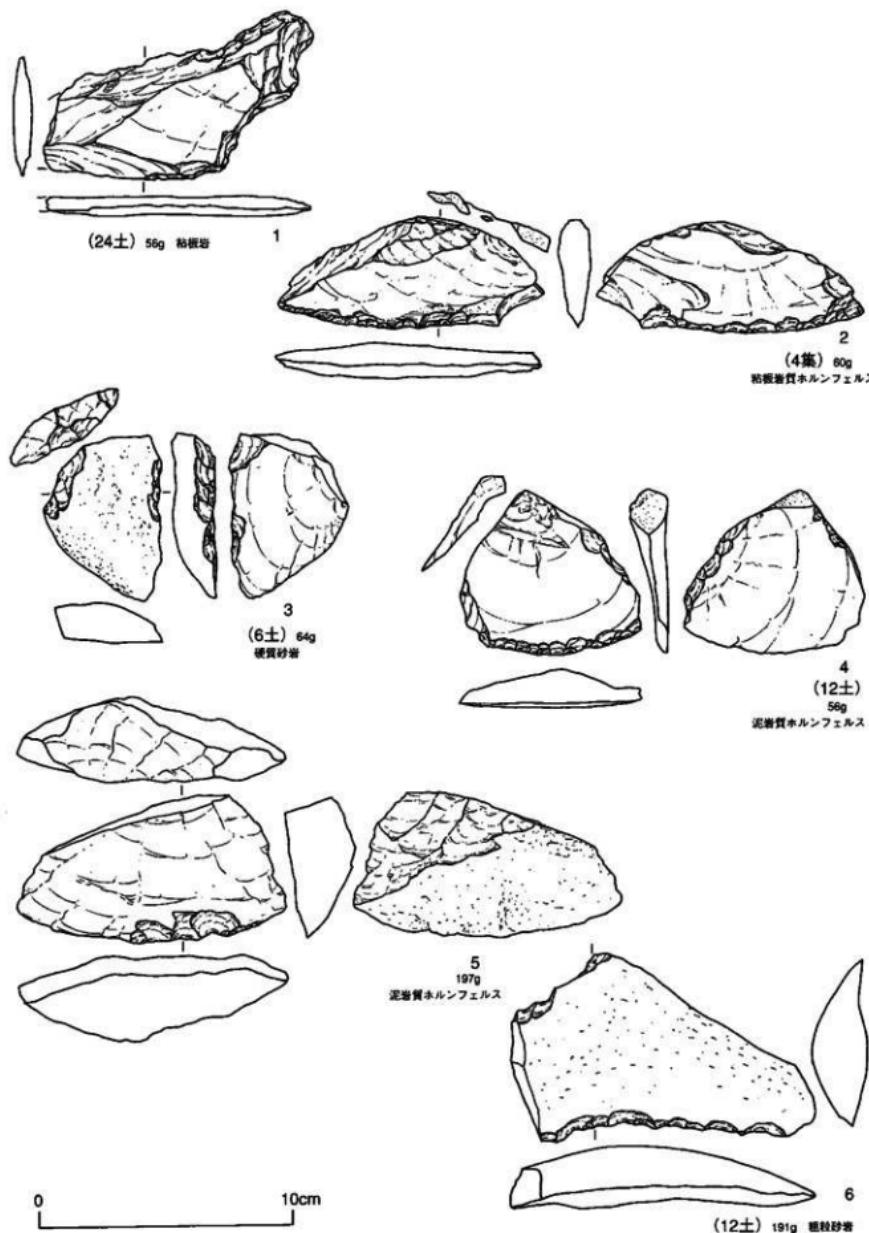
第53圖 出土石器(6) (1/1) (黑曜石原石)



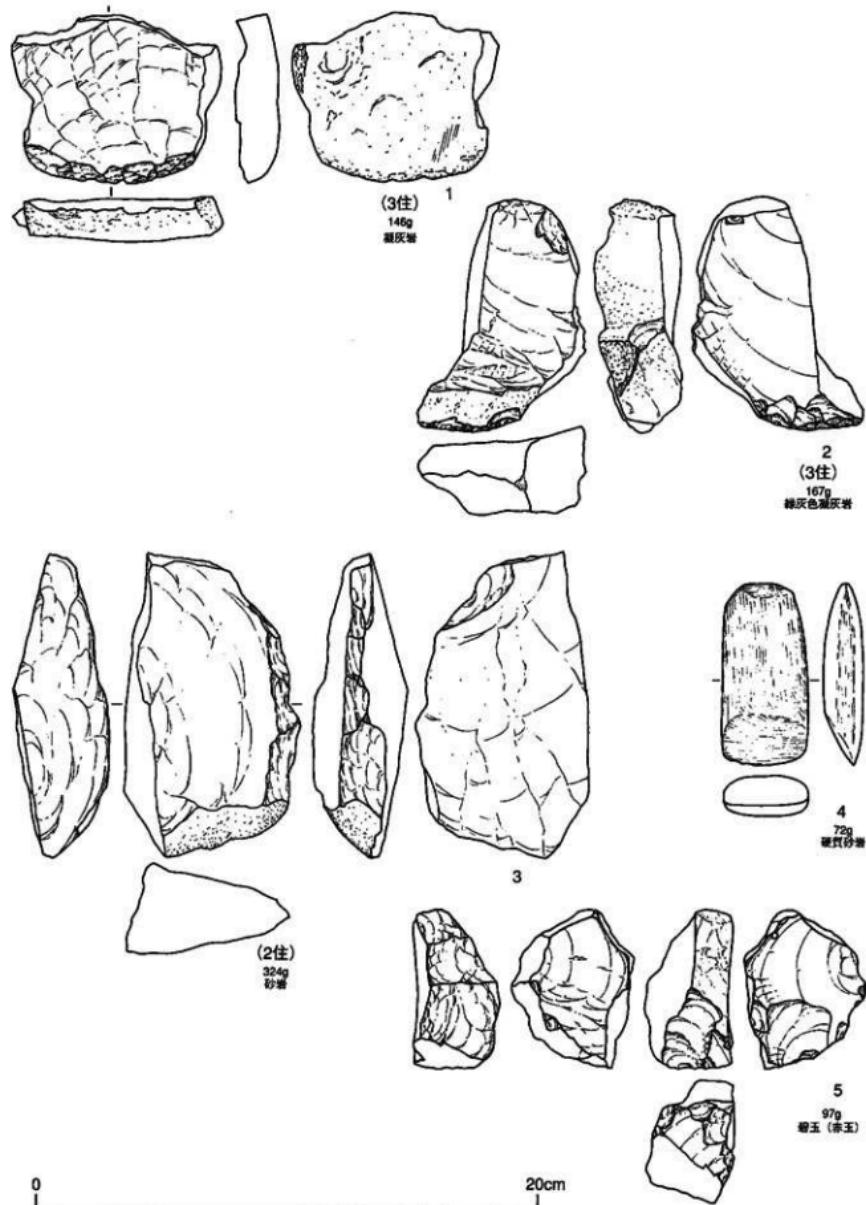
第54図 出土石器(7) (1 / 1) (石匙, 削器, 石槍, 磨製石斧)



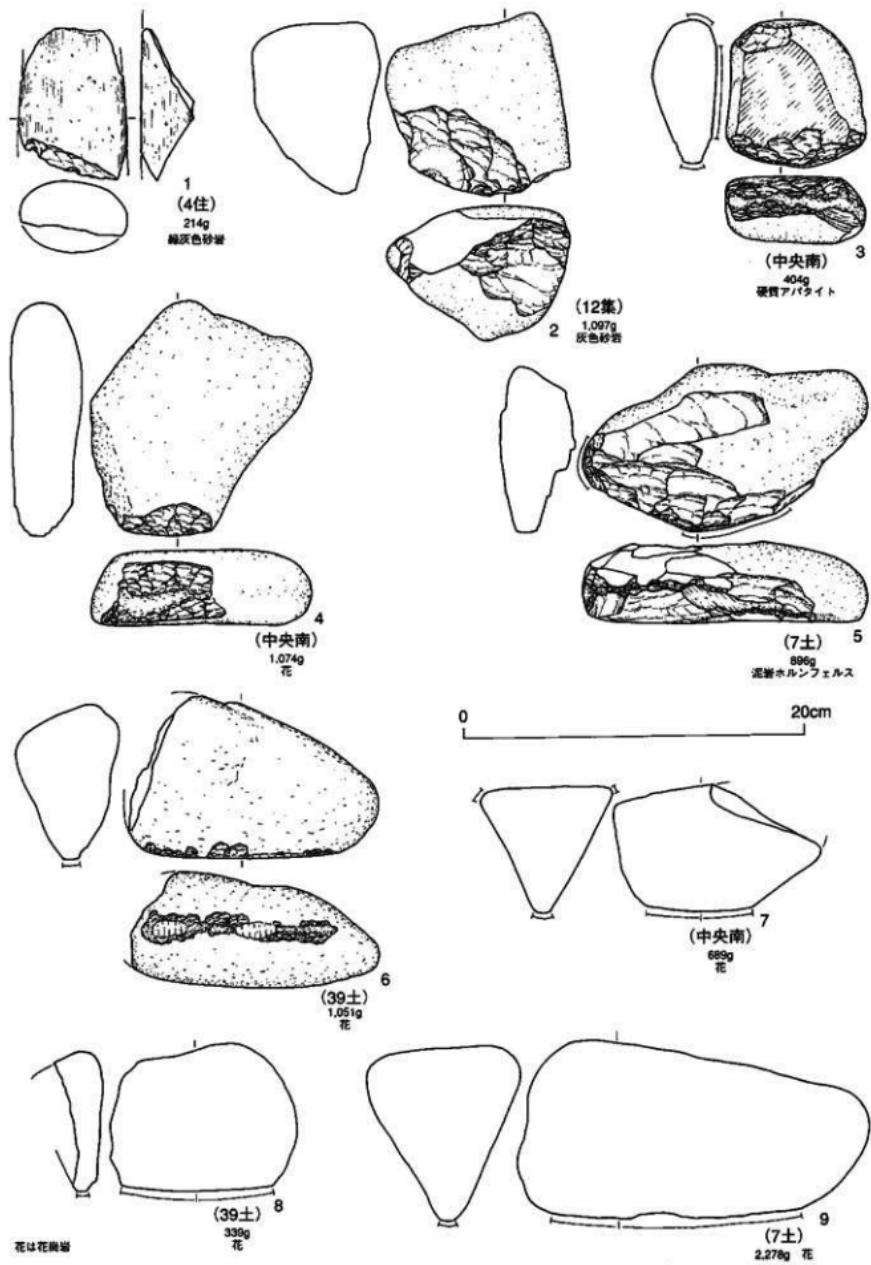
第55図 出土石器(6) (1 / 2) (打製石斧)



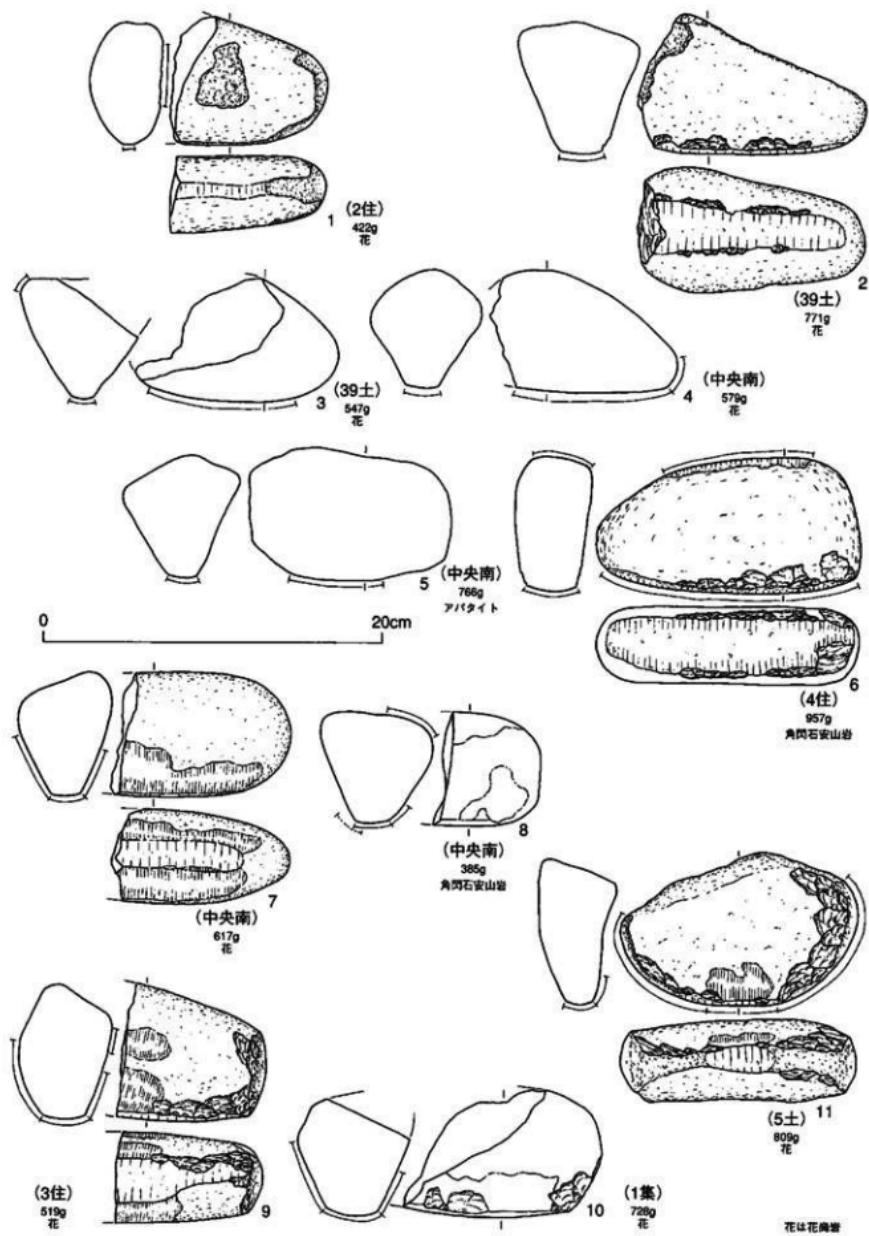
第56図 出土石器(9) (1/2) (粗製石匙、横刃形石器、大型削器)



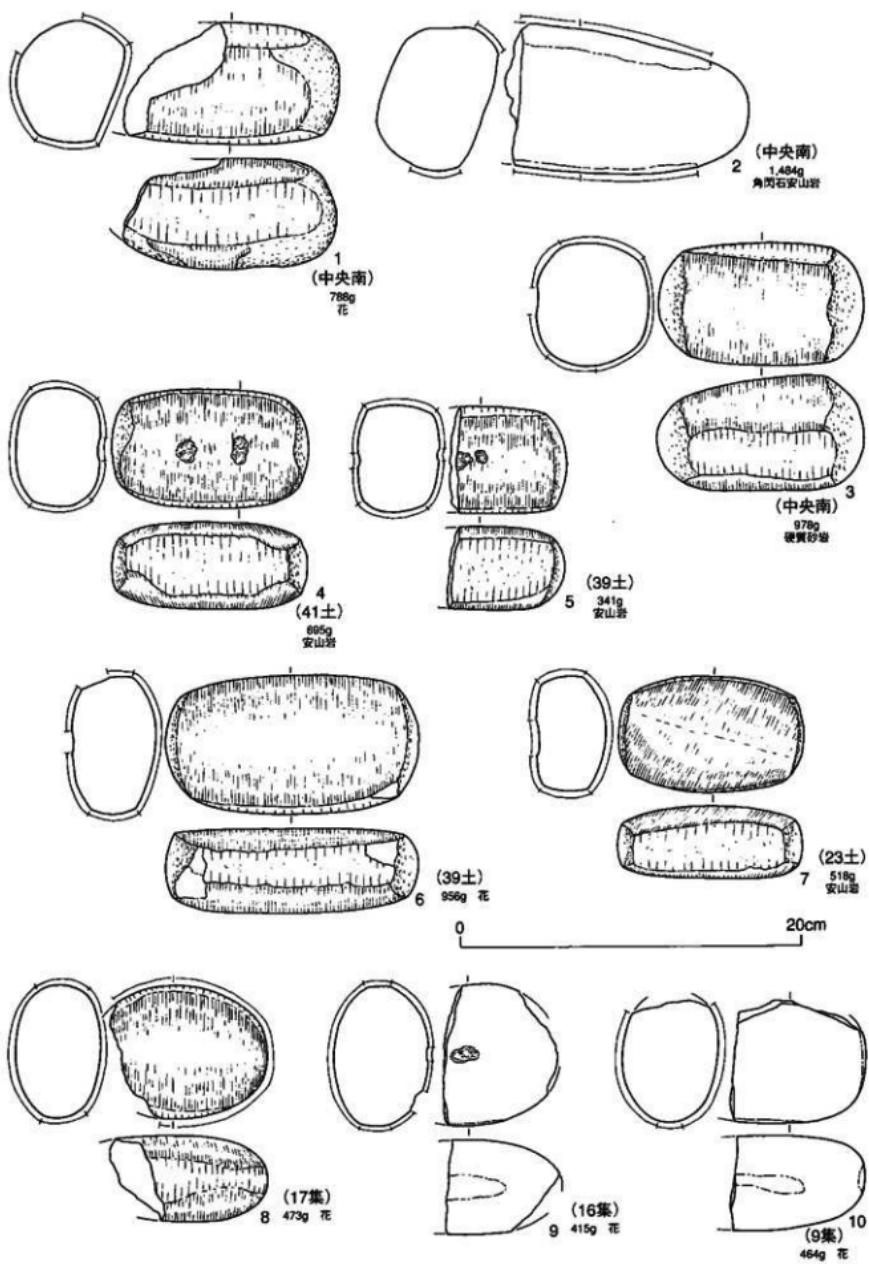
第57図 出土石器(10) (1/2) (敲石、礫器、小型磨製石斧、石核)



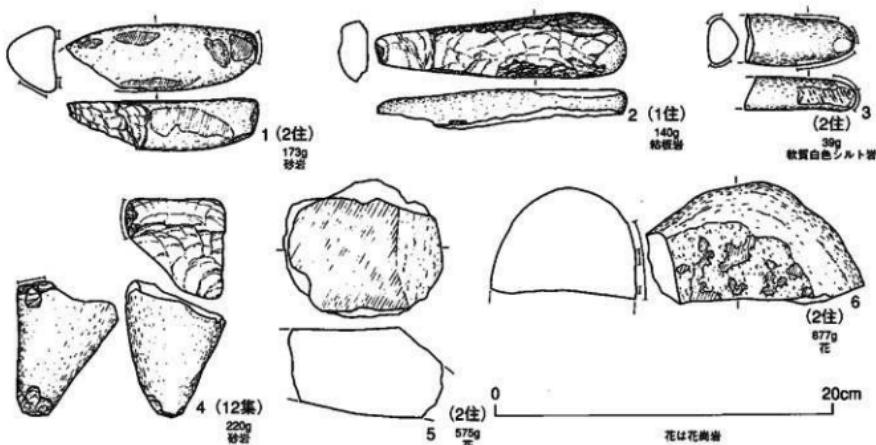
第58図 出土石器(II) (1/3) (磨製石斧, 碾器, 敲石, スリ石)



第59図 出土石器(1/3) (スリワ)



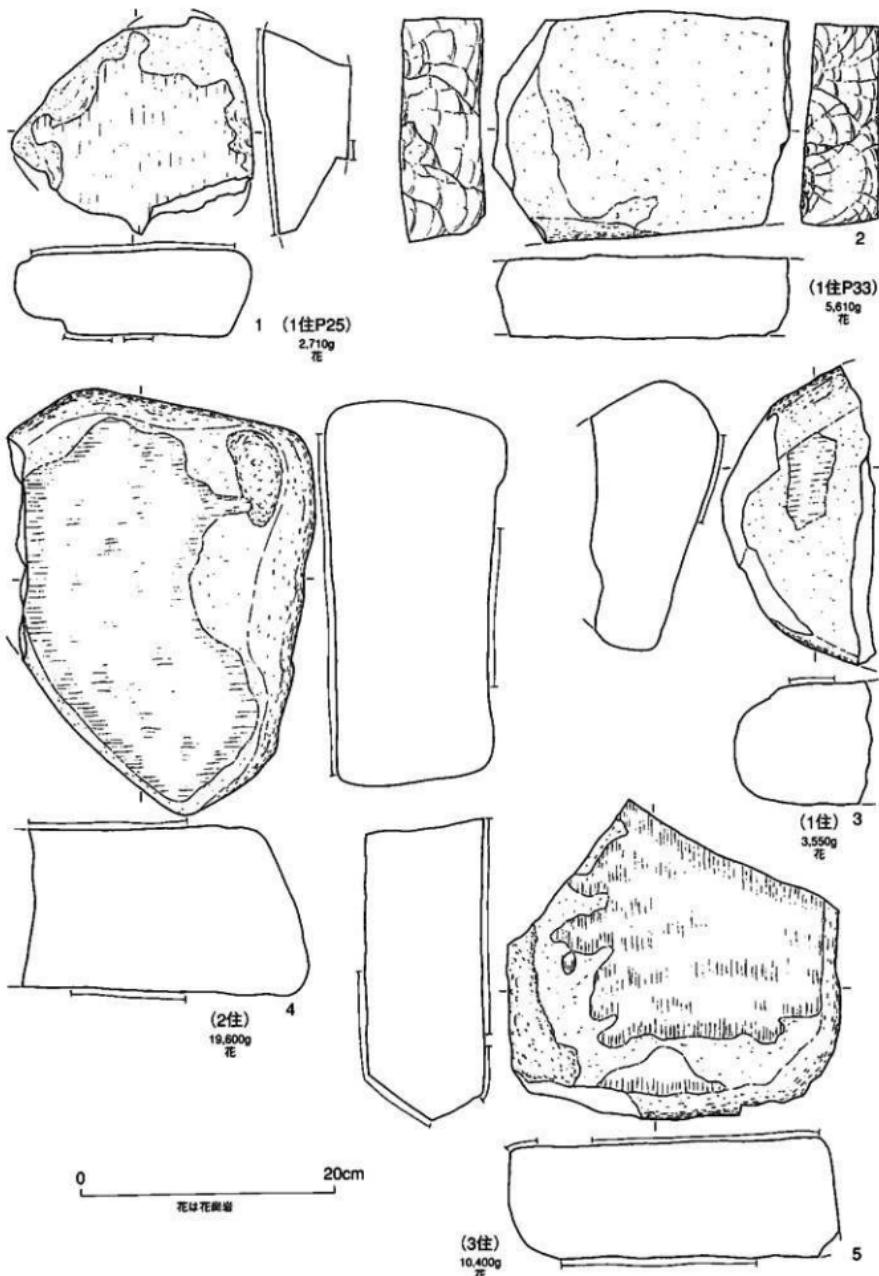
第60図 出土石器(3) (1/3) (スリ石, クボミ石)



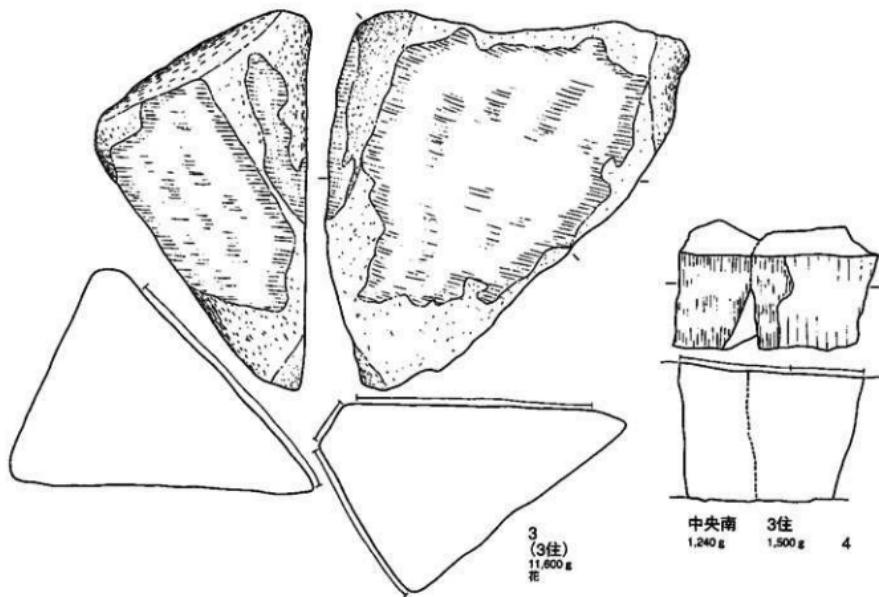
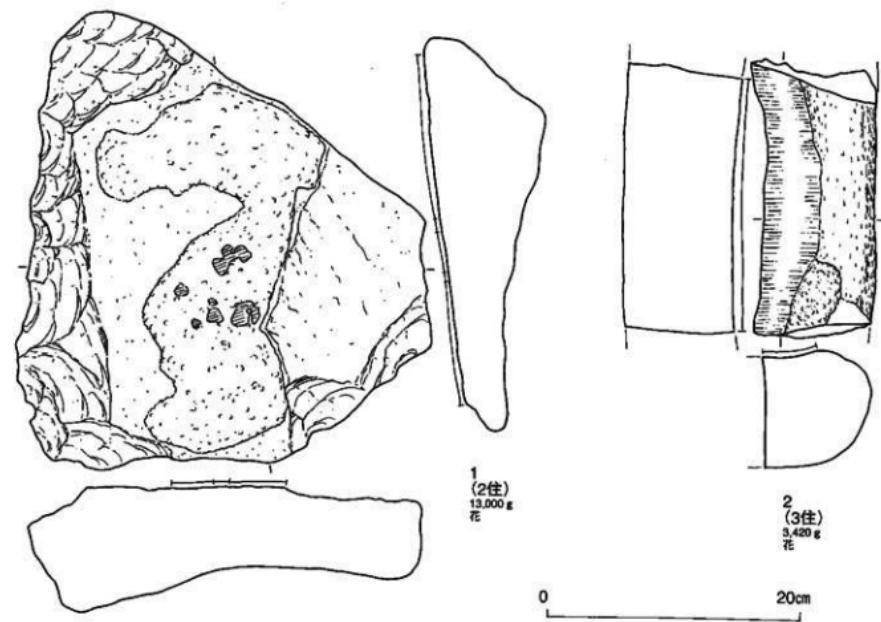
第61図 出土石器(4) (1/3) (敲石, 碾石皿)

### B. 碾

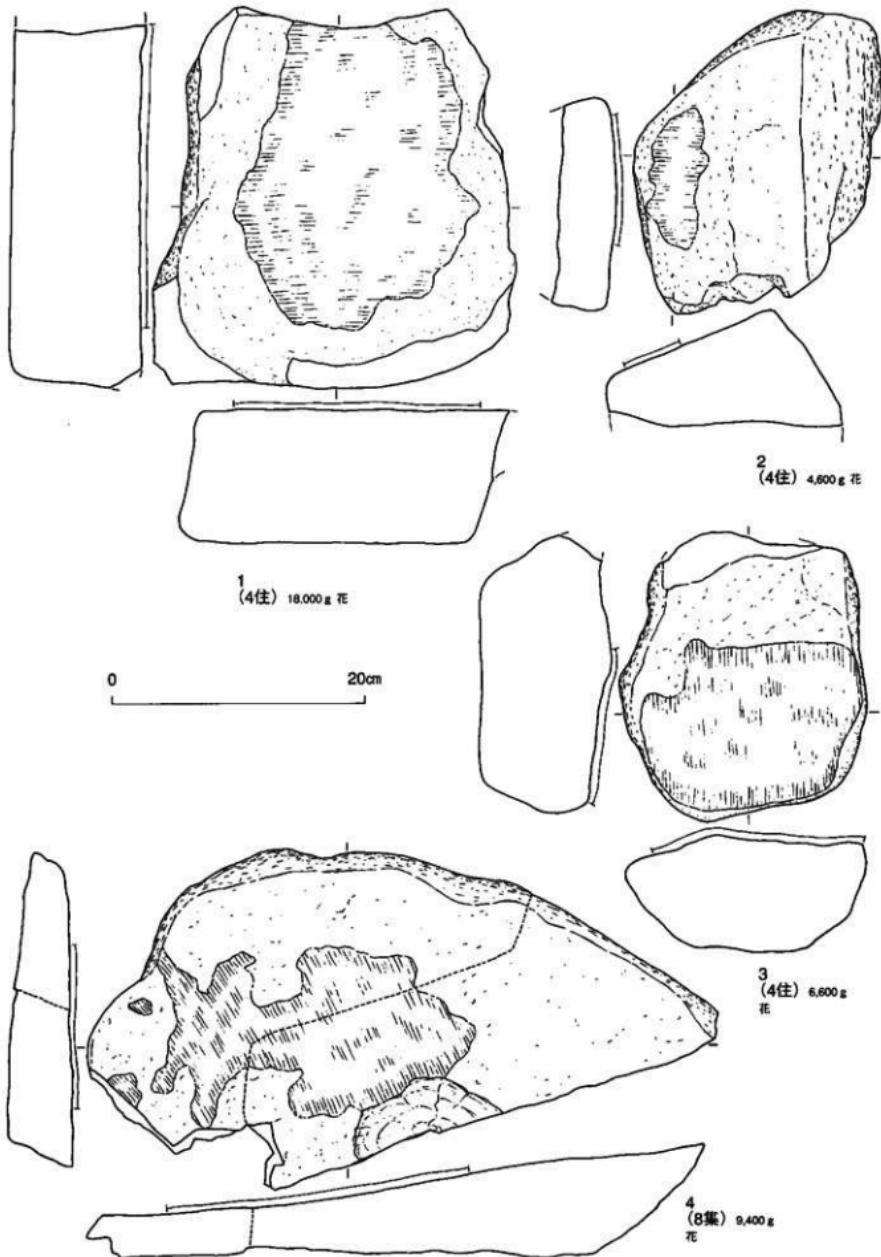
第2表に遺構内出土礫の構成状況を示した。石質はほとんど花崗岩で亜円礫・亜角礫の円磨度である。遺跡に隣接する河川にはほとんど礫がなく、ローム層より下の基盤層中に礫がかなり含まれる。一方、大堀山から流れ出て遺跡の西方約1kmのところを北に流下する馬場川には礫があり本遺跡出土の礫と近似する。馬場川からの採取が考えられる。出土礫の表面は褐色・赤褐色・赤色を呈する。馬場川上流部の礫は褐色味は弱く白色に近い。河床などで鉄分が沈着し褐色~赤色になったとも考えられるが、焼けることによる赤化も十分に考えられる。また、集石ばかりでなく住居跡や土坑もスス状の黒色付着物が数%観察でき、ごく限られた数ではあるがタール状付着物がみられるものもある。さらに、高熱で黒色鉱物が溶けて発泡しているものが観察された。大半が焼けているものと考えたい。礫の観察は、重量、長さ・幅・厚さ、石質、完形度(完形、9割、7割、5割、3割、1割の6段階で分類)、焼けの有無、付着物、接合関係、打撃の有無などの項目で行った。接合については各遺構単位でまずおまかに石質分類した後に割れ礫すべてを1点1点突き合わせる突合作業を行なった。この作業は10名ほどの作業員が1ヶ月程度行った。遺構間接合については、まず特徴的な石質のものを各遺構からピックアップし、その中の接合作業を繰り返し保坂が1人で約1ヶ月行なった。この過程でも遺構内接合がかなり確認され、熟練度に左右される作業であることを痛感した。結局、遺構間接合は19点、7個体しか確認できなかった。一方で、遺構内接合はかなりの量に及んでおり、各遺構の孤立性の高さが確認される。すなわち、礫の採取は各遺構単位で採取地から確保しており、遺跡内の他の遺構の礫を転用しないしは再利用することはごく限られていたと結論付けられる。集石と土坑内礫との違いは、土坑内礫が集積状態を示さず遺構内に分散分布する点と、礫数が200個未満、礫平均重量が300g未満と小規模、小礫の集合である点。しかし、18集bは200個未満、300g未満で分散分布するので集石から外し礫分散分布域とすべきであろう。また、21土の下層礫は平均重量796gで集中分布する。他の集石が土坑の開口部を礫を厚く積み上げて閉塞するのに対し、中位を面的に敷いたように閉塞している違いがある。礫層の下位から耳飾が出土しており墓坑の可能性があるため、集石から分離した。18・19土では集積状態で出土したが平均重量が300g未満で小礫のため現場での判断では集石とは区別した。しかし、土坑開口部を厚く閉塞する在り方は集石に近似し、集石の分布を考える場合は集石に準じて扱う必要があろう。集石としたものも、構成礫数が最大640個、700kgあまりもの巨大な1集から、17個、15kgあまりと小規模な19集まで変異が大きい。耕作などで失われた可能性もあるが、平均重量でも1kgあまりの1集から300gあまりの15集まで変異は大きい。平均重量は一部の礫が失われたとしても影響をあまり受けない属性であり、相互の違



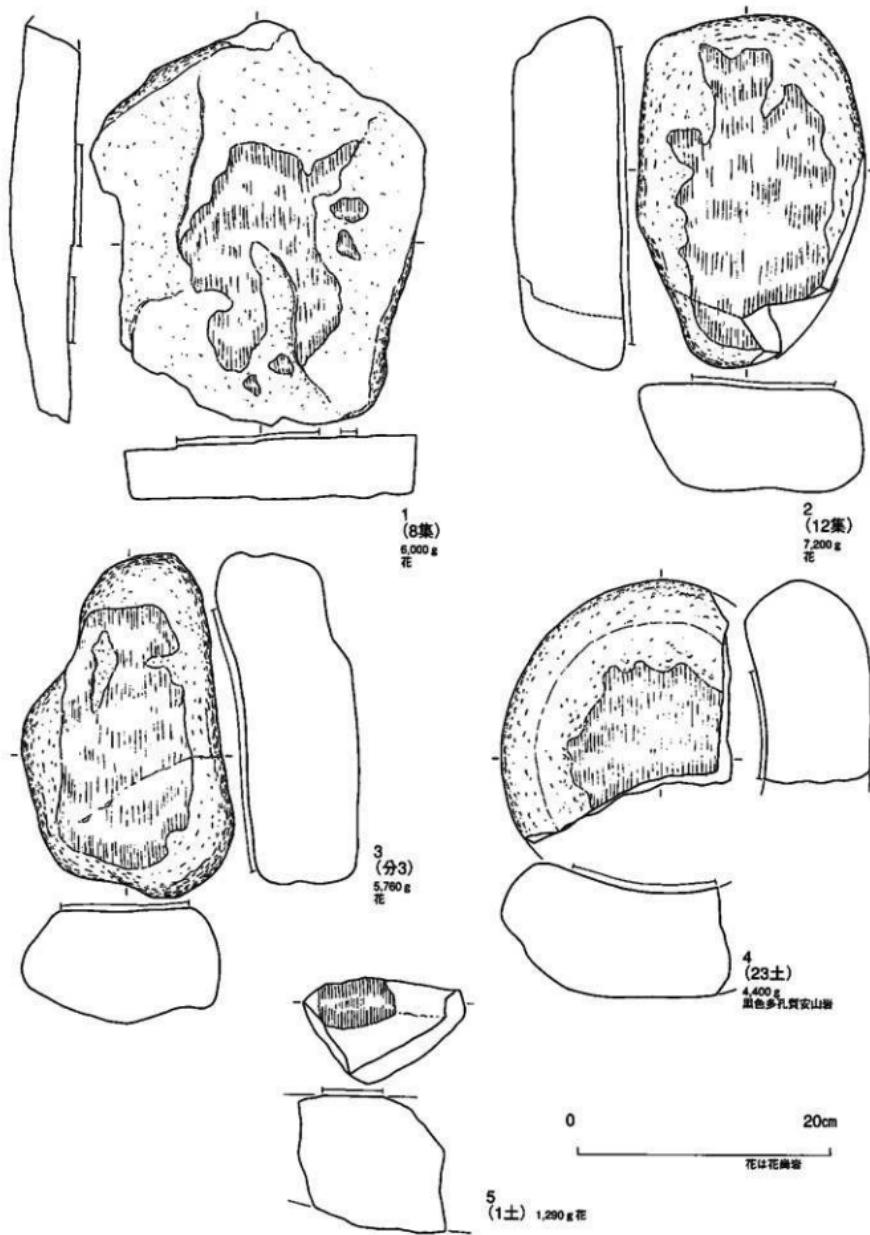
第62図 出土石器(1) (1 / 4) (礫石皿)



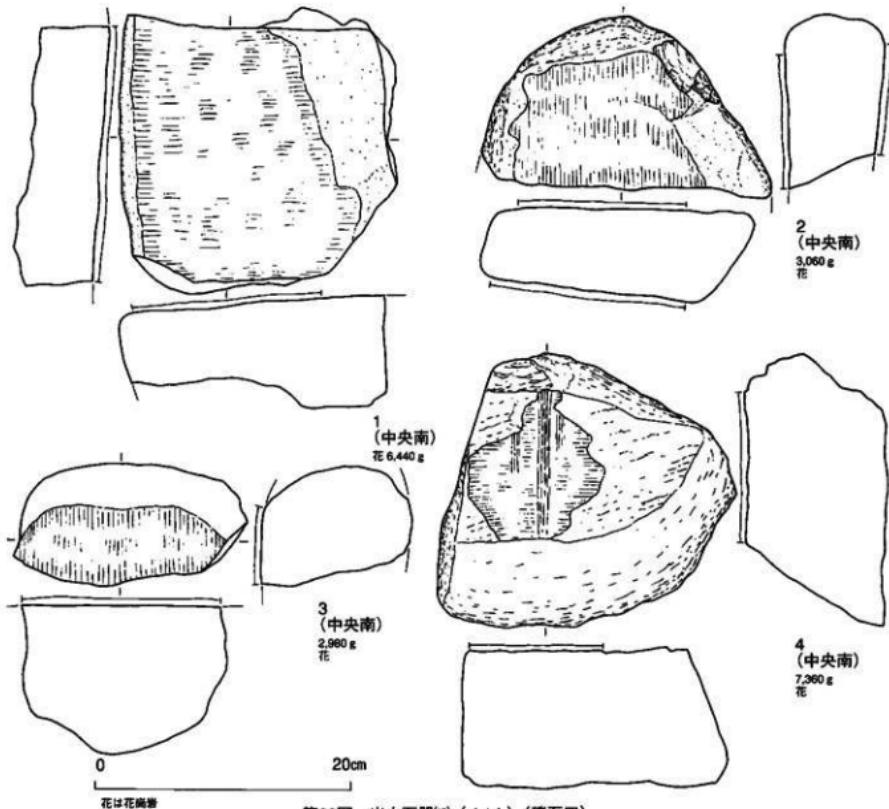
第63図 出土石器(6) (1/4) (櫟石四)



第64図 出土石器(17) (1/4) (砾石皿)



第65図 出土石器(1) (1 / 4) (砾石皿)



第66図 出土石器(1) (1/4) (礫石皿)

いをみるのに重要な属性である。ただし、礫は割れしており、当初集められた礫の属性とは必ずしも対応しない。そこで、完形礫の平均重量をみてみると、1・3・11・13集が1kg以上であり最低が7集502gである。そもそも目的として集めた礫の大きさにかなり大きな違いがみられることになる。なお、旧石器時代の礫群は500g未満の礫でほとんどが構成され平均重量が200~300g程度で1kg越える礫を含むことは皆無に近い。非常に大型の礫を集めている点が縄文の集石の特徴となろう。住居跡では3・4住で1kgを越えている。土坑でも21土下層、25土が完形礫が1kgを越える平均重量である。特に大型の礫を集めた意図が読み取れる。逆に、18・32土ではいずれの平均も200g未満と鶏卵大以下の小型礫を集めたことが読み取れる。

#### 第4節 縄文時代中期中葉～後葉の遺物

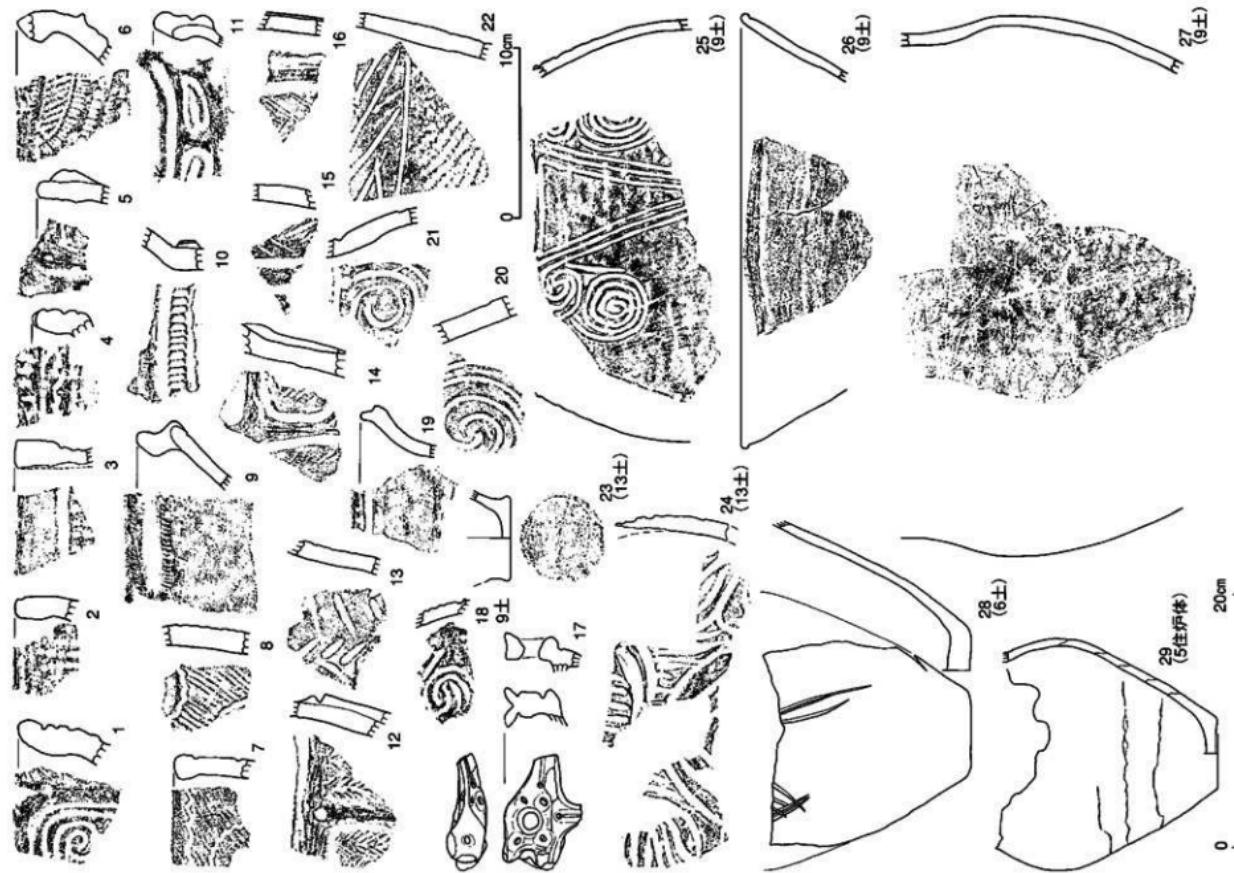
縄文時代中期中葉～後葉は造構がなくグリッドや他時期の造構の覆土中から少數出土したもの。第67図1~5は角押文を施した洛沢式期の土器。6は三角押文を施した新道式期、7~9は藤内式期、10は井戸尻式期の土器。11~14は曾利Ⅳ式期、12~13・15~16は曾利Ⅴ式期。第68図は土偶。1は三角押文を施した新道式期でいわゆる壺を抱く形態。東区南端から単独出土した。2は曾利式期のものと思われる頭部で後頭部に把手状の飾りの2個並立する。東区の埋没小河川の砂層中から出土。上流から中世以降に流されてきたものと思われる。3は土偶の腕部分で時期不明。

第2表 碳酸性表(礁石・礁分分布域)

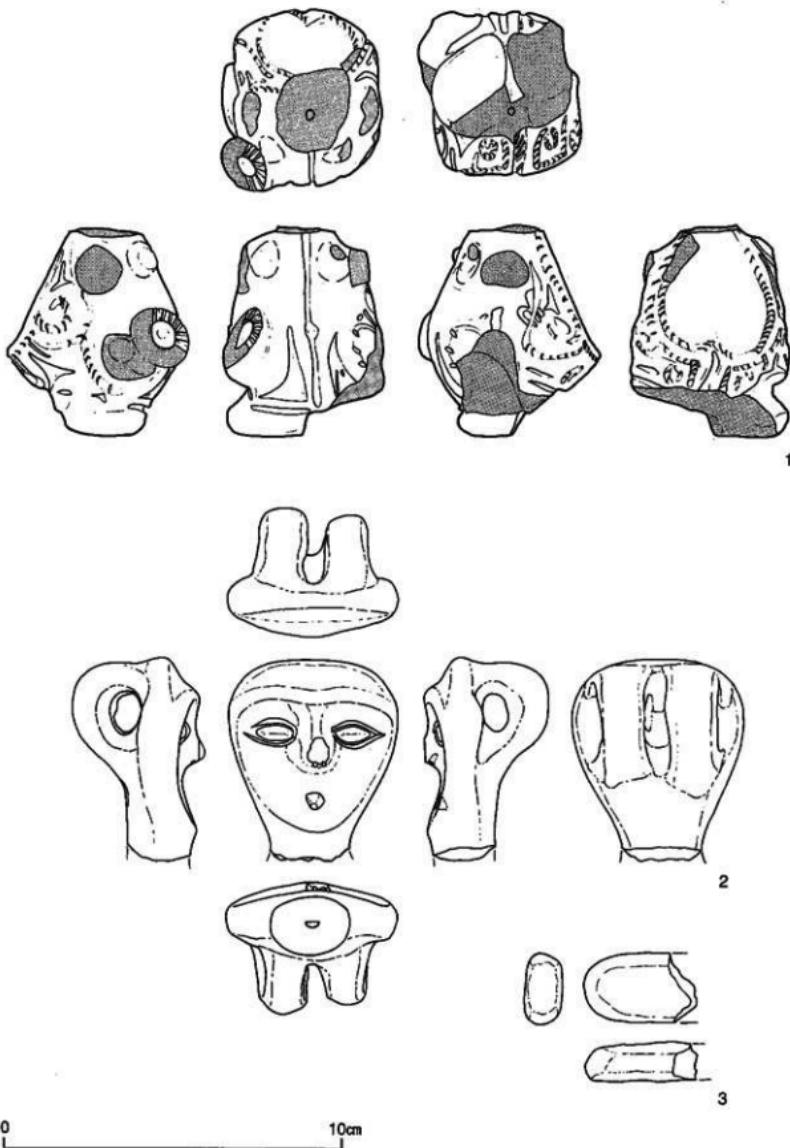
造構名	構成確数	總重量 g	平均重量 g	完形確率%	完形礁體重量 g	完形礁平均重量 g	造構内合礁數	個体数	周辺礁數	接合率	又支着確率%
1集	640	648,881	1,014	128	20	179,372	1,401	50	29	0	46 6.7
底層配石	41	66,766	1,628	8	20	16,744	2,093	4	4	0	12 2.9
2集	278	116,870	420	84	30	47,615	591	17	8	0	65 9.5
3集	20	31,629	1,582	7	35	8,136	1,162	2	1	0	7 3.5
礁上部	38	5,502	145	4	11	1,537	384	0	0	0	1 0.1
4集	255	210,226	824	141	55	129,186	916	6	3	0	14 2.0
5集	117	62,250	532	26	22	19,202	739	10	5	0	40 5.8
底層配石	6	15,768	2,628	4	67	13,592	3,398	2	1	0	5 8.3
6集	415	183,688	443	48	12	33,117	690	16	8	1	8集 21 3.1
7集	583	206,077	354	121	21	60,784	502	37	18	2	21 11-14集 26 3.8
底層配石	26	27,690	1,385	8	40	12,531	1,566	0	0	0	7 3.5
8集	366	186,886	511	43	12	34,588	804	38	16	3	1 6集 39 5.7
底層配石	18	37,734	2,097	5	28	9,830	1,966	1	1	0	8 4.4
9集	90	47,216	525	25	28	19,346	774	0	0	0	7 1.0
10集	137	49,290	359	40	29	23,644	591	17	8	2	1 11集 4 0.6
底層配石	9	17,092	1,899	4	44	7,143	1,786	0	0	0	5 5.6
11集	102	60,455	593	26	25	31,041	1,194	6	3	2	2 10-8集 6 0.9
12集	157	76,571	488	22	14	15,475	703	8	4	0	7 1.0
分2a	120	46,012	383	20	17	9,322	466	0	0	0	8 1.2
13集	26	45,002	1,731	8	31	14,940	1,868	4	2	0	3 0.4
14集	248	136,035	549	73	29	60,783	833	35	14	1	1 7集 41 6.0
15集	90	27,467	305	13	14	5,976	460	0	0	0	3 0.4
16集	359	227,667	634	127	35	99,975	787	48	23	0	67 9.8
17集	259	134,557	520	114	44	70,184	616	19	9	2	1 分2c 46 7.0
底層配石	8	12,127	1,516	2	25	4,089	2,045	0	0	0	5 6.3
18集a	40	17,136	428	4	10	3,474	869	2	1	0	7 1.0
分2b	48	22,836	476	8	17	4,664	583	0	0	0	2 0.3
18集b	17	4,316	254	3	18	2,124	708	0	0	0	2 0.3
分2c	56	15,675	280	9	16	6,188	688	2	1	1	1 17集 4 0.6
19集	17	15,929	937	0	0	0	0	0	0	0	1 5.9
20集	32	18,963	593	10	31	7,068	707	4	2	0	10 1.5
底層配石	5	9,175	1,835	2	40	5,273	2,637	0	0	0	2 4.0
分1	649	167,079	257	59	9	36,337	616	16	8	0	5 0.7
分3	308	167,070	348	42	14	18,720	446	5	2	0	6 0.9

(住居跡・土坑)

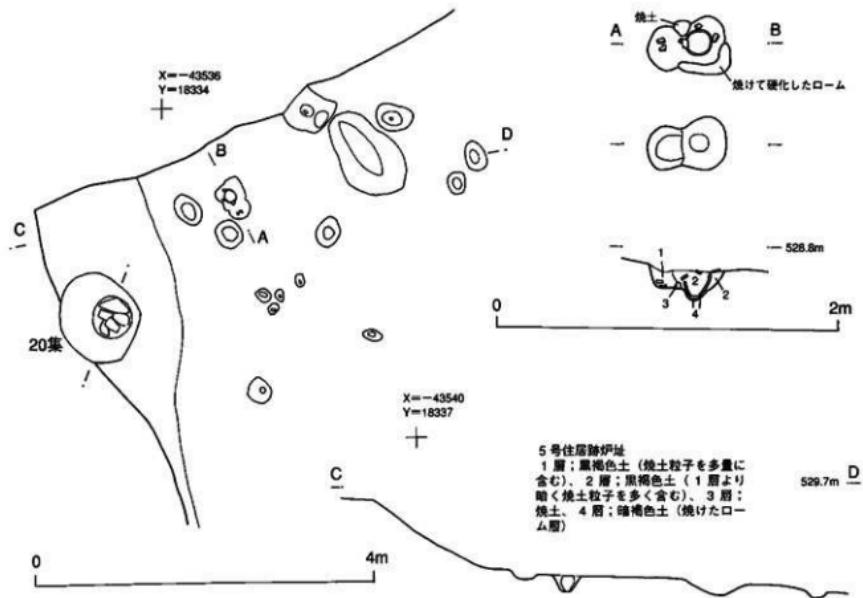
造構名	構成確数	總重量 g	平均重量 g	完形確率%	完形礁體重量 g	完形礁平均重量 g	造構内合礁數	個体数	周辺礁數	接合率	又支着確率%
1住	75	52,098	695	4	5	504	126	2	1	0	7 1.0
2住	164	113,149	690	39	24	13,861	355	19	8	0	29 4.2
3住	135	145,048	1,074	13	10	20,453	1,573	9	4	2	2 39-23土 24 3.5
4住	30	68,731	2,291	8	27	23,339	2,917	0	0	0	6 0.9
1土	32	12,861	402	3	9	1,355	452	0	0	0	3 0.4
6土	19	7,239	381	3	16	1,091	364	0	0	0	4 0.6
7土	16	7,872	492	8	50	5,010	626	0	0	0	5 0.7
12土	9	5,844	649	2	22	611	306	0	0	0	0 0.0
18土	146	20,321	139	42	29	7,546	180	0	0	0	13 1.9
19土	63	16,761	266	17	27	8,523	501	8	3	0	27 3.9
21土上部	16	3,120	195	12	75	2,527	211	0	0	0	6 0.9
21土	50	39,782	796	8	16	8,968	1,121	0	0	0	14 2.0
22土	10	2,435	244	4	40	859	213	0	0	0	2 0.3
23土	61	41,224	676	9	15	2,955	328	0	0	1	1 3住 9 1.3
24土	56	12,283	219	9	16	3,368	374	0	0	0	9 1.3
25土	15	7,180	479	1	7	1,306	1,306	0	0	0	2 0.3
30土	157	23,829	152	17	11	8,701	512	0	0	0	7 1.0
31土	12	4,336	361	1	8	289	289	0	0	0	2 0.3
32土	64	5,444	85	24	38	1,376	57	0	0	0	3 0.4
33土	7	1,243	178	0	0	0	0	0	0	0	0 0.0
36土	33	19,744	598	4	12	2,726	682	3	1	0	7 1.0
39土	45	24,866	553	4	9	2,223	556	3	1	1	3住 7 1.0
43土	5	593	119	0	0	0	0	0	0	0	0 0.0



第67図 編文時代中期～末、後期の土器 (1/3, 25～29のみ 1/4)



第68図 縄文時代中期中～末の土製品（2/3）



第69図 5号住居跡 (1/60, 炉址 1/30)

## 第5節 桜文時代後期の造構と造物

### 1. 住居跡

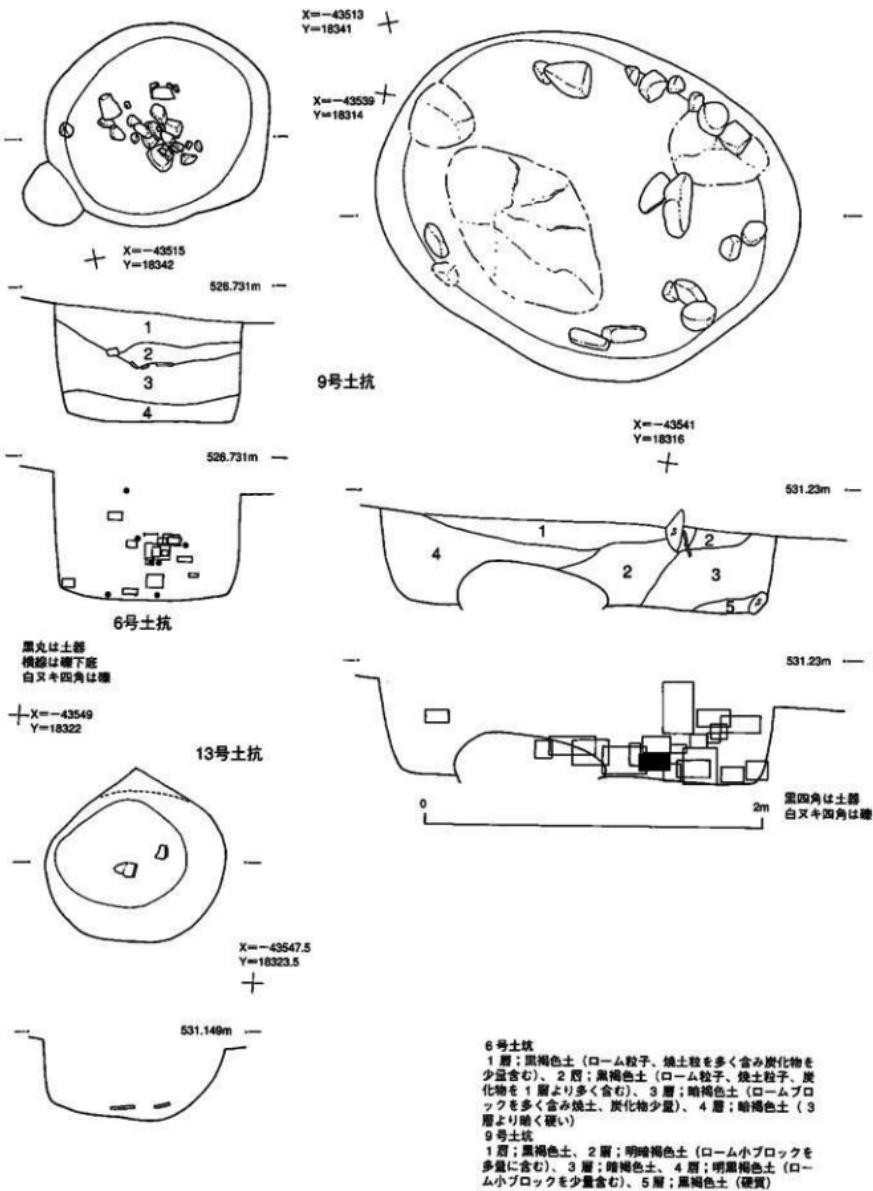
5号住居跡は東区西部のる・れーー11グリッドにある。西側に高さ0.8m、幅1.5mの段があり、段の裾から1mの所に埋甕炉がある。埋甕炉の周囲は非常に平坦で、深さ20cm以下の浅いピットが埋甕炉の周囲3mの範囲にランダムに分布する。耕作により確認された面まで削られ耕土が直接覆っていることが北側断面で観察でき、造構の旧状をほとんど止めていないが、埋甕炉の残存状況からして床面の削剥がそれほどなされていないこと、西側の段の存在から住居跡の西壁の限界が段の下底線付近に求められる点は確実であろう。なお、時期は炉体土器から壠之内式段階と思われ、敷石住居跡であった可能性もある。

### 2. 土坑

3基ある。6号土坑は北区の1号住居跡の北部にあり、 $1.2 \times 1.3$ mのほぼ円形で深さ70cm。9号土坑は中央区南側のをーー12グリッド南西隅にあり、 $2.5 \times 1.9$ mの楕円形で深さ40cm。比較的大型の砾が底部周囲に分布し一部は直立していた。大型土器片が東半部中央の覆土中に直立する大型砾の周囲に分布していた。13号土坑は中央南区西端部のわーー14グリッド中央にあり、 $1.1 \times 0.9$ mのほぼ円形で深さ45cm。これらの土坑はすべて壠之内式段階と思われる。

### 3. 土器

第67図1~29が後期の土器。22が加曾利B2式である以外は壠之内1式段階と思われる。



第70図 繩文時代後期の土坑（1/30）

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 桂野遺跡の堆積物とテフラ

山梨文化財研究所 河西 学

#### 1. はじめに

金川に面した駒留付近から八反田西方の御坂山麓には、金川に平行した一連の台地が形成されている。このうち八反田周辺では、等高線が金川扇状地の方向と一致していることから、これらの台地が金川の旧扇状地からなる河岸段丘であると考えられる。ところが駒留から若宮集落西方にかけての台地では、金川扇状地面に直交する等高線の方向を示していることから、金川の段丘面形成後に御坂山地斜面上方から流出した土砂によって形成された小扇状地が段丘面を覆っていると考えられる。桂野遺跡は、御坂山地北側斜面を流下する馬場川によって形成された小扇状地上に位置している。

本地域には、縄文時代の遺構を埋積して黒色土が厚く堆積し、黒色土中に黄褐色ローム層が挟在されている。この現象は、丘の公園遺跡などが分布するバケ岳南麓の状況に類似している（河西, 1989）。ここでは褐色ローム層や黒色土の堆積について考察するためにテフラ分析を行ったので以下に報告する。

#### 2. 試料

縄文時代中期五領ヶ台式期の土坑は、褐色ローム層を掘り込んでいる。褐色ローム層の上には、黒褐色土（7層）、暗褐色土（6層）、黄褐色土（5層）、黒褐色土（4層）、漆黒色土（3層）、砂質黒色土（2層）、軟質黒色耕作土（1層）の自然堆積層が覆う。試料は、2～7層の間で幅10cm×高さ5cm×奥行約5cmの堆積物を5cm間隔で採取したものである。

#### 3. 分析方法

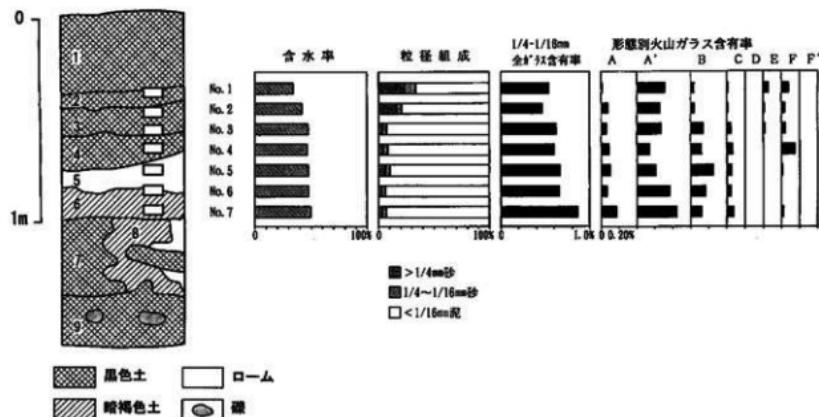
分析試料は、湿ったまま約20gを秤量後、水を加え超音波装置を用いて分散をはかり、分析篩（#250）で受けながら泥分を除去した。乾燥後、分析篩（#60, #250）を用いて $>1/4\text{ mm}$ および $1/4\text{ mm} \sim 1/16\text{ mm}$ の粒径に簡別・秤量し粒径組成を算出した。なお分析試料の乾燥重量は、別に同一試料約5～10gを秤量ビンにとり秤量後、乾燥器で105°C、5時間放置して得られた乾燥重量から算出した。鉱物粒子の観察は、 $1/4\text{ mm} \sim 1/16\text{ mm}$ の粒径砂をスライドグラスに封入し偏光顕微鏡下で行った。試料ごとに火山ガラス・風化物その他の粒子を含めた合計が500粒になるように計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木（1980）の方法に従った。細粒結晶を包有するF型火山ガラスはF'型とした。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木（1980）の方法に従った。細粒結晶を包有するF型火山ガラスはF'型とした。

第3表 火山ガラス屈折率測定値

試料	形態	色調	屈折率	テフラ
No. 1	A・A'	無色	1.499-1.502	AT
No. 1	E・F	無色	1.500-1.504	KgP
No. 4	A・A'	無色	1.499-1.502	AT
No. 4	E・F	無色	1.501-1.504	KgP
No. 7	A・A'	無色	1.499-1.502	AT
No. 7	B・C	無色	1.501-1.503	UG

第4表 火山ガラス計測粒数 (+は計数以外の検出を示す)

	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7
A 無色	1	9	8	11	15	10	24
A 褐色		+					
A' 無色	15	29	31	17	28	51	60
A' 褐色			1	+	1	+	
B 無色	2	5	17	14	34	23	17
C 無色	1	2	6	8	8	7	10
E 無色	3	2	3	1			
F 無色	4	5	6	18	3	1	4
F' 無色				1			
F' 緑褐色				1			
その他	474	448	427	430	411	408	385
合計	500	500	500	500	500	500	500



第71図 火山ガラス含有率

して区別した。火山ガラスの屈折率の測定は、位相差顕微鏡による浸漬法（新井, 1972）による。

#### 4. 分析結果

火山ガラスの屈折率測定値を第3表に示す。偏光顕微鏡下での火山ガラスの計数結果を第4表に示す。これをもとに湿重基準の含水率、粒径組成、 $1/4 \sim 1/16\text{mm}$ の全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率を算出し第71図に示す。なお $1/4 \sim 1/16\text{mm}$ 全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率は、試料単位重量当たりの $1/4 \sim 1/16\text{mm}$ 粒径の火山ガラスの割合で表示した（注1）。

含水率は、No. 3～No. 7 ではほぼ一定であるが、上部のNo. 1, 2 で減少する。粒径組成に占める砂の割合は、No. 3～No. 7 では低率であるが、砂質黒色土からなる第2層付近で採取されたNo. 1, 2 において増加する。 $1/4 \sim 1/16\text{mm}$ 粒径の火山ガラスの含有率は、No. 7 で%と最大値を示し、上方に漸減する傾向が認められる。

気泡の曲率が大きい泡壁（バブルウォール）型であるA・A'型火山ガラスのうちA型はNo. 7 で最大値を示し上方に漸減する。A'型火山ガラスは、No. 7 で最大値を示した後減少し、No. 4 で極小となってNo. 1～No. 3 では安定した値を示す。No. 1, 4, 7 で測定した無色泡壁型火山ガラスの屈折率が1.499～1.502の値を示すことから、これらの火山ガラスは約2.5万年前に噴出した姶良Tnテフラ（AT）に同定される。五領ヶ台式期の土坑を覆う層位から検出されたこれらのAT由来火山ガラスは、二次堆積したものと考えられる。なお鬼界アカホヤテフラ（K-A h）に由来すると考えられる火山ガラスはほとんど検出されなかった。

塊状のB型火山ガラスは、No. 5 を極大にNo. 3～7 で安定して検出され、上部のNo. 1, 2 では低率である。やや厚手の中間型火山ガラスC型は、No. 3～No. 7 で低率ながら安定して検出され、上部のNo. 1, 2 ではきわめて低率である。No. 7 におけるB・C型火山ガラスの屈折率が1.501～1.503であることから、これらの火山ガラスは約1.3～1.4万年前に噴出した立川ローム上部ガラス質テフラ（UG）に由来するものと考えられる。五領ヶ台式期の土坑を覆う層位から検出されたこれらUG由来火山ガラスは、二次堆積したものと考えられる。

繊維状に引き延ばされた軽石型形態のE型火山ガラスは、No. 1～No. 4 の間でわずかながら連続して検出される。多孔質軽石型のF型火山ガラスは、No. 4 で極大値を示し上方で低率ながら連続して検出される。No. 1, 4 における無色E・F型火山ガラスの屈折率が1.500～1.504の値を示すことから、これらの火山ガラスは約3.1～3.2千年前に噴出したとされる天城カワゴ平軽石（KgP）に由来するものと考えられる。KgP由来の火山ガラスは、土層断面において拡散しているものの、五領ヶ台式期の土坑を覆う地層中から検出されたことから層位的には調和する。

#### 5. 褐色ローム・黒色土の堆積について

今回の分析において試料中に検出される A T・UG の火山ガラスは二次堆積物である可能性が明らかになった。甲府盆地の A T・UG は褐色ローム層中に検出される場合が一般的である（河西, 1989, 1990）。本遺跡周辺においても同様であることが推定されることから、本地点での黒色土～暗褐色土の母材が褐色ローム層であったことが考えられる。本遺跡の立地する小屋敷地は馬場川によって形成された急傾斜の扇状地で、上流域にはゴルフ場の位置する緩傾斜の山地斜面が分布する。人工的に地形が改変されているこのゴルフ場地域は、明治42年測量の2万5千分の一地形図などでは大堀山・小堀山・大柄山など付近の山地斜面の比較して等高線密度が低く緩傾斜であることから、本来崩壊地形のひとつであった可能性が考えられる。遺跡地点での堆積物は比較的厚く、堆積物の堆積速度が曾根丘陵上の台地面より高いと見積もられるが、このことは本地域の地形的特徴と調和的である。

この付近の御坂山地には甲府花崗岩体を構成する石英閃綠岩（トーナル岩）が分布している。第2層の砂質黒色土中には、花崗岩類に由来する比較的分級の良好な中～細粒砂が多く含まれることから一時的な洪水などによる影響が推定される。

第3層漆黒色土中には1～3cm大の黒色土ブロックを多量に伴う。この黒色土ブロックは、指でつぶすことができるが比較的硬質で、一般的なソフトローム層から黒色土層の硬さよりも硬くハードローム層の硬さにより類似し、また基質の漆黒色土とは色調は同様であるものの硬さが異なることから、疊として堆積した可能性が考えられる。No. 1～3の試料中で A T タイプの A' 型火山ガラスが安定して検出されることから、黒色土ブロックは A Tなどを含むハードローム層に起源する疊状ブロックが堆積し、黒色土層で腐植を吸収して黒色化したものではないかと推測される。漆黒色土が認められる八ヶ岳南麓の丘の公園遺跡や中込遺跡では、K g 由来の F型火山ガラスの極大が、漆黒色土の最下部から直下付近に検出される傾向が認められ、本遺跡の結果とよく一致している（河西, 1989）。甲府盆地底の二本柳遺跡などでは、泥炭質堆積物から KgP が検出されている（河西, 2000）。KgP 降下期の駿河湾周辺地域では、沼沢地・湿地が発達し、泥炭層の堆積が広く認められる（嶋田, 2000）。これらのことから KgP 堆積期には有機質堆積物が堆積しやすい環境が広域に存在していたと考えられる。

第5層は褐色ローム質層であり、UG・AT由来の火山ガラスを含む。第5層では、部分的に明瞭な褐色を呈する10cm大のやや角張ったブロックがときに認められる。桂野遺跡第1次調査の第1号沢断面において、谷埋め暗褐色～黒色土（厚さ60cm）を覆って厚さ20～40cmの褐色ローム質土層が堆積し、厚さ45cmの漆黒色土がこれを覆い、さらに上部に約40cmの暗褐色耕作土層が堆積していた。第1号沢の褐色ローム質土層は、3～10cm大の褐色ローム質ブロックが多量に含まれ、ときに細疊～中疊を伴い、基質は黒褐色土から構成される。今回の分析地点と約300～400mの距離をもつ第1号沢で確認されるこれらの層位は、今回の地点の層位と酷似し対比することが可能である。おそらく第5層は、主としてローム層の崩壊によって生じた泥流～土石流堆積物であると考えられる。

注1 形態 x 型の火山ガラスの含有率 A x は、 $A_x (\%) = (C/B) \times (E_x/D) \times 100$  で算出される。ただし、B：試料の乾燥重量 (g)、C：1/4～1/16mm粒径砂分の重量 (g)、D：計数した1/4～1/16mm粒径粒子の総数、E x : 計数した x 型火山ガラスの粒数。

## 文献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究、11、254-269。  
遠藤知彦・鈴木正章 (1980) 立川・武藏野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学、13、19-30。  
河西学 (1989) 丘の公園地域のテフラと地形。「丘の公園第2遺跡」。山梨県埋蔵文化財センター調査報告第46集、165-184。  
河西学 (1990) 立石遺跡での先土器遺物を含む地層。山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要、6、47-58。  
河西学 (2000) 二本柳遺跡のテフラ。「二本柳遺跡」。山梨県埋蔵文化財センター調査報告書、第183集、213-218。  
嶋田繁 (2000) 伊豆半島、天城カワゴ平火山の噴火と縄文時代後～晩期の古環境。第四紀研究、39 (2)、151-164。

### はじめに

桂野遺跡（山梨県東八代郡御坂町上黒駒所在）は、縄文時代中期初頭の集落を中心とした遺跡である。今回は、炉跡等から浮遊選別法にて回収された残渣について、種実同定と放射性炭素年代測定を行うことにより、遺構の時代観や当時の植物利用に関する情報を得る。

### 1. 試料

試料は、浮遊選別によって得られた試料33点である。これらの試料の一部では、大型の炭化物が分離されており、これが13点存在する。今回前者には1~33、後者にはS1~S13の番号を付けて、便宜上区別した。また放射性炭素年代測定には、1号住居内の1号炉、3号炉、5号炉内の炭化材を用いる。

### 2. 分析方法

#### (1) 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社地球科学研究所の協力により、加速器質量分析（AMS）法で行った。

#### (2) 種実同定

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特長から種類を同定した。同定した試料は種類毎に瓶に入れ保存した。

### 3. 結果

#### (1) 放射性炭素年代測定

結果を表1に示す。同位体補正後の年代値をみると、3試料とも約4,500年前の年代値を示す。また、古い順に1号炉、5号炉、3号炉の順に並ぶが、差は小さく、測定誤差の範囲内に収まっている。

第5表 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	年代値 (未補正)	年代値 (同位体補正)	$\delta^{14}\text{C}$	CodeNo.
1号住居	1号炉炭化材	4,560±40 BP	4,560±40 BP	-25.2	Beta-151022
1号住居	3号炉炭化材	4,530±40 BP	4,490±40 BP	-27.3	Beta-151022
1号住居	5号炉炭化材	4,560±40 BP	4,550±40 BP	-25.7	Beta-151023

#### (2) 種実同定

結果を表2に示す。全体的に保存が悪く、炭化材も微細なものが多い。種実状？の炭化物は若干認められるものの保存が悪い。大きさが数mm程度の楕円形のものが検出されているが、表面模様や「へそ」の位置などが不明瞭なため種類を特定することはできない。一方炭化していない種実に関しては比較的多く認められた。以下に炭化していない種実に関する形態的特長を示す。

##### ・カバノキ属 (Betula) カバノキ科

果鱗が検出された。大きさは3mm程度。褐色で薄く、表面はざらつく。先端部は3裂する。側裂片は広く、両側に突出する。

##### ・シラカンバ (Betula platyphylla Sukatchev var.japonica (Miq.) Hara) カバノキ科カバノキ属

果実が検出された。大きさは3mm程度。果体は狭倒卵型で先端部に花柱の跡が2本突出する。翼は薄くて褐色。果体に比べて大きいのが特徴である。

##### ・ハンノキ属 (Alnus) カバノキ科

果実が検出された。大きさは4mm程度。果体は倒卵型で先端部に花柱の跡が2本突出する。翼は小さく薄くて褐色。

・マタタビ属 (Actinidia) マタタビ科

種子が検出された。黒色。側面観は長楕円形。大きさは2mm程度。表面は硬質で光沢があり、丸いへこみが不規則に配列しているように見える。網目は基部の付近では細かく継続になる。

・ブドウ科 (Vitaceae) ブドウ科

種子が検出された。黒色。大きさは4mm程度。心臓形。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形に深くくぼんだ穴が存在する。背面は破損する。

・イネ科 (Gramineae)

果実が検出された。大きさは2mm程度。側面観は細長い紡錘形で、表面はざらつく。薄くて弾力がある。

・エノコログサ属 (Setaria) イネ科エノコログサ属

穎が検出された。淡褐色、半球状で大きさ3mm程度。表面には継長の細胞が密に配列する。柔らかくて弾力があり、薄い。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。褐色、広倒卵形、大きさは2mm程度。表面は薄くてやや堅く、ざらつく。先端がやや尖る。

・タデ属 (Polygonum)

果実が検出された。大きさは2mm程度。3稜形で表面は薄くて堅く、ざらつく。

・アカザ科ヒユ科 (Chenopodiaceae-Amaranthaceae)

種子が検出された。黒色で側面観は円形で、上面観は凸レンズ形を呈している。大きさは1mm程度。側面に「へそ」がある。表面は細胞が亀甲状に配列している構造がみられる。

・ナデシコ科 (Caryophyllaceae)

種子が検出された。黒色で、大きさは1mm程度。表面には荒い突起が密に配列している。

・タケニグサ (Macleaya cordata (Willd.) R.Br.) ケシ科タケニグサ属

種子が検出された。淡黄色で楕円形。大きさは1mm程度。表面には丸い窪みが密に配列する。表面は薄くて堅い。

・キジムシロ属一ヘビイチゴ属一オランダイチゴ属 (Potentilla-Duchesnea-Fragaria) バラ科

種子が検出された。褐色で大きさは2mm程度。半月形で、一端に「へそ」が存在する。表面全体はすじ状の模様があるが、不鮮明である。

・カタバミ属 (Oxalis) カタバミ科

種子が検出された。黒色、楕円形で大きさは約1.5mm。表面には横軸方向に平行に溝が数本走っている。

・エノキグサ (Acalypha australis L.) トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。卵型で大きさは1mm程度。先端部はやや尖る。表面は薄くて堅く、細かな窪みが配列し、ざらつく。

・トウダイグサ (Euphorbia Helioscopia L.) トウダイグサ科トウダイグサ属

種子が検出された。大きさは2mm程度。卵型で淡い褐色。表面は粗く不規則な網目模様が存在する。

先端には大きな「へそ」が存在する。

・シソ属 (Perilla) シソ科

果実が検出された。黒褐色。大きさは2mm程度。いびつな球形で、先端に「へそ」が見られる。表面全体には、荒い亀甲状の網目模様がある。

#### 4. 考察

年代測定の結果は、いずれも4,500年前後後の値を示し、繩文時代中期とされる時代観とは矛盾しない。また、年代測定の結果では古い順に1号炉、5号炉、3号炉となっているが、遺構の切り合い関係からは5号炉が最も古い。しかし、これらの年代の差は小さく測定誤差の範囲内に収まっていることから、短期間の間に何度も炉が作り替えられ

第6表 種実同定結果

番号	炭化材破片	不明	シソ属	トウダイグサ	エノキグサ	カタバミ属	オランダイチゴ属	タケニグサ	ナデシコ属	アカザ科	カヤツリグサ属	タデ属	エノコログサ属	イネ科	ブドウ科	マタタビ属	ハンノキ属	シラカンバ	カバノキ属	試料名				
																				キジムシロ属	ヘビイチゴ属			
1住	1炉内	炉体内	-	-	-	-	-	3	23	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	1	
1住	1炉	炉体周囲焼土	0.5mm	-	-	-	-	多	69	2	-	36	7	1	6	1	-	-	-	-	-	破	+	6
1住	1炉	炉体周囲焼土	#0.5mm	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	破	S 3	
1住	2	炉内	炉体内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	2	
1住	3	炉	炉体周囲	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	8	
1住	3	炉	炉体周囲	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	S 5	
1住	3	炉内	炉体内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	3	
1住	3	炉内	炉体内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	破	S 4	
1住	4	炉	炉体周囲	-	-	-	-	29	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	9	
1住	4	炉	炉体周囲	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	破	S 6	
1住	4	炉内	炉体内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	4	
1住	5	炉内	炉体内	-	-	-	-	7	6	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	5	
1住	1.2.5	炉	炉体周囲	-	-	-	-	38	57	-	22	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	10	
1住	1.2.5	炉	炉体周囲	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	破	S 2	
1住	1.2	炉	炉体周囲	-	-	-	-	19	47	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	+	7	
1住	1.2	炉	炉体周囲	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	S 1	
2住	1	炉	炉体周囲	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	+	14	
2住	1	炉内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	S 7	
2住	1	炉内	炉体内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	11	
2住	2	炉	炉体内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	S 8	
2住	2	炉	炉体内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	12	
3住	3	炉内	# 1mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	破	S 9	
2住	3	炉	炉体内	1	1	1	2	-	13	38	-	1	2	3	-	-	-	-	-	-	-	破	+	13
3住	3	炉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	+	15
3住	3	炉	炉燒土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	17
3住	3	炉内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	16	
18土	下層土	# 1mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	多	-	-	-	-	-	-	-	-	+	20	
18土	下層土	# 2mm	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	15	-	-	-	-	-	-	-	-	+	21	
18土	中層離周辺土	1mm	± 2mm	-	-	-	-	-	1	-	-	-	27	-	-	-	-	-	-	-	-	+	18	
18土	中層離周辺土	# 2mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	19	
29土	中位層	# 1mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	22	
29土	中位層	# 2mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	23	
30土	下層土	# 1mm	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1	-	10	-	5	-	1	-	破	+	26	
30土	下層土	# 2mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	27	
30土	燒土	# 1mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	17	-	-	-	-	-	-	-	-	-	破	+	24
30土	燒土	# 2mm	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	2	-	+	25		
31土	土器裏土	# 1mm	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	+	22	
31土	土器裏土	# 1mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	破	S 10	
31土	土器裏土	# 2mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	31	
31土	土器裏土	# 2mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	破	S 11	
31土	土器中	# 1mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	28
31土	土器中	# 2mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	29	
34土	底部土	# 1mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	+	S 12		
34土	底部土	# 2mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	+	33		
34土	底部土	# 2mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	S 13		

「多」は、約100個体以上検出されるもの、「破」は細片が数個程度みられるものである。

番号は当社にて便宜上つけたもので、特にSが付してあるのは炭化物が一部選別され、別の袋になっていたもの

たと考えた方が妥当であると思われる。

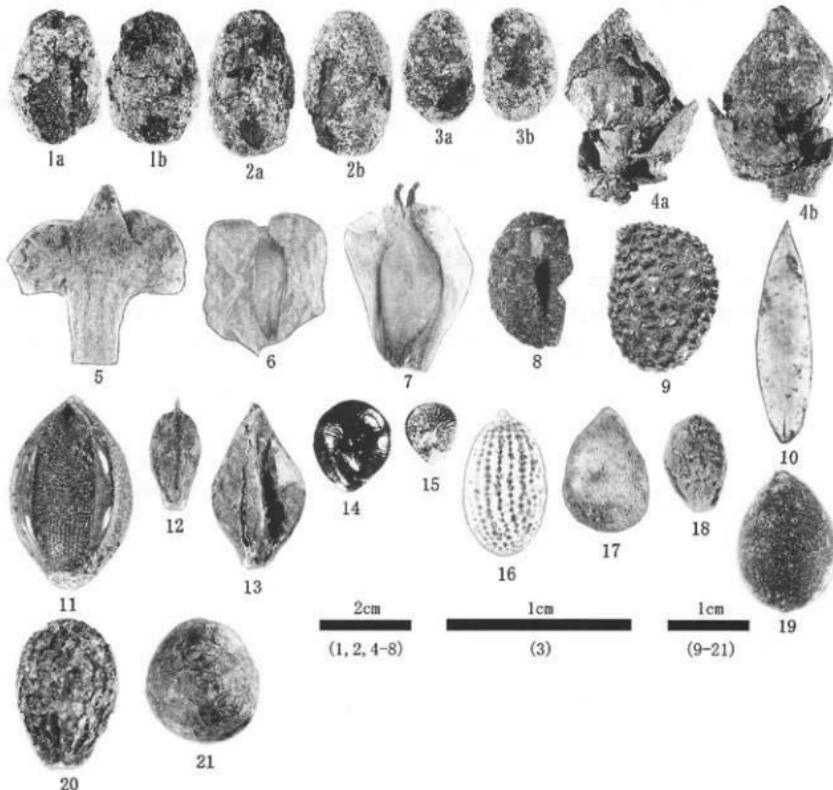
また、炭化種実は保存が悪く、種類が特定できたものはなかった。検出されたものの中には炭化していない種実も多数みられた。これらは廃絶後の埋積過程の中で混入した可能性がある。また昆虫や小動物によって土壤内に貯蔵されたものも一部含まれているかもしれない。低地遺跡など特別な場合をのぞけば、炭化していない限り種子は残らないといってよく、解析に関しては炭化種子以外を除外して考えた方が妥当だという意見もある（吉崎、1992）。今回出土の種子はカバノキやイネ科のように、飛来するための翼や綿毛までもが残っている個体もあり、かなり新しいものまで含まれている可能性がある。検出された種実の種類構成は、ハンノキ属やシラカバなど林縁部など明るい林地に生育する中低木類や、エノキグサ、トウダイグサ、タケニグサ、カタバミ属、エノコログサ属など人里などの開けた草地を好んで生育する「人里植物」の仲間である。これらは現在遺跡の周囲でも普通に見られる種類である。したがって、検出された種実は後代のものである可能性が高く、おそらく現在に近いものであると思われる。

本遺跡が営まれた縄文時代中期は、縄文海進の最盛期が終わり、弥生の小海退期に移る期間である。太平洋岸の浅海性貝類や房総沖の有孔虫の酸素同位体比測定によれば、縄文時代中期には沿岸の海水温が一時的に低下したと考えられている（鎮西、1994）。ただし、花粉分析の成果や他地域のプランクトン群集などではこの傾向が現れていないため、海水温の変化は海流変化などによる地域的な変化である可能性もあり、全国的な気候変化と連動しているかどうかは現在のところはっきりしない。

#### 引用文献

- 鎮西清高（1994）古水温と海洋環境。「縄文文化の研究 1 縄文人とその環境」、加藤晋平・小林達 雄・藤本 強編、p.210-217、雄山閣。  
吉崎昌一（1992）古代種穀の検出。考古学ジャーナル、355、p.2-14。

第72図 炭化物・種実遺体



1. 不明炭化物 (1住 3炉 炉体周囲;S5)  
 2. 不明炭化物 (1住 3炉 炉体周囲;S5)  
 3. 不明炭化物 (2住 1炉内;S7)  
 4. 不明炭化物 (34土 底部土;33)  
 5. カバノキ属: 果鱗 (2住 3炉 炉体内;13)  
 6. シラカンバ (2住 3炉 炉体内;13)  
 7. ハンノキ属 (2住 3炉 炉体内;13)  
 8. ブドウ科 (2住 1炉 炉体周囲;14)  
 9. マタタビ属 (2住 3炉 炉体内;13)  
 10. イネ科 (1住 1炉 炉体周囲焼土;6)  
 11. エノコログサ属 (1住 1炉 炉体周囲焼土;6)  
 12. カヤツリグサ科 (1住 1炉 炉体周囲焼土;6)  
 13. タデ属 (31土 土器裏土;30)  
 14. ナデシコ科 (1住 1炉 炉体周囲焼土;6)  
 15. キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属 (1住 1炉 炉体周囲焼土;6)  
 16. タケニグサ (18土 下層土;20)  
 17. キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属 (1住 1炉 炉体周囲焼土;6)  
 18. カタバミ属 (1住 1炉 炉体周囲焼土;6)  
 19. エノキグサ (30土 下層土;26)  
 20. トウダイイグサ (31土 土器裏土;30)  
 21. シソ属 (30土 下層土;26)

### 第3節 桂野遺跡第4次調査・小形剥片石器の使用痕分析

株式会社アルカ・池谷勝典

はじめに

桂野遺跡の4次調査から出土した黒曜石製の小形剥片石器25点を対象とし、その中から石器の表面状況などを考慮し、15点の石器を選んで観察をおこなった。

今回の分析資料は、縄文時代中期初頭に位置づけられている五領ヶ台式期の石器である。これらの石器は、すべて小形という点を除けば形態、二次加工の有無、刃部形態とともに多様である。このような石器がいったいどのような対象物に使用され、どのような使われ方をしていたのか、使用痕分析から明らかにすることが今回の目的である。

観察方法

キーエンス社のデジタルHDマイクロスコープ（VH-7000）と高倍率ズームレンズ（VH-Z450）を用いて高倍率の使用痕光沢の観察をおこなった。観察倍率は、450倍～1000倍（倍率はマイクロスコープでの倍率で従来の金網顕微鏡の倍率比とは異なる）である。観察面は、中性洗剤で洗浄をおこない、適宜アルコールを浸した脱脂綿で軽く拭き取り、脂分などを取り除いた。観察範囲は、石器表面全体を詳細に観察し、使用痕光沢および線状痕の認定をおこなった。使用痕光沢分類は東北大学の分類基準によっている（梶原・阿子島1981、阿子島1989）。

分析資料の概要

今回の石器は、おもに刃部が尖る尖頭削器と石器の末端辺に急角度の刃部をもつ搔器、あとはその他の削器にわかることができる。以下に個別資料について詳述する。なお数字は第73図の観察位置番号で、写真の大半を省略した。

#### 資料1・小形搔器

石器は、横長剥片の末端辺に押圧剥離により急角度の刃部を形成している。刃部には背面側に顯著な微細剥離が見られる。1（第74図写真1）は、裏面側の刃部縁辺であるが非常にあれた表面状態で細かな線状痕が刃部にはば直交する方向にみられる。使用痕光沢タイプは、E2であると考えられる。3の縁辺にも同じタイプの使用痕光沢が見られる。2では、使用痕光沢がない部分であるがランダムな線状痕が多数みられる。これらの線状痕は、使用によるものではなく偶発的についた傷である。推定される被加工物は、乾燥皮である。石器の使用法は、搔きとりが考えられる。

#### 資料2・小形尖頭削器

石器は、両側辺に押圧剥離をほどこし急角度な2側辺と尖頭部を形成している。左側辺に微細な剥離が伴うが、右側辺と尖頭部にはほとんど微細剥離は、みられない。明瞭な使用痕光沢は観察されないが、2では縁辺付近の表面がピットが多くあれた状態になっている。このような現象はしばしばある対象物と接触したおりにその接地面との摩耗の初期の段階でみられる。以上のことからこの石器は、ほとんど使用されていないと考えられる。

#### 資料3・小形尖頭削器

石器は、被熱資料であり、石器長軸の両端部に尖頭部を押圧剥離で形成している。尖頭部から側辺にかけて微細剥離がみられる。1～3は、黒曜石が熱を受けた場合どのような表面変化を起こすのかをよく示している。表面上に細かなひび割れを生じ、もし使用痕光沢があったとしてもこのように表面が変化してしまっては、よく分からなくなってしまう。2では、先端部に不明光沢が観察されるがもしかすると使用痕光沢の可能性がある。しかし、このような状態では、使用痕光沢タイプの同定は不可能である。線状痕なども不明である。

#### 資料4・小形尖頭削器

石器は、押圧剥離により尖頭部を形成する2側辺からなる。尖頭部から側辺にかけては、背面側に微細剥離が見られる。1（写真2）は、尖頭部の裏面側である。非常に細かい線状痕が刃部に直交する方向にみられる。使用痕光沢は弱いが、E2タイプと考えられる。推定される被加工物は、乾燥皮である。石器の使用法については、尖頭部を使う搔きとりが考えられる。2では、縁辺が潰れている状況をよく示している。さらに、3と比べて石器縁辺にやや丸みがあるのが観察できる。この縁辺の摩耗はおそらく着柄の結果である可能性が高い。3については、使用痕光沢は認められず、ランダムな線状痕がみられる。

#### 資料5・小形尖頭削器

石器は、押圧剥離により尖頭部を形成する2側邊からなる。尖頭部から側邊にかけては、背面側に微細剥離が見られる。2(写真3)は、裏面側の尖頭部で細かな線状痕が縁辺に対してほぼ直交する方向に見られる。使用痕光沢タイプは、E2であると考えられる。3についても、縁辺がわずかに摩耗しており、E2タイプの使用痕光沢が認められる。このことから推定される被加工物は、乾燥皮である。石器の使用法は、尖頭部を使う搔きとりが考えられる。1は、使用痕光沢が認められない。2、3と比べると非常にきれいな表面状態である。

#### 資料6・小形搔器

石器は、縦長剥片の末端辺にわずかに押圧剥離で急角度の刃部を形成しているが、その刃部は、ほとんどが微細剥離で覆われている。微細剥離は、背面側に顕著にみられるが主要剥離面側にもわずかにみられる。1(写真4)と2では、裏面側の刃部で細かな線状痕が刃部に対して直交する方向にみられる。使用痕光沢タイプは、E2である。推定される被加工物は、乾燥皮などである。石器の使用法は、搔きとりが考えられる。3では、刃部縁辺から少し奥にはいった部分で、使用痕はなくきれいな表面状態である。1(写真4)にみられる非常に明るい光沢は、金属粉が付着している状態で発掘時の金属製の道具との接触によるものと考えられる。

#### 資料7・小形搔器

石器は、縦長剥片の末端辺に急角度の刃部を押圧剥離で形成している。刃部には、背面側に微細剥離がわずかにみられる。2(写真5)は、裏面側の刃部であるが線状痕が刃部に対してほぼ直交する方向にみられ、使用痕光沢は弱いがE2タイプと考えられる。推定される被加工物は、乾燥皮などである。3では、明瞭な線状痕や使用痕光沢は、認められないが縁辺がぼろぼろになっており、微細剥離が繰り返しあっている状況がよくわかる。一部には、縁辺部に亀裂がありあと少しで剥離が起こる状態である。石器の使用法は、搔きとりが考えられる。1では、縁辺に微細剥離がみられるが、使用痕光沢は認められない。2本の太い線状痕は、偶発的なもので使用に伴うものではないと考えられる。

#### 資料8・小形尖頭削器

石器は、石器長軸の両端部に尖頭部を押圧剥離で形成している。両側辺の中央部から両端に向かって細くなっているが、その中央部から上半部が下半部よりも幅が細く作り出されているのが特徴的である。着柄するための工夫である可能性が考えられる。尖頭部から側邊にかけては、微細剥離がみられる。1では、側邊にほぼ平行する細かな線状痕が観察されるが顕著な摩耗は認められず使用痕光沢はない。2では、縁辺が微細剥離で潰れているのがよくわかる。3では、縁辺にわずかに摩耗が認められるが使用痕光沢タイプを同定できるほどではない。石器の使用法は、微細剥離の状態から搔きとりであると考えられる。以上のように、使用痕の程度が低いことからほとんど使用されていないようである。

#### 資料9・小形尖頭削器

石器は、押圧剥離により尖頭部を形成する2側邊からなる。明瞭な使用痕光沢は、観察されないが、2については表面にピットが多く、あており使用による結果であると考えられる。線状痕はランダムである。3では、明瞭な使用痕光沢は認められないが、縁辺に亀裂があり微細剥離が起りかけている状態である。以上のことからこの石器は、ほとんど使用されていないと考えられる。

#### 資料10・小形搔器

石器は、素材剥片の末端辺を加工を施さずに刃部として使用している。刃部には背面側に微細剥離が見られる。1では、縁辺がわずかに摩耗しているが、摩耗の程度が弱く使用痕光沢の同定は、不可能である。2と3では、ランダムな線状痕がみられるだけで、使用痕光沢は、認められない。以上のことからこの石器は、ほとんど使用されていないと考えられる。

#### 資料11・小形削器

石器は、素材剥片の末端付近に微細剥離を伴う。1(写真6)は、縁辺に使用痕光沢が顕著で、E1、E2タイプと考えられる光沢が見られる。線状痕は、明瞭ではないが使用痕光沢の形成状態から石器の長軸にほぼ平行する方向である。推定される被加工物は、生皮あるいは乾燥皮である。3、4では、使用痕光沢は認められず、ランダムな線

状痕がみられるだけである。これらの線状痕は、使用によるものではないと考えられる。

#### 資料12・小形尖頭削器

石器は、押圧剥離で整形された2側辺からなる尖頭部を形成している。尖頭部には、2(写真7)と3(写真8)のように使用痕が明瞭である。線状痕は、細かいものから太くて深いものがあるが、石器の長軸にほぼ平行する方向である。使用痕光沢タイプは、E2である。推定される被加工物は、乾燥皮などである。石器の使用法については、搔きとりが考えられる。

#### 資料13・小形尖頭削器

石器は、周辺部を主要剥離面側から押圧剥離で急角度な2側辺を作り尖頭部を形成している。石器のすべての面を観察したが明瞭な使用痕光沢および使用に伴う線状痕は認められなかった。1については、表面にピットが多数ありあれた状況であるので使用による結果の可能性があるが断定はできない。縁邊にみられる非常に明るい光沢は、金属粉が付着しており、発掘時に金属の道具などが当たった時のものである。2と3では、使用痕は認められない。以上のことからこの石器は、ほとんど使用されていないと考えられる。

#### 資料14・小形尖頭削器

石器は、周辺部を主要剥離面側から押圧剥離で急角度な辺を形成している。石器のすべての面を観察したが明瞭な使用痕光沢および使用に伴う線状痕は認められなかった。1、2、3では、ランダムな線状痕のみで使用痕光沢は認められない。

#### 資料15・小形削器

石器は、縦長剥片を用いてそのバルブ周辺を押圧剥離で整形している。左側辺と末端部には微細剥離がみられる。1では、縁邊が潰れており太い明瞭な線状痕が側辺に対してほぼ直交する方向にみられる。2では、細かな線状痕がみられるが使用によるものかどうか不明である。3では、線状痕が明瞭で縁邊にほぼ平行する方向でみられる。3の辺には微細剥離も伴っており観察された線状痕は、使用によるものである可能性が高い。使用痕光沢については、摩耗の程度が弱いため不明である。石器の使用法は、微細剥離と線状痕を手がかりとすれば、鋭い左側辺を刃部とする削りが考えられる。

#### 総合所見

15点を分析した結果、明瞭な使用痕光沢が観察されたものが7点ある。その他のものは、光沢が微弱であるため使用痕光沢タイプが同定できなかったものや使用痕光沢がほとんど認められなかったものである。使用痕光沢が同定できたものについては、ほとんどがE2タイプの使用痕光沢をもっていることが明らかとなった。推定される被加工物は、乾燥皮である。石器の使用法も大半が搔きとりである。以上のことからこれらの石器は、皮革加工に関わる石器である可能性が高いことが明らかとなった。石器の形態はそれぞれ3種類ある。刃部がほぼ直刃になる小形搔器、尖頭部をもつ小形尖頭削器、これら2種類にあてはまらない削器である。にもかかわらず観察された使用痕光沢すべて同じで、使用方法も搔きとりと共に通している。では、刃部形態の差はいったい何に起因するのか、皮革加工の作業の中での作業内容の差を反映しているのか、それともまったく別の要因があるのか今後検討していくなければならない点である。

また、これらの石器は、非常に小形であるためおそらくなんらかの柄の先端部に装着されて使用されたことが十分に考えられる。今回の観察結果からも資料4と8に着柄の痕跡らしいものがみられた点は重要である。

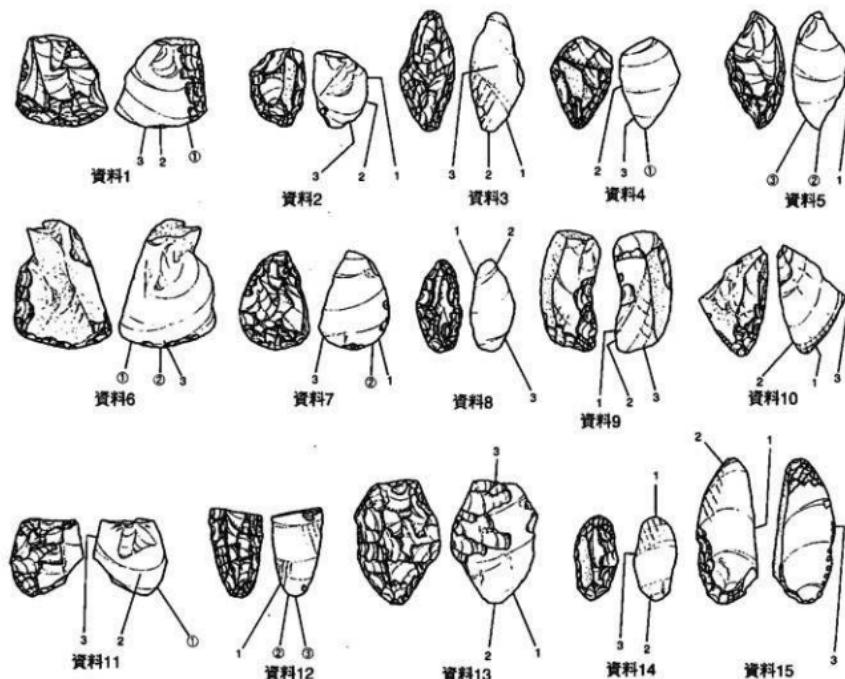
今後これらの石器を考えいく上で、製作技術・技法および使い方などのさらなる基礎資料の蓄積とこの時期の石器組成および前後の時期の石器組成を明らかにして、この種の石器の位置づけをおこなう必要があると思われる。

#### 参考文献

- 阿子島香 1989『石器の使用痕』考古学ライブラリー-56 ニューサイエンス社  
梶原洋・阿子島香 1981「頁岩製石器の実験使用痕研究—ボリッシュを中心とした機能推定の試みー」『考古学雑誌』67-1  
舟張淳一 2000「統・石器研究についての感想」『東京考古』18 東京考古講話会  
竹岡樹 1989『石器研究法』言叢社

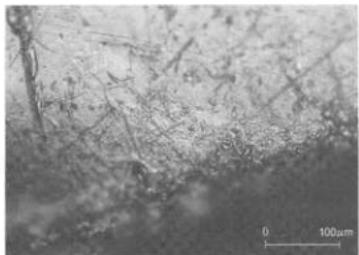
第7表 桂野4次調査・使用痕分析資料

資料No.	器種	地区・遺構	石材	使用痕光沢 タイプ	推定被加工物	使用法	備考
1	小形搔器	11土	黒曜石	E2	乾燥皮	搔きとり	
2	小形尖頭削器	11土	黒曜石	なし	不明	不明	未使用の可能性
3	小形尖頭削器	中央南区	黒曜石	不明	不明	搔きとり?	被熱
4	小形尖頭削器	中央南区	黒曜石	E2	乾燥皮	搔きとり	
5	小形尖頭削器	埋没小谷	黒曜石	E2	乾燥皮	搔きとり	
6	小形搔器	耕土中	黒曜石	E2	乾燥皮	搔きとり	
7	小形搔器	耕土中	黒曜石	E2	乾燥皮	搔きとり	
8	小形尖頭削器	中央南区下層	黒曜石	不明	不明	搔きとり	
9	小形尖頭削器	東区	黒曜石	不明	不明	搔きとり?	
10	小形搔器	東区	黒曜石	不明	不明	搔きとり?	
11	小形削器	西区	黒曜石	E1, E2	生皮~乾燥皮	搔きとり?	
12	小形尖頭削器	中央南区土坑周辺	黒曜石	E2	乾燥皮	搔きとり	
13	小形尖頭削器	40土	黒曜石	なし	不明	搔きとり	
14	小形尖頭削器	12土	黒曜石	なし	不明	搔きとり?	
15	小形削器	1住PTT 6	黒曜石	不明	不明	削り	

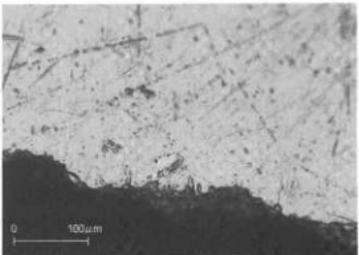


なお、全ての観察位置で写真撮影され報告されているが、今回紙数の関係で大半を省略し、E2 の観察された位置のみ第74図に写真を提示した。

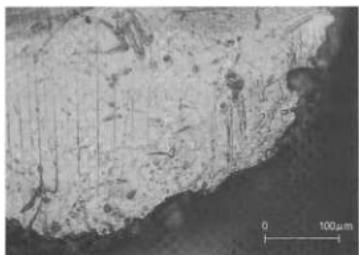
第73図 使用痕観察石器と観察位置（1/1）（○印はE2観察位置）



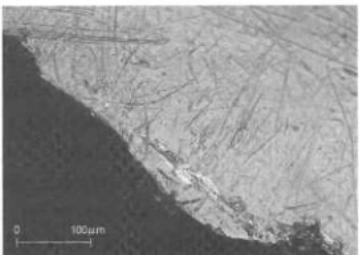
1 (資料1-1)



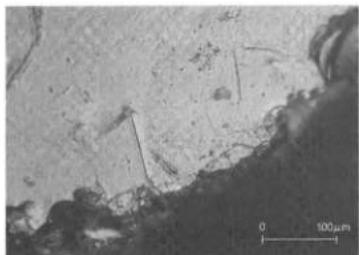
2 (資料4-1)



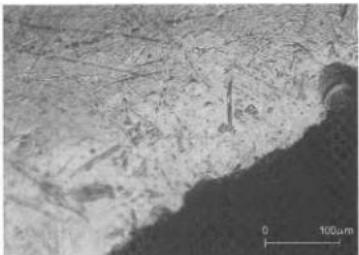
3 (資料5-2)



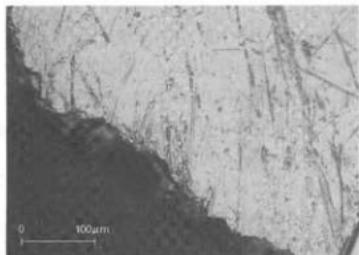
4 (資料6-1)



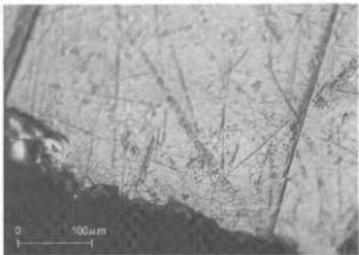
5 (資料7-2)



6 (資料11-1)



7 (資料12-2)



8 (資料12-3)

第74図 使用痕写真

## 第5章　まとめ

1. 集落の構造性 本遺跡は、五領ヶ台Ⅰ式期の遺物・遺構群が特徴である。桂野遺跡第1～3次調査では五領ヶ台Ⅱ式期の遺物・遺構群を中心であり、地形的にもそれぞれ別の尾根上に立地していることから、それぞれ時期を違えた単独の集落と思われる。本遺跡の集落は小河川沿いの低い地域に住居跡が並び、土坑や集石群が高い地点にある。また、集石群と土坑群とが地点を異にして団塊状に分布する。さらに詳しくみると、中央区の集石群の北縁部に土坑群が直列し、中央南区の土坑群の東縁部に集石や礫を多く持つ土坑が継列し、それぞれの遺構群を縁取っている。こうした遺構の配置は、住人のある種の意図に基づく構造性を持っているとみることができる。なお、五領ヶ台Ⅰ式期の3軒の内、3住は2・3住より古い可能性があり（今福1999）、1時期の住居跡数は1～2軒ということになる。

2. 遺物分布の構造性 集落の構造性と遺物分布との関連性を検討してみると、石器の多くは分散分布し構造性との関連性が窺えなかったが、打製石斧と礫石皿、スリ石が中央南区の土坑群および土坑周辺に多く団塊状に分布していた。打製石斧は調整剥片や打斧片を含め土坑内から出土したがスリ石や礫石皿は土坑内ではなく土坑周囲に点在した。スリ石は集石内から出土するものもあるが全周を強度に磨った卵形で土坑群周囲から出土するものと形態を異にする。スリ石や礫石皿については中央南区がそれを使用した作業の場である可能性が高い。打製石斧については土坑の機能との関連性（墓坑？）が考えられる。

3. 土坑の形態と機能 土坑を分類すると、底が平坦で壁がややオーバーハングするもの（10・18・23・25土）、ある方向に深く掘られた袋状のもの（17・27・34・36土、3住P1・2）、ボル状などがあるがいずれも分散分布する。遺物の出土状況で特徴的なのは7土で、中位まで埋め土した後にその面に砾を配しさらに埋め土して上面を焼土で閉塞している。遺物分布からも埋める過程が読み取れるものがある。12・30・36土は底面を含む覆土下位に、1・15・22・23土は覆土下位に遺物が多いが、18・19・21・29土は中位から上位、10・17土は中位に大型砾が1・2点置いてある。中央南区の土坑群は中位以上に遺物を含むものが多く、さらに打製石斧を含むという特徴を持つ。特に21土は割れた大型砾を土坑中位を閉塞するように面的に配しており、その直下から耳鉗も出土したこから墓坑である可能性がある。同様に中央南区の土坑上位を打製石斧を含む遺物群や小砾の群集で閉塞した土坑は墓坑とみることも可能である。

4. 小型搔器の多量出土 桂野遺跡では、搔器の多量出土が特長である。今回は揚子状やV字状の小型搔器が27点出土したが、第1～3次調査では搔器と分類された石器が151点も出土している。今回の調査では3住では出土しておらず、五領ヶ台Ⅰ式期の初期ではまだ出現していない可能性がある。さらに五領ヶ台式期の後半でもっとも多出するものと考えられる。今回使用痕分析を行なったところ、乾燥皮の掻き取り動作で特徴的に観察されるE2タイプの光沢が先端刃部で確認され、皮革加工の道具であることが推定され、旧石器時代や草創期末期に多くみられる搔器と共通することが確認された。桂野遺跡の搔器は、通常の揚子状搔器も存在するものの、桂野遺跡特有のV字状や梢円状の形態のものが主体を占め、その定義に苦労があった。桂野遺跡第1～3次調査の報告書の中で、はじめて搔器を報告した網倉邦生氏は桂野遺跡の搔器を「剥片の一辺もしくは複数の辺に通常剥離・押圧剥離による厚形細部調整を伴う石器」と定義している（網倉2000）。搔器の定義は「剥片もしくは石刃（時に細石刃）の端部に規則的な連続細部調整で丸味を帯びた刃部が作り出された石器」（山中1976）であり、通常は円刃であることが認定の基準となる。定義から円刃という基準が欠落したため「2辺からの調整により、厚みのある尖頭部が作出されるもの」と網倉氏によって定義された石錐との違いが不明瞭となり実際、石錐と分類されるべきものが混入し、また一部の削器も搔器と分類される事態となっている。一方、今回の報告では円形刃部を基準としているものの、半径2mmという非常に狭い円弧の刃部を円形刃部として認定するという困難さを含んでいる。その定義の不安定さは、桂野遺跡特有のV字状や梢円状の石器を、現状で我々が持つ石器分類群の中の搔器に当てはめざるを得ないことから生ずるジレンマである点を指摘しておかねばならない。その特異な搔器についての再論（網倉2001）で網倉氏は、報告でA類とした「刃部の平面形態が尖刃状を呈するもの」とA'類とした「器体より幅狭の円刃が設けられるもの」の両者を「尖刃搔器」

と呼び「二辺からの厚形細部調整により尖刃状を呈し、刃部の正面・側面觀が鳥の嘴状である石器」と再定義した。そして、「尖刃搔器」は「廃棄に到るまでの一連の過程に応じて結果的に独特の形態を有するようになったもの」とし、二つの刃部がV字状に交差して「尖刃搔器」が形成されたことや、尖刃部分に刃部が形成されて通常の搔器の形態が出現するとする解釈を示した。問題は、この石器の機能刃部はどこであるかという問題であり、その点を使用痕分析に期待した次第である。その結果、半径2mm程度の狭小な刃部にE2の光沢を確認し、線状痕についてもこの狭小な刃部が機能刃部であることを指し示していた。さらに、保坂は網倉氏とともに、使用痕分析を行なった（株）アルカにおもむき、角張淳一氏、池谷勝典氏の助言を得て、太田公彦氏にその場で微細剥離を分析していただいたところ、石器の長辺を構成する緩やかな円弧の二辺は「搔き取りタイプ」の剥離で、比較的硬い対象に刃を立て搔き取り動作を行なったような痕跡であり、石器の表裏を抉むような着柄によって出現した可能性があるという指摘を受けた。さらに狭小な刃部には「曲げの剥離」が観察でき、刃部を寝かせて搔き取るような動作が推定された。池谷氏、太田氏の使用痕分析によって、網倉氏が「尖刃搔器」とした桂野遺跡の特殊な搔器は、機能刃部が2mm程度の半径の円弧を描く狭小な部分とすることことができ、緩やかな円弧の長辺は機能刃部ではなく着柄された部分であると結論付けることができた。なお、その名称については円刃を基準とする搔器の定義にのっとった場合、尖刀という名称はなじまないので「狭刃搔器」との名称を提案したい。

5. 繩文中期の小海退 繩文中期に小海退があることは、太田氏ほか（太田ほか1982）が後水期における海面の小変動について検討した際に提示され、炭素14年代で5000～4000年前のものを「縄文中期の小海退」と呼んでいる。さらに、太田氏ほか（太田ほか1990）では、北海道から樺磨灘までの地域で4500年前頃に「縄文中期の小海退」が報告されているとしている。最近では、福沢仁之氏が島根県東郷池の湖沼年縞堆積物の研究で暦年代で4500～3600年前に顕著な海水準の低下を確認し、縄文中期の小海退に相当するとしている。さらに、この海水準の低下がグローバルな寒冷時期と一致するとした（福沢1998）。今回、桂野遺跡の五領ケ台I式土器の3つの炉体内の炭化材で得られた炭素14年代は4500年前後であり、縄文中期の小海退の時期であると認めることができる。搔器が寒冷化の指標となるという論議をかつて展開したが（保坂1999）、搔器の出現・多出と縄文中期の小海退の時期であるという点とは整合的である。

6. 磨の特長 まず、磨の大きさだが、重量と長さの2つの属性でグラフ化した。かねてより長さは正規分布に近い分布形態が指摘されており、磨補給によるグラフ変化のモデルが提示されている（小沢1992）。各遺構単位で構成磨の大きさ組成を比較するには長さがすぐれている（第75図）。各集石で集められた磨の大きさに違いがあることが容易に把握できる。磨は焼かれて割れしており、本来の集められた磨大きさ組成をみると完形磨を検討する必要がある。そこでグラフが極端な鋸歯状なものを除いて完形磨の最も多い区間に分類してみると、9cm未満の区間に磨分散分布域、住居跡、土坑（分1・3、2住、18・22・30土）がみられ、集石は7集のみである。9cm台の区間に4・10・12集、10cm台の区間に6・8・17集、11cm台の区間に1・5・9・16集があり、それぞれ集められた当初の磨の大きさに違いがあった可能性がある。しかし、完形磨のグラフの多くは程度の差はあるが鋸歯状であり、小沢氏の指摘する「一定の規範」が複数あることも考えられ、モデルが直截的に適応できない可能性がある。一方、重量グラフでは特に旧石器の磨群と比べ縄文の集石は重いものから軽いものまで非常に多様な重量組成であるため特徴の把握がむずかしい。そこで平均重量でみてみると、集石の完形磨で900gを越えるものがある（1・3・4・11・13集）。900g以上は旧石器時代の配石にあたり、縄文集石がいかに重い磨を用いているかが分かる。底部配石はすべて900g以上である。700～800g台が5・8・9・12・14・16・20集。700g未満が2・6・7・10・15・17集。4集のようによ長さによる認識と矛盾するものもあるが、当初集められた磨の大きさ基準の違いがかなり大きいことは指摘できる。一方、土坑内の磨は大半が300g未満の平均重量である。なお、住居跡の磨は600g以上で、3・4住は900gを越える。非常に重い磨が住居跡内に持ち込まれている。次に割れの状況をみてみると（第76図）、完形（10割）が最も多いもの（1～4・9～11・13・14・16・17集）、9・7割が最も多いもの（8・19・20集）、5・3割が最も多いもの（5・12集）、1割が最も多いもの（6・7・15集）である。集石では完形が多いものが主体であるが、土坑では13基が1割が最も多いものである。しかし、こうした土坑でも7・21土上部では完形磨が最も多く、特に21土上部の磨は平

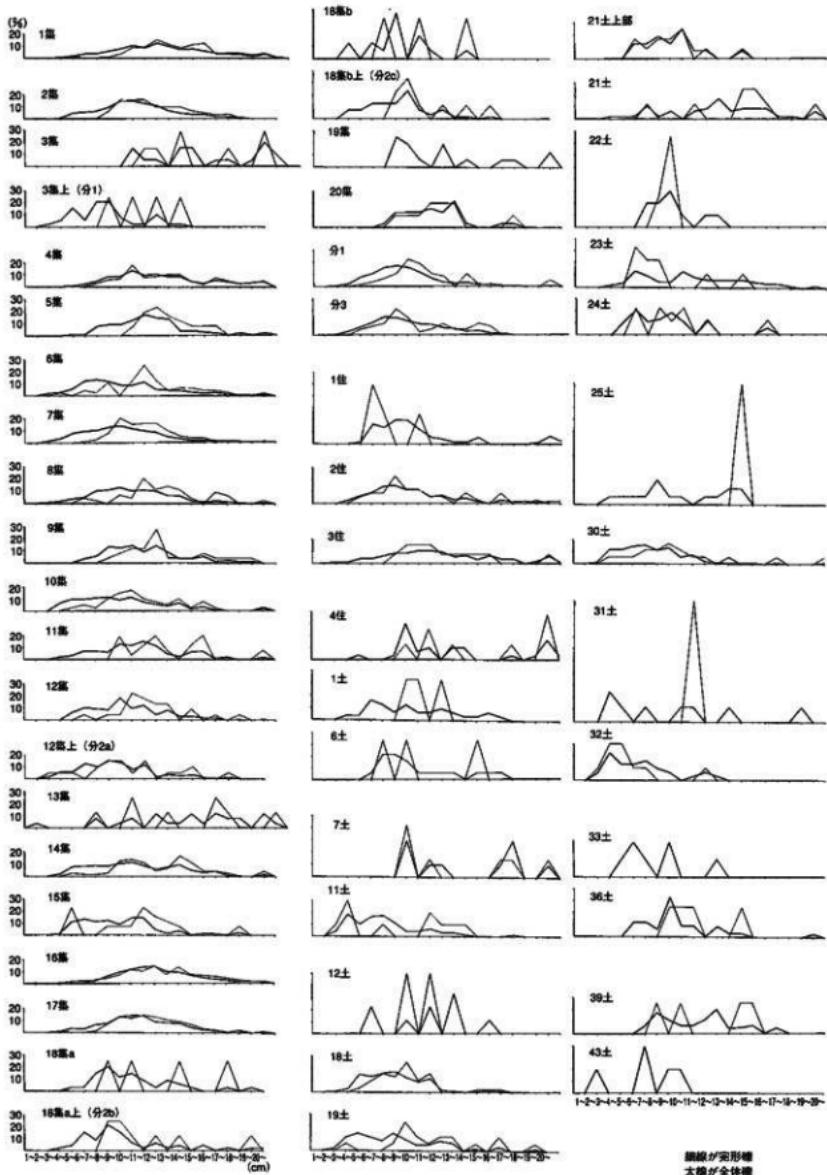
均重量も低いのでわざわざ小さい礫を集めているものと判断できる。もうひとつの検討項目として完形礫と全体礫との大きさ組成の違いをみてみたい。特に100 g 未満の礫のありかたが注目される(第77図)。集石では構成礫全体では100 g 未満が最も多く完形礫の100 g 未満が5 %未満のもの(6・7・10・11・14集)、全体では100 g 未満が5 %以上であるが最も多くはなく完形礫は5 %未満のもの(1・2・3・8・9・12・16・17集)、全体礫の100 g 未満も5 %未満のもの(4・5・13・19・20集)があり、この順で破損の進行程度が進んでいると理解できる。なお、15集は構成礫全体も完形礫も100 g 未満が最も多く、100 g 未満のものがわざわざ集められている可能性がある。土坑ではこれが比較的多くみられる(11・18・24・30・32土)。

7. 集石の分類 集石は大半が土坑を伴う。集石が納まる程度のポール形の土坑を掘り底部配石を持つもの(底部配石型; 1・5・7・8・10・17・20集)、底部配石を持たずポール形の土坑全体に礫が充填されているもの(土坑充填型; 9・13・19集)、深い土坑の上部を集石が閉塞するもの(土坑上部閉塞型; 2・4・6・14・16集)、土坑を作わないもの(平面型; 11・15集)である。12集は土坑を作わないが埋設土器の上位を閉塞している特殊な集石であり唯一五領ケ台Ⅱ式期である。これらの分布は底部配石型が集石群Aに3基あるものの、他は分散分布傾向を示す。集石の研究は、小菱一夫氏(1979)、上田典男氏(1983)、谷口康浩氏(1986)などがある。ここで行なった分類は各氏の分類に当たはめることができる。小菱氏は6種類すべて、上田氏の9種類の内第I類c種(掘り込みの底部に土器片が配されているもの)以外8種、谷口氏の26種類の内8種で谷口氏の分類は本遺跡にないものが多くみうけられる。なお、本報告で礫分散分布域としたものについては小菱氏のB-3型、上田氏の第IV類、谷口氏のIII群2類に該当すると思われる。

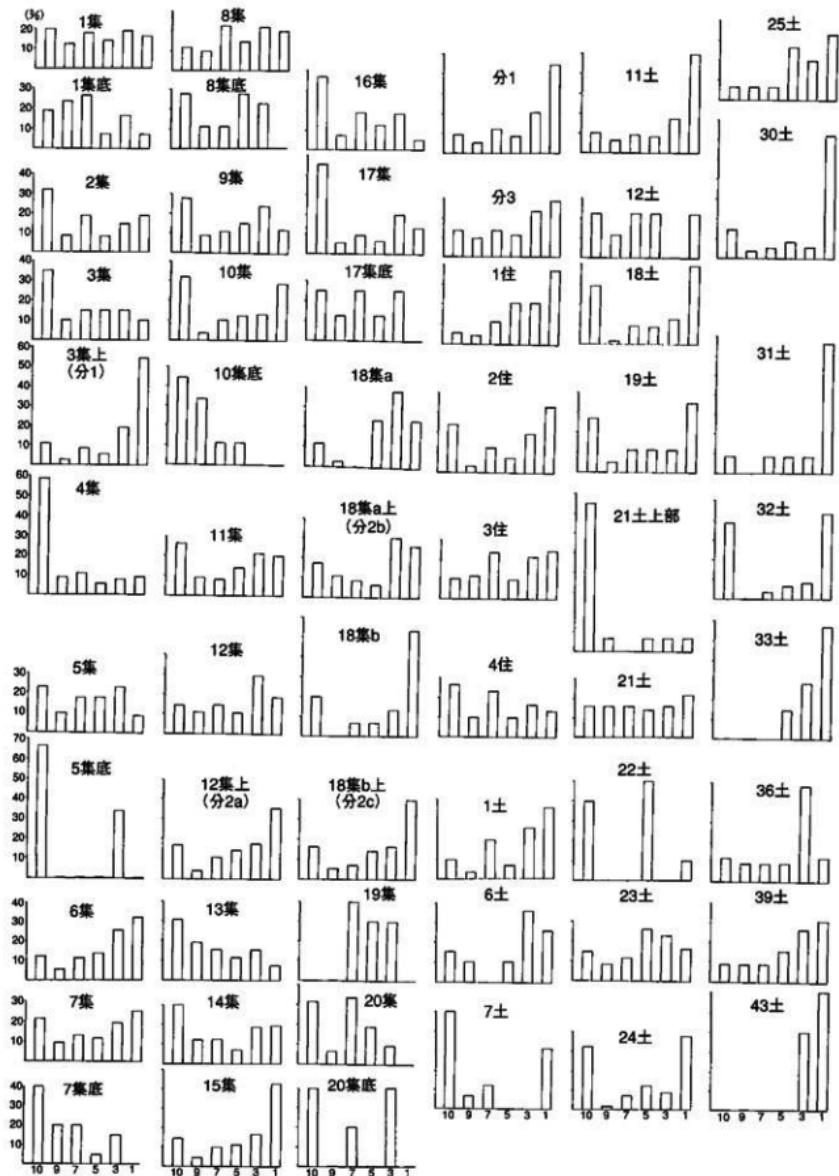
8. 集石の諸属性 集石内の接合状況をみると、接合礫が平面的にも垂直分布上もランダムに分布しているのが大半である。これは、削れた後に礫が動かされ「かきまぜ過程」を経ているものと思われる。礫個々の重量分布をみると、特に1 kg以上の重い礫に偏在性が読み取れるものがある。底部配石型では1集で4 kg以上の礫8個の内の6個が最上層にあり、9 kg台や11 kg台の巨大礫が含まれる。5集では1 kg以上の礫が周縁部の表層に偏在する。7集では南北部分に分布する。8集では南側2/3ほどの部分に分布する。10集は北東半部の周縁にあり、表層に集中する。土坑上部閉塞型では4集で2 kg以上の礫が西半部に偏在し、6集で1 kg以上の礫が中央南北ラインに帯状に分布し、特に2 kg以上の礫が深いレベルにある。土坑充填型では9集で1 kg以上の礫が中央北西-南東方向に帯状に分布し上部に偏在する。次にスス状付着物の分布をみると、底部配石型では1集で集石の周縁部で中層から下層にかけて偏在する。7集で底部付近に集まる。8集で平面分布上は中央付近に、垂直分布上は底部に集まる。17号集石では南東半部に多く分布する。底部配石についてはスス状付着物の付着率が3~8割で、集石本体が1割以下であるのと比べ高率である点で共通する。なお、3集は35%と高率であり、平均重量の重さも勘案して底部配石であった可能性が高い。土坑上部閉塞型では4集で西側周縁部に分布する。おそらく1000度以上の温度を体験したと思われる黒色鉱物溶融礫は、2・4・7・8・12集の各1点、6集に2点、10集に3点、分1に11点みられる。タール状付着物は光沢があり厚みのあるスス状付着物よりも濃厚な付着物があるが1・8・9・16・17集本体に各1点、7集本体に2点、14集本体に7点、7・10集底部配石に各1点と僅少である。なお、タール状付着物はスス状付着物の付着率に加えて集計している。礫の赤化の程度については、赤褐色、強赤褐色、弱赤褐色の3段階で分類した。集石では強赤褐色が0~5%が16基と大半で、1集55点・8.6%、5集17点・14.5%、19集3点・23.5%、20集5点・15.6%である。底部配石は1集1点・2.4%から20集1点20%の範囲である。礫分散分布域も5%未満である。一方、住居跡は1住9点・12%から3住49点・36.3%、土坑が5%未満が2基と5%以上がほとんどで、5~10%が4基、10~30%が11基で、12土の3点・33.3%が最も高率である。弱赤褐色は集石のみにみられ、1・2・10・16・18集に0.3~3.6%みられるが、17集が97点・34.5%と特異である。17集底部配石も50%が弱である。土坑上部閉塞型では、土坑覆土と礫との関係で、集石本体の直下にある炭化物を多量に含む層(A層)が、炭化物を含まずロームブロックを含む暗褐色土など(B層)に周縁部を囲まれるように分布している。2集ではA層が3・7層、B層が2・6・4・5層。4集ではA層が1層、B層が2~4層。14集ではA層が4層、B層が2・3層。16集ではA層が1層、B層が2・3層で、集石東縁部や下縁部に焼土を伴う。

9. 集石の使用過程 遺跡に残された集石は自然・人為両者の擾乱作用を経ている。報告に倍する量の礫を耕作土中から拾い上げており、集石の上部が相当失われているらしい。しかし、集石分類は集石下半部を問題にしており、使用過程終了直後の状況を扱っているとみてよいだろう。なにが行なわれたかその使用過程の検討が必要である。まず礫は赤化している。採集場所と考えられる河床礫とは赤味・褐色味が違う。黒色鉱物溶融礫やスス状付着物の存在も合わせて故意に焼かれたと考えられる。ただし、赤味が強いということと高温で焼かれたということの関係は、集石において赤褐色礫と黒色鉱物溶融礫とは同じではないことから対応しないと思われる。強赤化と完形度も対応しないので加熱回数とも無関係の可能性がある。強く赤化しやすい礫があるのだろう。住居跡と土坑に強赤褐色が多いが、黒色鉱物溶融礫が存在しない。住居跡や土坑では、「赤い礫」が要求されたとみるべきかもしれない。しかし、17集の弱赤化礫が特に多いという特異性は、焼けの弱さと関連するかもしれない。完形礫が44%と4集について多く、加熱・急冷却（対象物への機能）の経験回数の少なさを物語る可能性がある。谷口氏の乙類（1回ないし数回に限り、非継続的に供用された集石施設）にあたると思われる。集石構成礫は接合関係の検討から割れた後に激しく動かされ「かきまぜ過程」を経ていると判断できる。焼かれ、熱くなった礫がかきまぜられる。こうした過程は、「石蒸し料理法」仮説を強く支持する材料である。しかし、各分類群では使用過程が異なる。底部配石型では土坑内に炭化材・焼土・灰などの燃焼痕が認められないが、底部配石は焼けており、スス状付着物の付着率も高率である。底部配石は加熱され機能したとみられ、その後炭・灰などが焼き出された可能性がある。土坑上部閉塞型では、土坑底部ないしは埋め土した面上に燃焼痕が認められ、焚火がなされその上に礫を乗せて焼き、燃焼痕を残した状態で対象物に機能させた状況が想定される。さらに土坑覆土の検討から、加熱した礫の上をロームブロックを含む暗褐色土などで覆っていると考えられる。土坑充填型には燃焼痕がなく、まったく別の場所で焼いた礫を持ち込んだ可能性がある。平面型も同様である。各型の構成礫の重い礫やスス状付着物を検討すると、分布上の構造性が把握できるものがある。重い礫は表層に置くことでその自重を生かして下層の礫や機能対象を押さえ付け、焼けた礫と機能対象とを密着させることを意図したものと考えられる。重い礫を区別して別に機能させていた可能性が高い。スス状付着物の下半部集中傾向は底部配石の付着率の高さと関連するものと思われる。スス状付着物は「焚火材との接触」か「機能対象との接触」によって付着すると思われる。いずれにしても、集石のある部分が特に集中的に接触していた可能性を示す。しかし、この傾向は各分類群に共通してみられるものの、すべての集石にみられるものではなく、集石活動ごとで臨機的に判断され、適宜出現したものと理解される。完形礫の長さや重量分布グラフについては、破損の進行にもかかわらず形態をあまり変えないことが想定される。したがって、完形礫グラフと全体礫グラフとの違いが明瞭であるほど、破損の進行程度や、抜き取り、補填などの行為が想定されることになる。ただし、接合作業の結果、造構間接合がほとんど見いだされず孤立的である状況が示されたことから、ある造構から抜き取り、別の造構へ補填する在り方は想定できないことになる。完形度や重量分布の違いは破損の進行程度を表し、加熱・冷却（対象への機能）の回数と対応することになる。そのランク分類の各分類群での構成状況をみてみると、各ランクのものをほぼ均等にもっており、各分類群の中で使用回数の違いや集められた礫の大きさの違いが顕著にみられる。しかも、遺跡内の分布もランダムである。なお、礫分散分布域の構成礫は小型礫や破碎礫が最も多いが、重量分布、長さ分布、完形度分布が底部配石型の7・10集、土坑上部閉塞型の6集とほとんど同じである。礫分散分布域は谷口氏が指摘するような「廢棄ブロック」ではなく、他の分類の集石とは違った機能対象・使用過程をもつものとの認識も可能である。

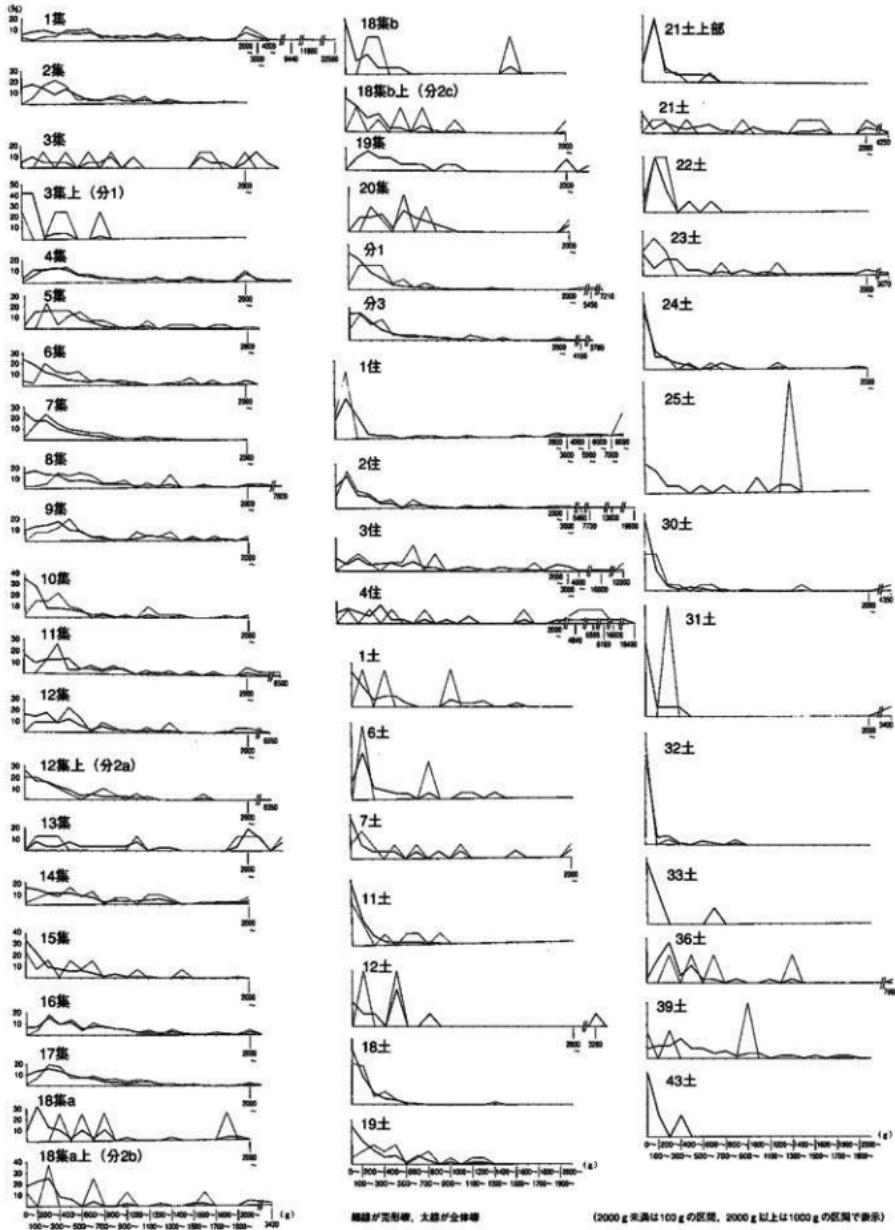
(引用文献はP112に掲載した)



第75図 桂野遺跡各遺構出土品の長さ構成状況相対度数分布グラフ



第76図 桂野遺跡各造構出土礪の完形度構成状況相対度数分布グラフ



第77図 桂野遺跡各遺構出土品の重量構成状況相対度数分布グラフ

## 第2編 原山遺跡

### 第1章 発掘調査の経緯と経過

#### 第1節 発掘調査の経緯

国道137号上黒駒バイパスの工事に先立つ試掘調査を平成8年度から進めてきたが、平成12年度で全体の調査が完了することとなった。最後の試掘地は道路工事対象地域の南端部の御坂町十郎の新倉・細野・原山地区である。平成12年5月17日から6月7日まで実施し、新倉地区では縄文時代と思われる焼土遺構1基と古代以降と思われる土坑1基を確認した。しかし、遺物がほとんどなく他に遺構が確認されず、かなりの傾斜を持つ地形面であったので集落等の存在の可能性が低いと判断し、工事に引き渡すこととした。一方、細野・原山地区では尾根の頂部で多量の土器が出土し住居跡等の遺構の存在が予想されたため本調査を実施すべき地域として土木部との協議を行なった。その結果、平成13年度当初に発掘調査を行なうこととなり、平成13年5月21日から7月9日かけて実施した。

#### 第2節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

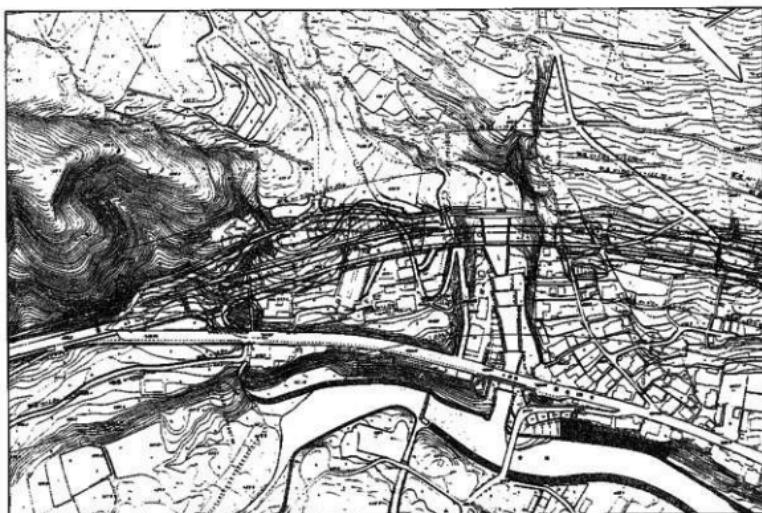
調査担当者 保坂康夫、田口明子

調査作業員

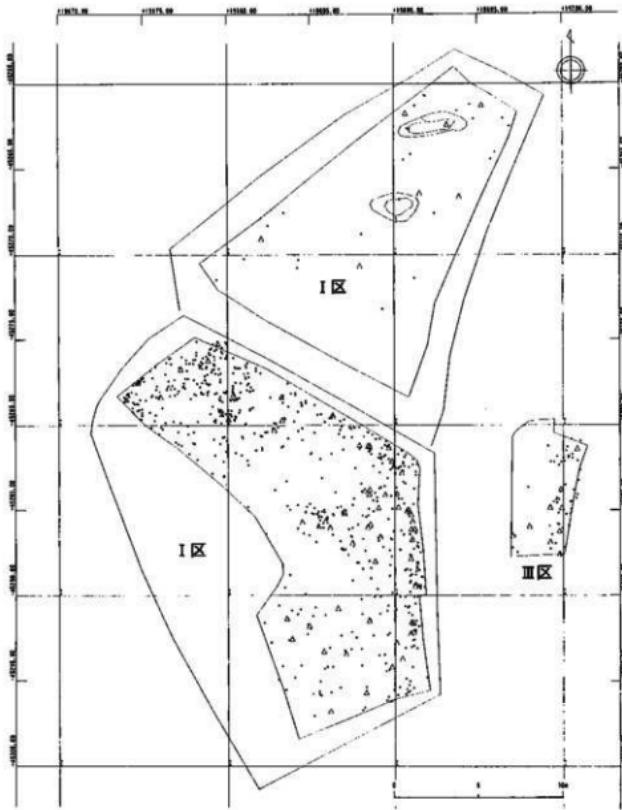
渡辺旭光、河野逸広、杉本悠樹、大塚昭六、鈴木初音、千野富子、宮久保あさの、青柳清

整理作業員

三枝千穂美、小林順子、杉本悠樹



第78図 原山遺跡周辺の地形（網点が調査地点）



第79図 原山遺跡調査区と遺物分布図（1/300）（黒丸は土器、白ヌキ三角は石器）

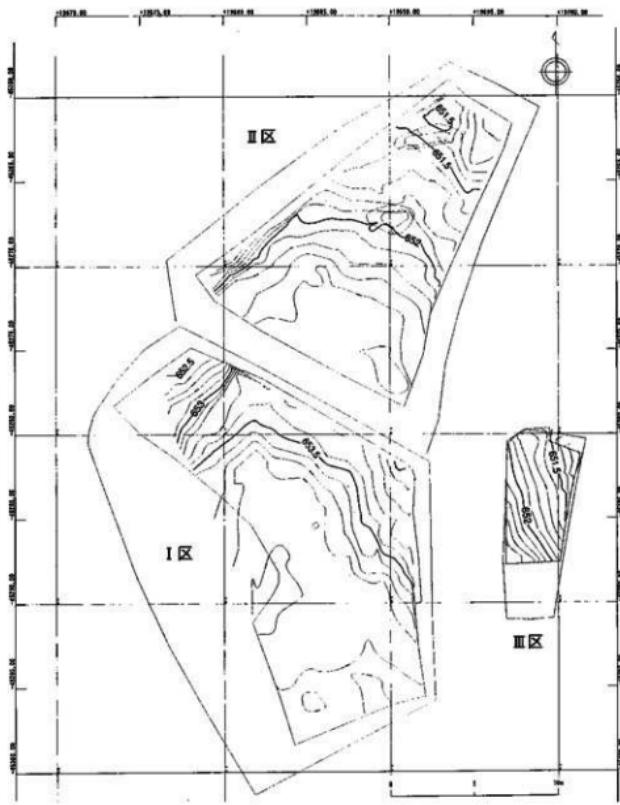
### 第3節 調査の方法と経過

調査対象とした1,000m<sup>2</sup>について遺物が出土した尾根の高い面をⅠ区、尾根続きの一段低い畠の面をⅡ区、Ⅰ区南側の斜面部分をⅢ区として、まず重機による表土剥ぎを行い、その後人力で掘り下げた。遺物は全点記録化することとし、光波測距儀とコンピュータによるトータルステーションを用いた。遺物はほとんどはⅠ区で出土し、他の区画ではほとんど出土しなかった。

## 第2章 遺跡の概要と立地

### 第1節 遺跡の概要

原山遺跡は東八代郡御坂町十郎字原山に所在する。この付近は戦時中に開墾され畠とされたが、その頃から注口土器の注口部分や定角式磨製石斧などの遺物が採集されていたという。戦後まもない昭和26年に平坦に切り盛りされて水田化され、今日に至っているという。尾根のひとつのピークにあたるⅠ区では多量の土器や石器が出土したが、こ

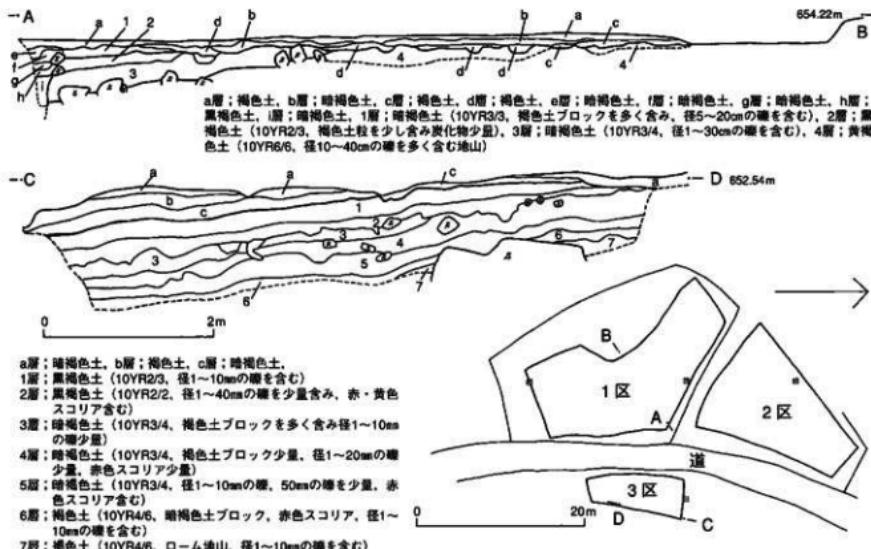


第80図 原山遺跡調査区内の地形（1/300,10cmコンタ）

の平坦化のために本来あったかもしれない遺構は確認することができなかった。また、大半の遺物が原位置を動かされた状態であった。ただし、位置区南から東側にかけての斜面部にかかる部分では辛うじてプライマリーな土層が検出され、押形文土器や撚糸文土器など早期中葉の土器片が若干出土した。本遺跡の主体は縄文時代後期中葉の加曾利B式期の土器群である。この時期の遺跡は甲府盆地内ではほとんど把握されておらず、御坂町三光遺跡、一宮・勝沼町の駒遊堂遺跡群、境川村水口遺跡で確認されている程度である。これらの他に、早期輪ヶ島台式土器、条痕文土器、前期諸磧c式土器、中期五領ヶ台式土器、後期称名寺式土器、堀之内式土器、平安時代甲斐型甕などの破片が出土した。地形的にはやせ尾根で居住に不向きとも思われるが、これほど多時期にわたって利用されたことを考えると、御坂峠を行き来する交通の要衝としての位置付けが想定される。

## 第2節 基本土層

第81図に基本土層を示した。アルファベットは後世の人为層、数字が自然層。ここでも黒色土中位に黄色帯（A-Bラインの1層、C-Dラインの3層）が確認できる点が注目される。黄色帯以下の土層から押形文土器など古い土器が確認された点も整合的である。黒色土層直下のローム層の発達は弱く、おそらく山体斜面崩壊に伴う山礫層が基盤



第81図 原山遺跡の土層 (1/60) と調査区配置図 (1/600)

層となっている。工事中の断面観察ではこの山礫層の下位に部分的にローム層の薄い堆積がみられるので、斜面の安定と崩壊を繰り返していた地点と思われる。そして、最後の崩壊が黒色土堆積の直前であったことが想定できる。

### 第3節 周辺の地形と遺跡

本遺跡の西側には檜峰神社が鎮座する神座山領から流れ出でる神座川があり、比高10m程度の崖線を形成している。東側には傾斜面が広く発達しており金川に至る。遺跡の乗る尾根は南に続き、神座川東岸に発達する山地緩斜面に連なる(P5, 第5図)。この地形面には縄文土器後期も出土している遺跡がいくつか確認できる。

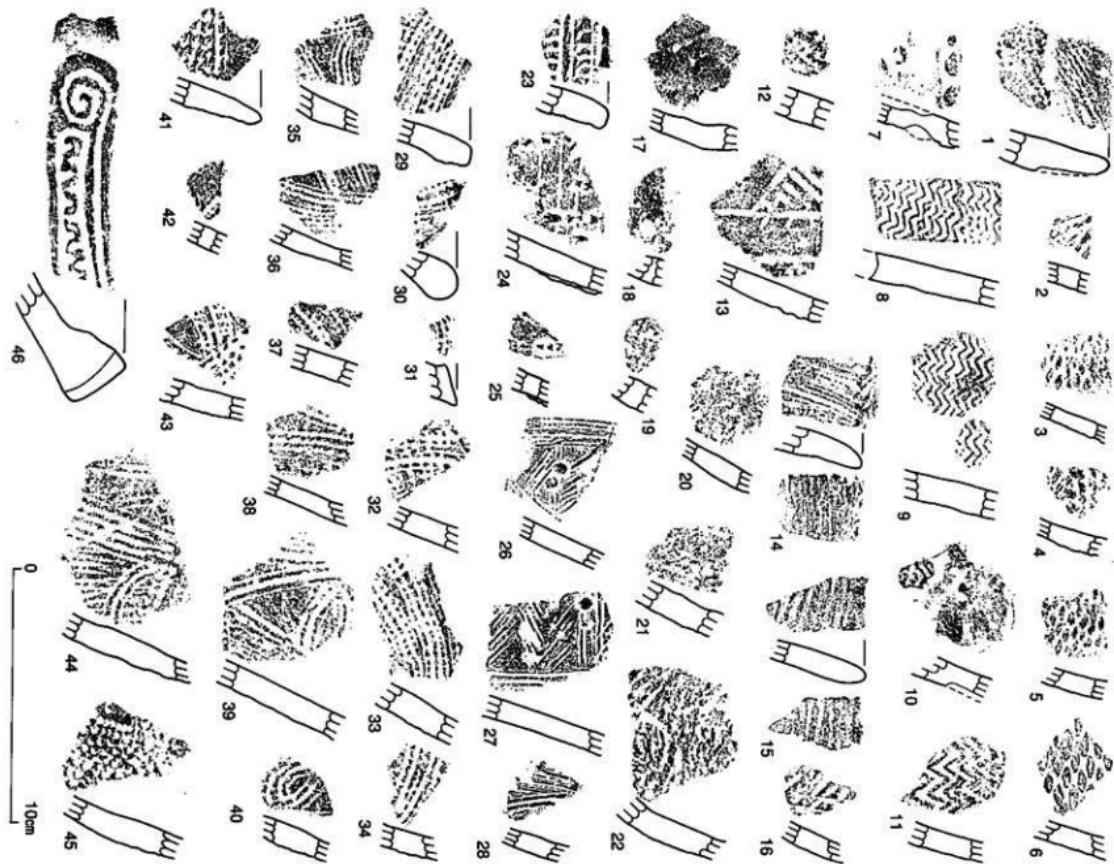
## 第3章 出土遺物

### 第1節 縄文時代早期の土器

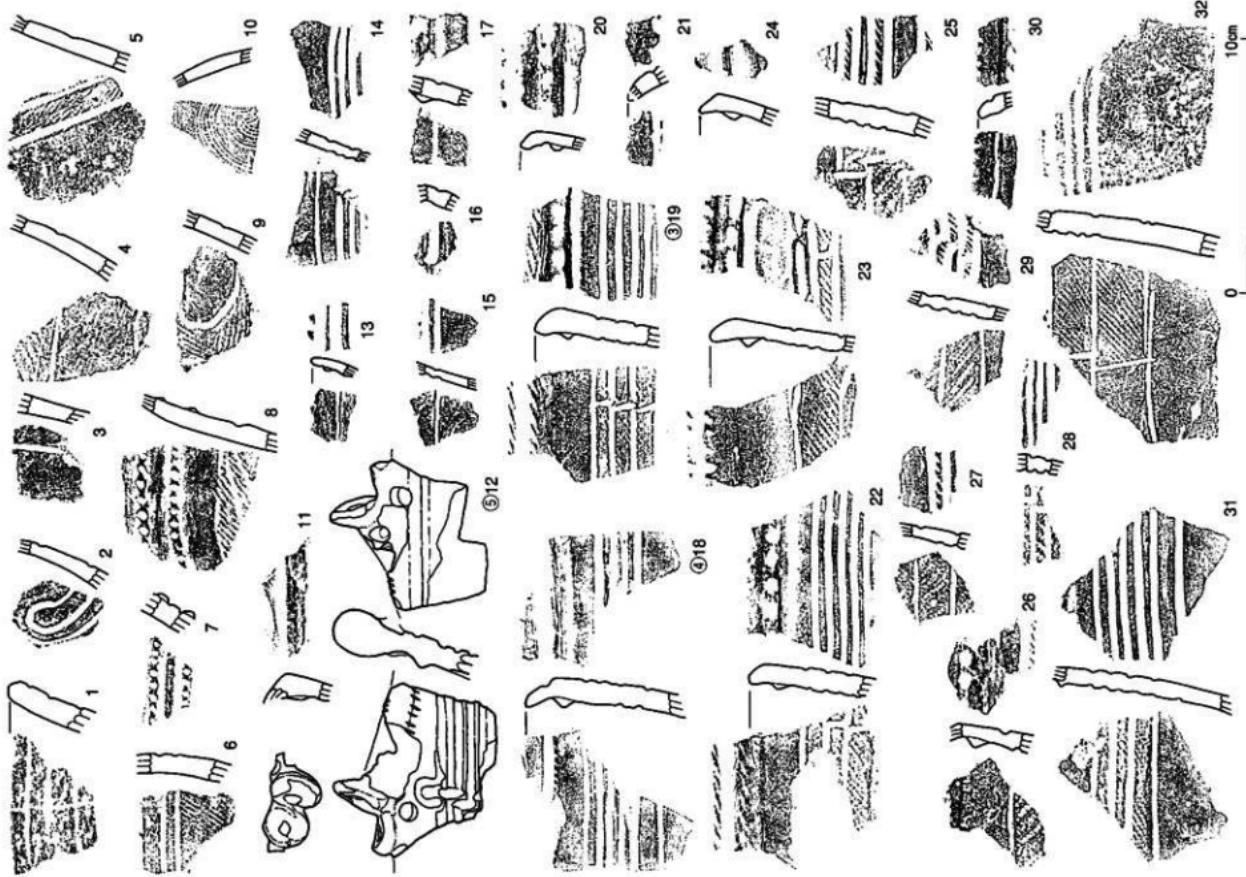
第82図1~22が早期の土器。1・2は撚糸文土器では口縁部外面が剥落しその下地に撚糸文がみられる。器形を成形段階で撚糸文を施しながら輪積みしていると思われる。3~7は楕円押形文土器。6は胎土が綿まり内面にミガキが施されている。7は大粒の押形文。8~12は山形押形文土器。9・10は同一個体。13は鶴ヶ島台式土器。14~16は条痕文土器で纖維を含む。14の口唇に刻みが施されている。17~22は無文で纖維を含む。22の外面は粗い縄文かもしれない。

### 第2節 縄文時代前期の土器

第82図23~45が前期の土器。23が爪形文が施文され諸磯b式と思われる。24・25は結節浮線文がみられ。26~28は矢羽状の集合沈線文で、26・27には対をなす添付文がみられる。29~38は細い結節沈線文が施されている。24~38は諸磯c式と思われる。39・40は平行沈線によるレンズ状文様が描かれている。41~45は結節回線文で43・44はレンズ

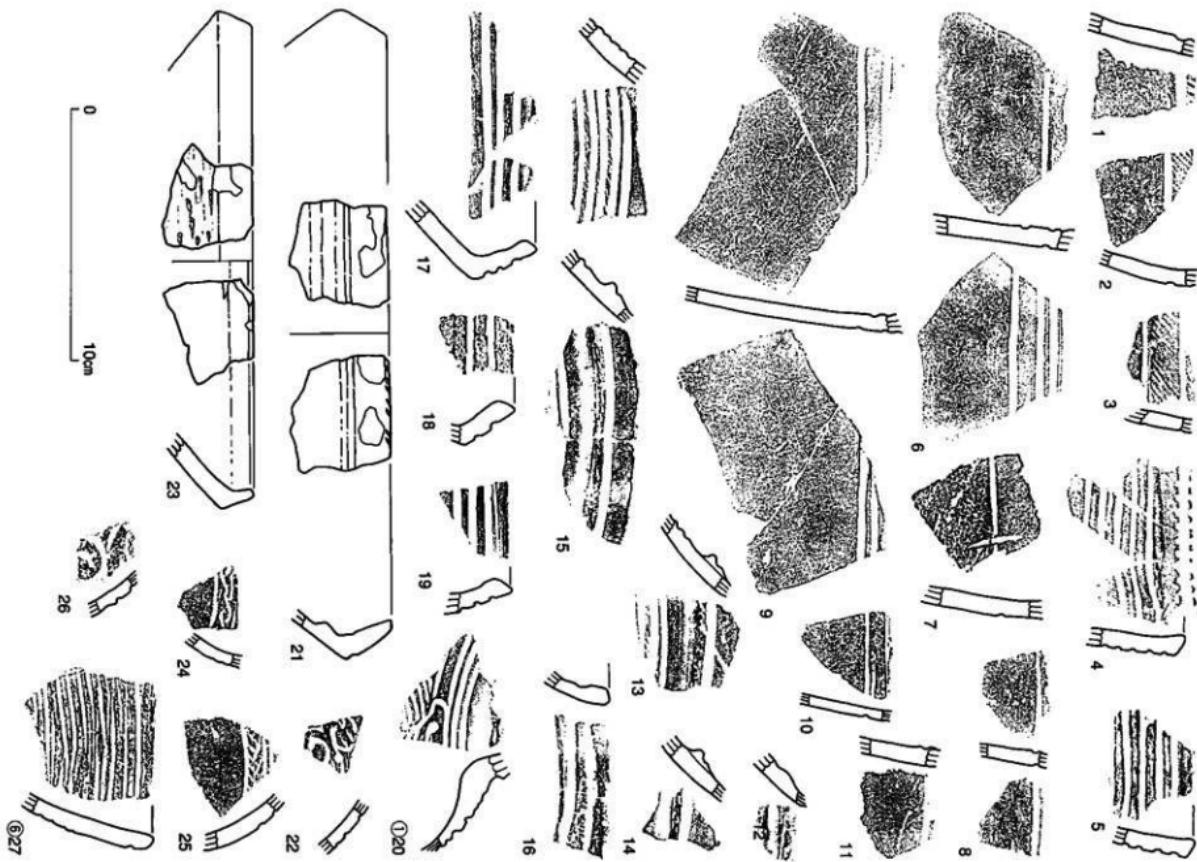


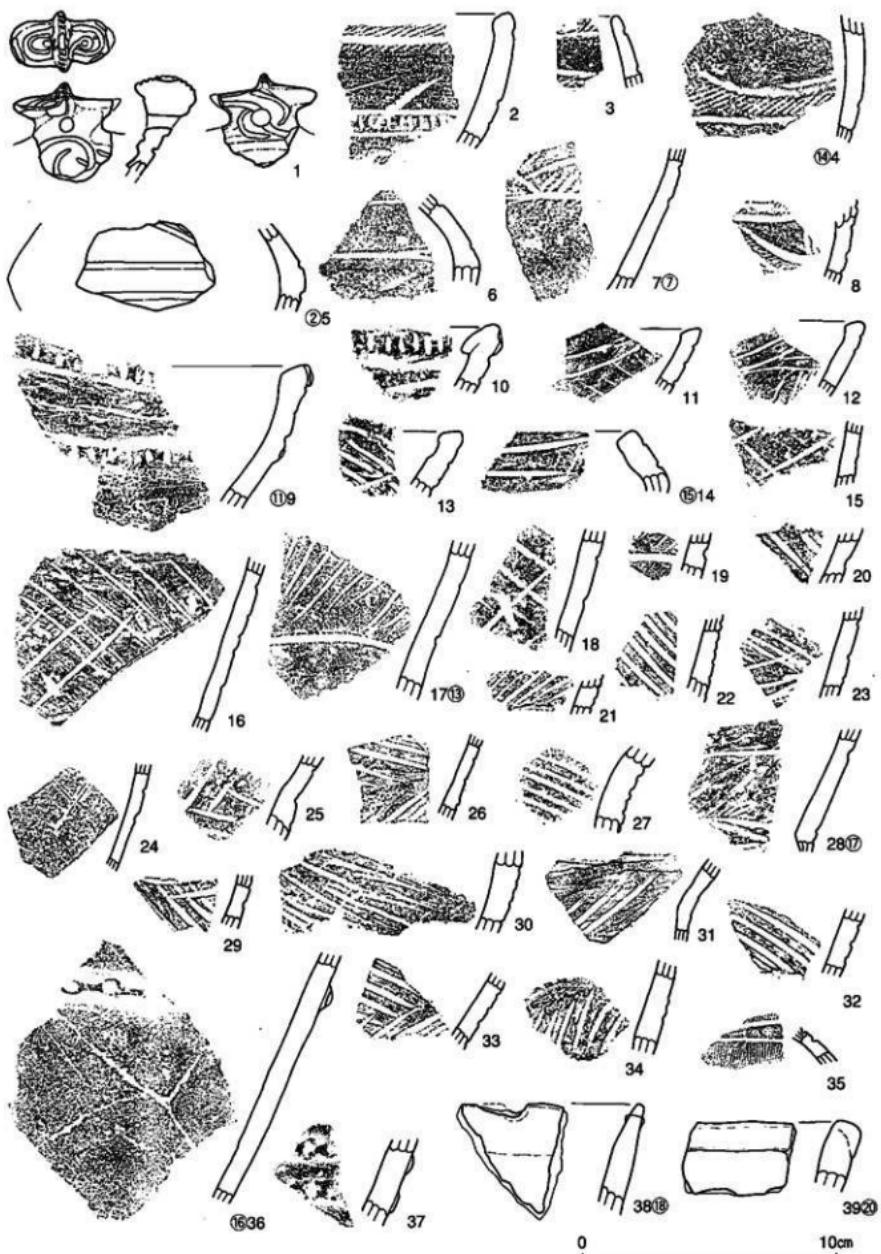
第82圖 出土土器(1) (1/2)



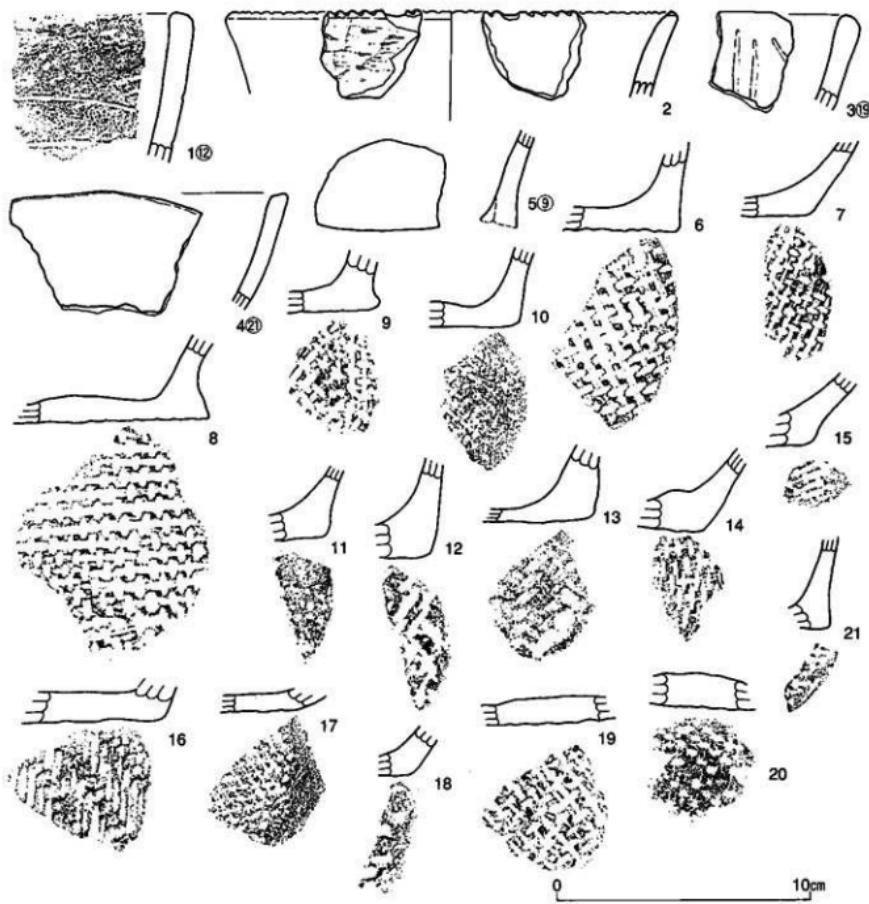
第83圖 出土土器(2) (1/2)

第84図 出土土器(3) (1/2)





第85図 出土土器(4) (1/2)



第86図 出土土器(5) (1/2)

状のモチーフがみられる。39・44には集合沈線がみられる。39～45は十三菩提式と思われる。

### 第3節 縄文時代中期の土器

第82図46は押し引き沈線文とその周囲に交互の刺突文がみられる。五領ヶ台式の浅鉢である。この他の中期の土器は縄文地文のものが散片ある程度である。

### 第4節 縄文時代後期の土器

後期の土器、特に本遺跡で多量に出土した加曾利B式土器は粗製と精製とに区分されるが、その分類基準はまちまちである。ここでは、土器内外面を強く研ぎ調整したものを「研ぎ調整土器」とし本報告書での「精製土器」の定義とする。また、内面を若干研いでいるが外側は研ぎがみられないものを「未調整土器」と呼び「粗製土器」の本報告

書での定義とする。なお、両者には有文のものと無文のものがある。

第83図1は口縁部直下に横走沈線を施している。2は沈線による蕨手状のモチーフがみられる。3は綫の沈線。4～6は磨り消し繩文。1～6は中期終末から称名寺・堀之内式段階の後期初頭と思われる。7・8は押圧隆文と磨り消し繩文がみられ、堀之内式と思われる。9は磨り消し繩文で堀之内式と思われる。10が細かい櫛齒状工具による施文で堀之内から加曾利B式にかけての注口土器と思われる。

第83図11・12は同一個体で把手を持つ。外面に並行沈線と区切文が、内面に深い沈線と庇状の隆帯がめぐる。把手の形態は安孫子昭二氏の下北原段階に近似する。内外面とも強く研かれている研き調整土器である。13～18は外面の並行沈線文、内面の深い沈線と庇状の隆帯をもつ。14には区切り文もみられる。19～32、第84図1～3は外面に横走する沈線と繩文による文様帶のあるもの。18～24・26・30は内屈する口縁を持つ。19～24、26が口縁部で内面の口縁部直下に刺突文と庇状の隆帯を持つ。19～32、第84図1は内面に横走並行沈線文がみられ、その間に23では繩文、25・26・27・29・第84図1では刻みがみられる。19・22・25・28・32では区切り文がみられる。いずれも強く研かれた研き調整土器である。第84図4～11は外面に横走沈線文を持つ。6・8・9・11は内面にも横走沈線文がみられる。やはり研き調整土器。12～15は浅鉢で、内面に庇状の隆帯とその上の深い刻み、横走する並行沈線文がみられる。研き調整土器。16は内面に横走する並行沈線文の浅鉢。17～19は内屈する口縁部を持つ浅鉢で、外面に横走する並行沈線文がみられる。研き調整土器。21・23も内屈する口縁部を持つ浅鉢で、21は内面に庇状の隆帯、口唇部に刻み、外面に一条の沈線がみられる。23は口縁部が短く、胸部外面が横方向にケズリ調整されている。この部分以外は研きが施されている。いずれも研き調整土器。20・22・24・25・26は注口土器の胸部で「の」の字文や入組文がみられる。いずれも研き調整土器。27は外面に並行沈線文が幾重にもみられるもので研き調整土器。第83図11～32、第84図の土器は加曾利B式と思われる。

第85図1は把手部分で安孫子氏の大矢場段階に近似する。しかし、把手直下に「の」の字文があり比較的旧い要素が残っている。2・3は口縁部直下に繩文帯がめぐる。2は並行沈線文の間に刻みを施している。4・7・8は弧線と繩文による施文がみられる。5・6はそろばん玉状の器形である。1～8は研きがなされた調整土器。9・10は波状口縁で口縁部に二条の刻みを持つ隆線文がみられる。11～34は羽状沈線文が施されたもの。36・37は押圧隆線のあるもの。38は口唇部に押圧状の刻みをつけたもの。39は折り返し状の口縁部。これらは内面に若干研きがなされるものもあるが外面は未調整の未調整土器である。なお、35は外面に細線文がみられ西日本の異系統土器らしい（櫛原氏教示）。第85図の土器は加曾利B式と思われる。

第86図1～4は未調整土器の口縁部。2は口唇に刻みがあり加曾利B式と思われる。5～21は網代底の底部。加曾利B式と思われる。

## 第5節 平安時代の土器

甲斐型土器の壺の小破片が1点出土した。

## 第6節 繩文時代の石器

黒曜石製石器では石鎚4点、石錐2点、楔形石器1点、二次加工薄片3点、石核8点、原石3点。その他の石材では、砂岩製大型剥片2点、砂岩製小剥片1点、粘板岩剥片1点、泥岩剥片1点、安山岩剥片1点、凝灰岩剥片1点、花崗岩製くぼみ石1点が出土した。いずれも時期の限定はできない。

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 御坂町原山遺跡出土縄文後期加曾利B式土器の胎土分析

山梨文化財研究所 河西 学

#### はじめに

原山遺跡は、甲府岩体の花崗閃緑岩が主に分布している御坂山麓斜面上で笛吹川支流金川と神座山川合流点に形成された縄文早期～後期の遺跡であり、特に縄文後期加曾利B式土器が破片ながら集中して出土している。ただしこの時期の明瞭な遺構は、本遺跡では検出されていない。甲府盆地においてこの時期の胎土分析例は報告されていない。ここでは土器の産地推定を目的として加曾利B式土器の胎土分析を行ったので以下に報告する。

#### 試料

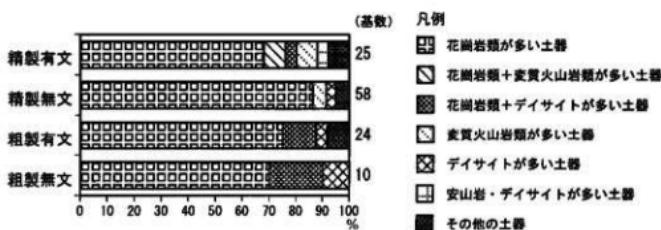
土器は、考古学的調査によって精製土器と粗製土器に分類され、さらに土器表面の文様の有無によって土器が分類されたものを用いた<sup>1)</sup>。遺物全体の胎土の傾向を把握するために、予めこれらの土器破片をルーペを用いて肉眼観察した。観察は、粗製無文土器だけは口縁部資料のみを対象とし、精製土器および粗製有文土器は全点を対象とした。その結果各型式学的分類とも花崗岩類で特徴づけられる土器が7～8割と多い傾向が顕著に認められた（第87図）。これらの結果を踏まえて分析試料を抽出した（第9表、第88図）。

#### 分析法

以下の方法で薄片を作製した。土器試料は、切断機で3×2.5cm程度の大きさに切断し、残りの試料は保存した。土器片試料はエボキシ樹脂を含浸させて補強し、土器の鉛直断面切片（厚さ3mm）を切断し、X線透過写真を撮影し<sup>2)</sup>、その後岩石薄片と同じ要領で薄片を作製した。さらにフッ化水素酸蒸気でエッチングし、コバルチ亞硝酸ナトリウム飽和溶液に浸してカリ長石を黄色に染色しプレパラートとした。次に以下の方法で岩石鉱物成分のモード分析を行なった。偏光顕微鏡下において、ポイントカウンタを用い、ステージの移動ピッチを薄片長辺方向に0.33mm、短辺方向に0.40mmとし、各薄片で2,000ポイントを計測する。計数対象は、粒径0.05mm以上の岩石鉱物粒子、およびこれより細粒のマトリクス（「粘土」）部分とし、植物珪酸体はすべてマトリクスに含める。

#### 分析結果

分析結果を第8表に示す。X線透過写真を第89図に示す。試料全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリクスの割合（粒子構成）、および砂粒子の岩石鉱物組成および重鉱物組成を第90図に示す。重鉱物組成では右側に基数を表示した。岩石組成折れ線グラフは、各岩石のポイント総数を基数とし、各岩石の構成比を示したものである（第91図）。岩石



第87図 肉眼観察による土器の胎土分類

第8表 土器胎土中の岩石鉱物（数字はポイント数を、十は計数以外の検出を示す）

組成の第1と第2ピークによって土器を分類した(第3表)。クラスター分析の樹形図を第92図に示す。クラスター分析は、折れ線グラフと同様の10種の岩石データを用いて行なった。クラスター分析での非類似度は、ユークリッド平方距離を用い、最短距離法によって算出した。第92図では、本遺跡試料のはか、長野県長門町巣山遺跡群星戻岬Ⅱ遺跡の胎土分析結果(河西, 1999a)、および甲府盆地周辺地域の河川砂の岩石組成とを比較し、便宜的に1~19の番号をクラスターに付した。以下に特徴を述べる。

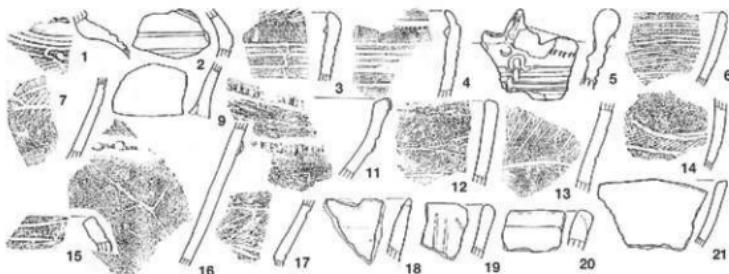
花崗岩類で特徴づけられる土器 (Nos. 1, 2, 3, 8, 11, 12, 13, 14, 15, 18, 19, 20, 21)

Nos. 1, 2, 8, 11, 12, 13, 14, 18, 19, 20は、花崗岩類とその構成鉱物の石英・カリ長石・斜長石・黒雲母・角閃石などから主として構成される。重鉱物組成では黒雲母・角閃石が卓越するが、No.19では緑簾石が多い。Nos. 1, 2, 8, 11, 12, 13, 14, 18, 19, 20は、第10表ではG群に、第92図では笛吹川・金川など笛吹川流域河川砂とともにクラスター4に分類される。追跡調査により花崗岩類が分布していることから地的土壤と推定される。

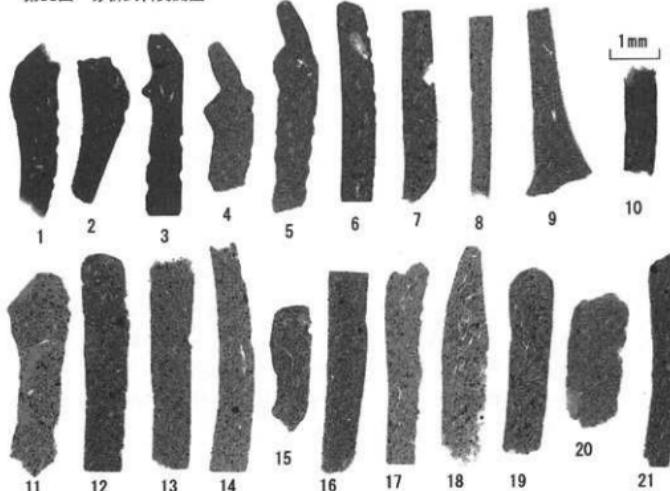
No.3は、花崗岩類が優勢であるが、安山岩・ディサイト<sup>(3)</sup>・変質火山岩類などをわずかに伴う。重鉱物組成では角閃石が卓越し黒雲母を伴う。安山岩は両輝石・斜長石などの斑晶をもち石基は細粒の塊状組織を示す。ディサイトは細粒の石基をもつ。第10表ではG-a群に、第92図ではクラスター4に分類される。金川の最上流部には安山岩が分布している。また三富村から春日居町にかけての笛吹川右岸の山地域あるいは黒富士火山周辺には安山岩とディサイトとが分布している。花崗岩類を主体とする笛吹川流域においてこれらの火山岩の影響が及ぶような地域が産地候補として推定される。在地的土器に類似性の高い中間組成の土器（河西1992,1999b）としてとらえられる。

第9表 土器胎土中の岩石鉱物（数字はポイント数を、十は計数以外の検出を示す）

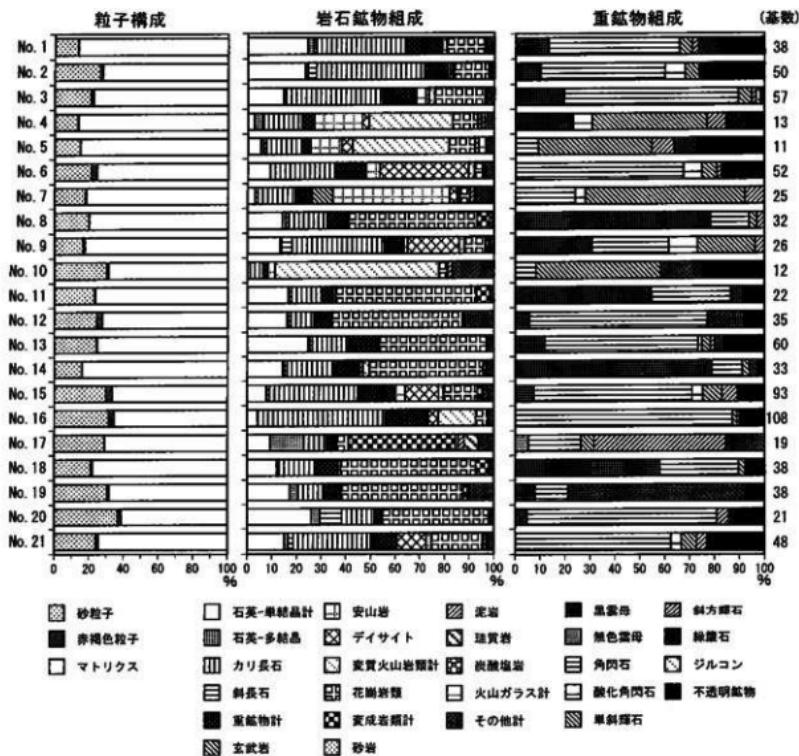
試料番号	時期	型式	分類	部位	注記	内眼観察での特徴・備考
No. 1	縄文後期	加曾利B式	精製有文	胴部	470	江戸土器、細粒磨土、花崗岩類？
No. 2	縄文後期	加曾利B式	精製有文	胴部	428-2	肩盤形、砂多い、花崗岩類多、黒雲母、角閃石。
No. 3	縄文後期	加曾利B式	精製有文	口縁部	495	花崗岩類多、黒雲母、デイサイト。
No. 4	縄文後期	加曾利B式	精製有文	口縁部	687/662	安賀火山岩類。
No. 5	縄文後期	加曾利B式	精製有文	口縁部	606	細粒、花崗岩類、デイサイト？
No. 6	縄文後期	加曾利B式	精製有文	口縁部	72	鉢、花崗岩類、β石英、デイサイト。
No. 7	縄文後期	加曾利B式	精製有文	胴部	339	安山岩類？ デイサイト。
No. 8	縄文後期	加曾利B式	精製有文	胴部	523	花崗岩類多い。
No. 9	縄文後期	加曾利B式	精製無文	底部	295	デイサイト多い。
No. 10	縄文後期	加曾利B式	精製無文	胴部	64	緑色安賀火山岩類+泥岩、粗粒。
No. 11	縄文後期	加曾利B式	粗製有文	口縁部	457/501	花崗岩類、黒雲母、加曾利B2式。粗粒、砂多い。
No. 12	縄文後期	加曾利B式	粗製有文	口縁部	459	花崗岩類が多い。
No. 13	縄文後期	加曾利B式	粗製有文	胴部	638	花崗岩類多い。沈線で大きい破片。
No. 14	縄文後期	加曾利B式	粗製有文	胴部	604	花崗岩類多い。沈線+縄文。
No. 15	縄文後期	加曾利B式	粗製有文	口縁部	789	花崗岩類+デイサイト。
No. 16	縄文後期	加曾利B式	粗製有文	胴部	664/665/668/669	デイサイト。
No. 17	縄文後期	加曾利B式	粗製有文	胴部	480	片岩か？、チャートほか。
No. 18	縄文後期	加曾利B式	粗製無文	口縁部	508	花崗岩類多、黒雲母、泥質岩あるいはホルンフェルス。
No. 19	縄文後期	加曾利B式	粗製無文	口縁部	485-2	花崗岩類多、粗粒、砂多し。
No. 20	縄文後期	加曾利B式	粗製無文	口縁部	20	花崗岩類。土器表面が多孔質感。
No. 21	縄文後期	加曾利B式	粗製無文	口縁部	685	デイサイト、花崗岩類、黒雲母、砂分やや少ない。



第88図 分析試料実測図



第89図 土器断面X線透過写真



第90図 土器胎土の岩石鉱物組成

Nos.15,21は、花崗岩類とデイサイトが多いことが特徴である。デイサイトは黒富士火山の特徴に類似性の高いものが認められる。Nos.15,21は、第10表ではG-d群に分類される。第92図ではNo.15が荒川流域河川砂および荒川合流後の笛吹川河川砂などとともにクラスター-11を、No.21が単独でクラスター-10を形成している。これらのことからNos.15,21の産地は、荒川流域あるいは荒川合流後の笛吹川下流域などが有力な候補として推定される。

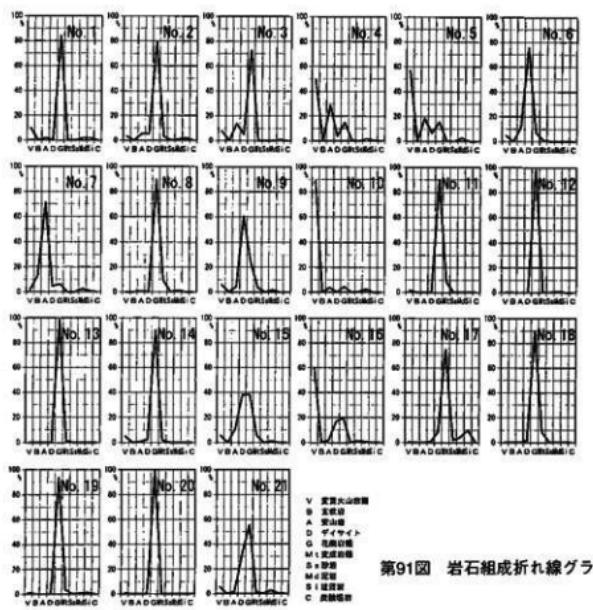
変質火山岩類で特徴づけられる土器 (Nos. 4, 5, 10, 16)

Nos. 4, 5, 10は緑色変質火山岩類が多く含まれる。緑色変質火山岩類は、巨摩山地・御坂山地南部・天守山地・甲府市北部などに分布する新第三系を構成する岩石である。Nos. 4, 5, 10は第92図においてこれらの新第三系分布地域河川砂とともにクラスター-2に分類される。従ってこれらの土器の産地は、緑色変質火山岩類分布地域に推定される。

No.16は、変質火山岩類が多いものの、緑色変質火山岩類は含まれない。変質火山岩類はデイサイト質のものが多く、鉄分の沈着で赤褐色石基の粒子が目立つ。重鉱物組成で優勢な角閃石は比較的新鮮であることから、同様に新鮮な斜長石とともにデイサイト地域の特徴を反映しているものと推定される。甲府盆地においては黒富士火山の影響を受ける荒川・塩川地域などが産地候補のひとつとして推定される。

安山岩で特徴づけられる土器 (No. 7)

No. 7は、新鮮な安山岩が卓越し、玄武岩・デイサイト・花崗岩類を伴う。第10表ではA-b群に、第92図では八ヶ岳周辺地域の河川砂とともにクラスター-18に分類される。八ヶ岳火山などで代表されるような複合火山地域周辺に産



第91図 岩石組成折れ線グラフ

第10表 折れ線グラフによる土器分類

分類	折れ線グラフの特徴	試料番号
V群	変成火山岩類の第1ピーク	
V-a群	頭著な第1ピーク	10
V-g群	安山岩の第2ピーク	4.5
A-b群	花崗岩類の第2ピーク	16
D-a群	玄武岩の第2ピーク	7
D-g群	安山岩の第2ピーク	6
G群	花崗岩類の第2ピーク	9
G-a群	頭著な第1ピーク	1, 2, 8, 11, 12, 13, 14, 18, 19, 20
G-d群	安山岩の第2ピーク	3
M-T-s群	花崗岩類の第1ピーク	21, 15
M-T-s-i群	変成岩類の第2ピーク	17

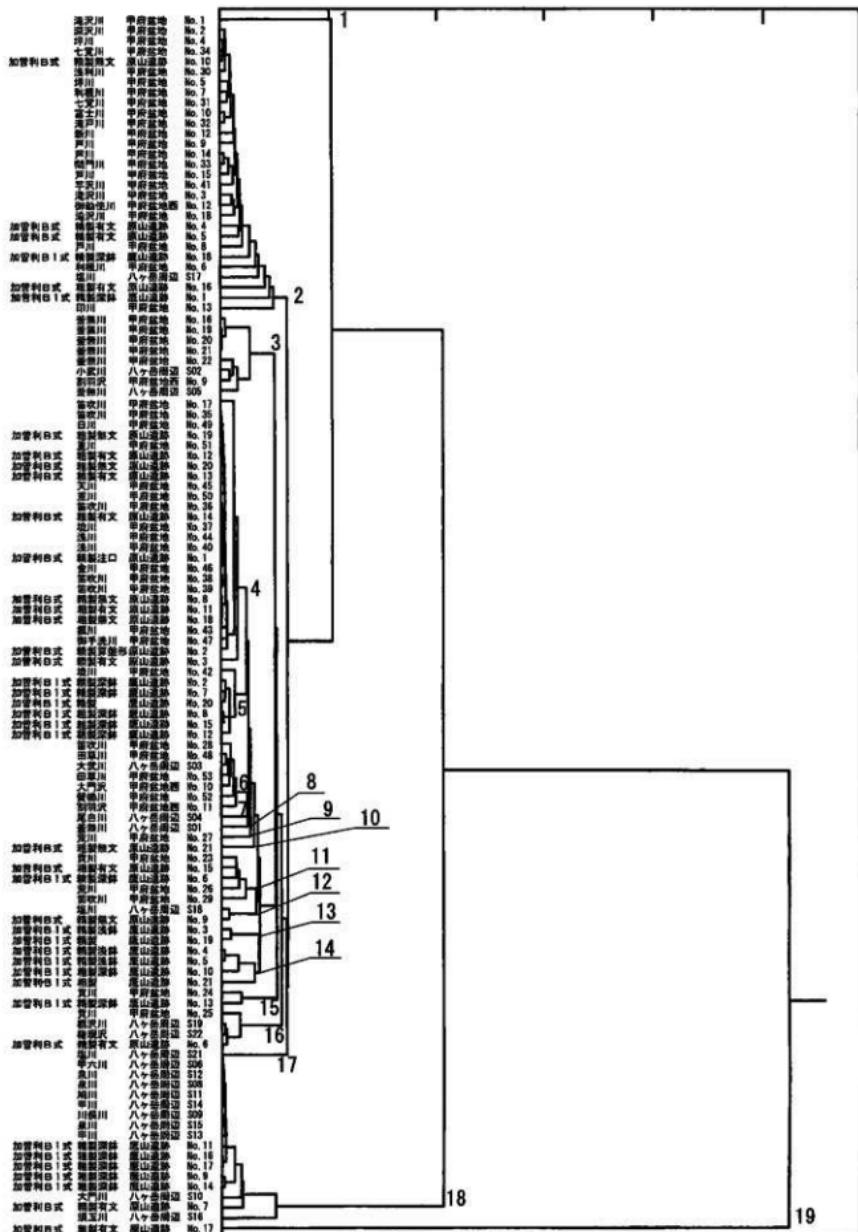
地が推定される。

ダイサイトで特徴づけられる土器 (Nos. 6, 9)

Nos. 6, 9 はともにダイサイトが多く、ともに花崗岩類・安山岩を伴う。ダイサイトは、緑色角閃石、酸化角閃石、オバサイトなどで特徴づけられる。No. 6 は第92図で茅ヶ岳山麓の柄沢川・樅現沢河川砂などとともにクラスター-16 を構成している。No. 9 は第92図で塩川河川砂とともにクラスター-12を形成している。ダイサイトの岩石学的特徴などから黒富士火山周辺地域（塩川・荒川流域）が産地である可能性が高い。

変成岩類で特徴づけられる土器 (No.17)

No.17は、変成岩類が卓越し、珪質岩・花崗岩類・泥岩などをわずかに伴う。変成岩類は、石英・白雲母からなる石英片岩から主として構成されるほか、曹長石の塊状変晶様の粒子やホルンフェルスを含む。斑状変晶様の曹長石はときに細粒の綠簾石・角閃石・不透明鉱物などの包有物が帯状配列（ヘリサイト構造）を示す。多結晶石英が比較的多いがこれは片岩に由来する可能性が高い。単粒のβ型石英・角閃石・斜方輝石などは新鮮で自形を示すことから、おそらく降下テフラなどを含む火山噴出物由來の鉱物であると考えられる。No.17は、第92図で単独でクラスター-19



第92図 土器のクラスター分析樹形図

を形成しており他の土器や甲府盆地周辺の地質とはきわめて異質であり、明らかな搬入土器である。No.17の産地は、長野・静岡・埼玉・群馬県などに分布する三波川帯の変成岩分布地域などに推定される。

## 考察

今回の分析において肉眼観察結果と薄片での分析結果とはかなりの部分で一致している。このことは肉眼観察での胎土分類が有効であることを示している。ただし、肉眼観察で岩石鉱物を同定する際、粒子自体が細粒である場合や微細な内部組織を有する岩石などの場合、識別しにくい傾向がある。肉眼観察でのこの限界性は常に存在するため、薄片による分析結果との完全な一致は困難と思われる。

肉眼観察結果からも花崗岩類を主体とする土器が精製・粗製あるいは有文・無文に関わらずそれぞれ約7割以上を占めている。薄片での分析結果で花崗岩類を主体とする在地的土器が、全体的に多産する傾向が顕著であり、No.17を除くほとんどの搬入土器は甲府盆地内の緑色変質火山岩類を伴う新第三系分布地域・黒富士火山周辺地域・安山岩(八ヶ岳周辺)地域などに産地が推定されている。これらのこととは、甲府盆地周辺地域における縄文中期曾利式土器、あるいは巖山遺跡群星冀峰Ⅱ遺跡の加曾利B1式土器などに見られる傾向と類似性が高い。本遺跡と同じ花崗岩類分布地域に位置する新潟県遺跡曾利式土器の場合、搬入土器として安山岩を主体とする土器とデイサイトを主体とする土器とが報告されており、これらの土器の推定される移動範囲は原山遺跡の場合とほぼ一致する(河西,1992)。巖山遺跡群星冀峰Ⅱ遺跡の加曾利B1式土器では、霧ヶ峰火山・八ヶ岳火山地域内で在地的な安山岩を主体とする土器とその周辺の花崗岩類やデイサイト分布地域などに産地が推定される搬入土器などから構成されて、南関東の縄文後期の土器胎土組成とは異なっている(河西,1999a)。このように地域ごとの地質単位を反映した胎土組成が存在することは、地域ごとの土器製作が行われていたものと解釈できる(河西,1999b)。

No.17は、全体から見るときわめて特異な土器胎土であり、甲府盆地以外からの長距離の搬入が推定される。No.17の示す羽状沈線文は、西関東・山梨・長野・群馬などの加曾利B2-B3式に多いとされることから、おそらく近接する長野・群馬方面からの移動の可能性が推定される。

## おわりに

原山遺跡出土の加曾利B式土器の胎土分析の結果、花崗岩類を特徴とする在地的土器が優占し、さらに緑色変質火山岩類を伴う新第三系分布地域・黒富士火山周辺地域・安山岩(八ヶ岳周辺)地域など甲府盆地内に産地が推定される搬入土器、およびさらに遠方の片岩地域に産地が推定される搬入土器が検出された。

註1 土器の分類について、ここでは精製・粗製および有文・無文を用いているが、型式学的な厳密な意味(例えば阿部,1999)での精製土器・粗製土器とは異なる。土器小片の表面観察で、精緻な「研ぎ調整土器」を精製・粗雑なつくりの「未調整土器」を粗製と分類したものである。

註2 日立メディコ社製文化財X線透視検査装置で、40kV、2mA、照射時間180秒、富士工業用X線フィルム#50で撮影。

註3 ここではデイサイト-流紋岩質の珪質火山岩の総称としてデイサイトを使用している。

## 文献

- 阿部芳郎(1999)精製土器と粗製土器—学史的検討と土器型式による地域認識の問題—。帝京大学山梨文化財研究所研究報告、9、265-284。
- 河西学(1992)岩石鉱物組成からみた縄文土器の産地推定—山梨県新潟堂遺跡・郷藏地遺跡・新坪遺跡の場合—。帝京大学山梨文化財研究所研究報告、4、61-90。
- 河西学(1999a)第1号採掘址出土第Ⅲ群土器の胎土分析。「巖山遺跡群Ⅲ」、巖山遺跡調査団、113-122。
- 河西学(1999b)土器産地推定における在地—岩石学的胎土分析から推定する土器の移動—。帝京大学山梨文化財研究所研究報告、9、285-302。

## 第5章　まとめ

本遺跡の特徴は加曾利B式土器の多量出土である。住居跡等の遺構はなく、人為的に動かされた土層中から出土したものだが、盆地内では4例目と希少な資料である。本遺跡はやせ尾根上にあり定着的な生活よりも交通路の中間にあり、一時的な居住が想定される。そこで、外来産の土器が多いだろうという仮説を立てて胎土分析を実施した。特に注口土器は形態、文様の統一性が高いため、外来の可能性が高いと踏んだ。

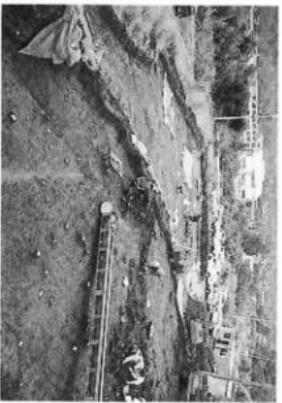
分析の成果は意外なものだった。21点の分析資料の内、10点が遺跡周辺に多い花崗岩で特徴付けられる土器で在地的土器とされた。この他は、在地的土器に類似性の高い中間組成の土器1点、花崗岩類とディサイトが多い荒川流域あるいは荒川合流後の笛吹川下流域の土器2点、変質火山岩類が特徴で巨摩山地・御坂山地南部・天守山地・甲府市北部などが候補地のもの3点、黒富士火山の影響を受ける荒川・塩川流域の土器1点、安山岩で特徴付けられる八ヶ岳火山などが産地の土器1点、黒富士火山周辺のディサイトで特徴付けられる土器2点と、10点が近隣に産地を求める土器である。外来の土器はわずかに1点だけであった。变成岩類で特徴付けられ、分析した他の土器や甲府盆地周辺の地質とはきわめて異質であり長野・静岡・埼玉・群馬などが産地として考えられる搬入土器1点である。

在地的土器は半数を占め、残りの半数が近隣の周辺に産地が求められる土器で、外来土器は1点のみであった。期待の注口土器は在地的土器とされた。原山遺跡で定着的な生活がないとすると金川流域に拠点的な集落があり、そこをベースとした土器づくりが考えられる。その住人の活動範囲の中に原山遺跡が位置付けられていたとみるべきであろう。注口土器などの型式的統一性の強さは、各地の拠点集落間の情報の連絡がきわめて強度であったことを暗示している。土器そのものの行き交いよりも情報・人の行き交いが密であったと想定できる。今回の分析が縄文後期社会の在り方の論議に一石を投ずることを期待したい。

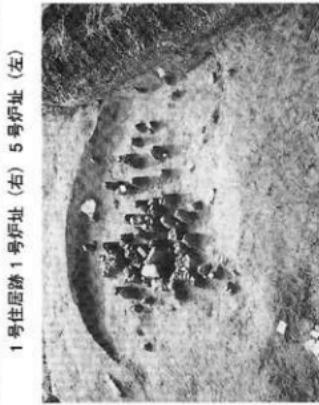
### 引用文献

- 山中一郎1976「様器研究法」「史林」59巻5号  
小堀一夫1979「縄文時代における焼石遺構」「小田原考古学研究会報」第8号  
太田陽子・松島義章・森脇広1982「日本における完新世海面変化に関する研究の現状と問題—Atlas of Holocene Sea-Level Records in Japanを資料として—」「第四紀研究」第21巻第3号  
上田典男1983「縄文時代焼石集積遺構の形態的把握」「物質文化」41  
谷口康浩1986「縄文時代「集石遺構」に関する試論—関東・中部における早・前・中期の焼石集積遺構を中心として—」「東京考古」4  
小野正文1988「山梨県に於ける土製耳飾の予見的考察」「山梨考古学論集」II  
太田陽子・梅津正倫・松島義章1990「日本における完新世相対的海面変化とそれに関する問題—1980~1988における研究の展望—」「第四紀研究」第29巻第1号  
小沢かおる1992「遺跡出土礫のサイズ分布—基礎統計解析とモデル化の試みー」「考古学における計量分析 一計量考古学への道(II)ー」  
福澤仁之1998「氷河期以降の気候の年々変動を読み」「科学」68~4  
今福利憲1999「山梨県内の五頭ケ台式土器」「山梨考古学論集」IV  
保坂康夫1999「縄文時代草創期段階の様器について—山梨県高根町社口遺跡の分析から—」「山梨考古学論集」V  
網倉邦生2000「様器」「桂野遺跡・西馬報遺跡」山梨県教育委員会・山梨県土木部  
網倉邦生2001「桂野遺跡の尖刃様器」「山梨県考古学協会誌」第12号

# 図 版



1号住居跡出土状況（東から）



3号住居跡 (北東から)

9号土坑（西から）



1号土坑（北から）



5号住居跡（東から）



4号住居跡出土状況（西から）



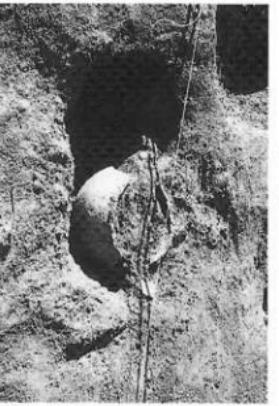
10号土坑（南から）



8号土坑（北から）



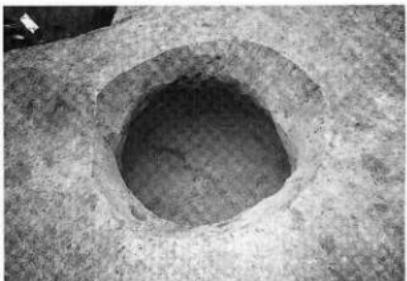
5号住居跡伊址（北から）



図版 4



12号土坑（西から）



17号土坑（南から）



21号土坑上部疊と下部疊（東から）



21号土坑下部疊（南東から）



24号土坑（北東から）



26号土坑（北から）



29号土坑と基準土層（北東から）



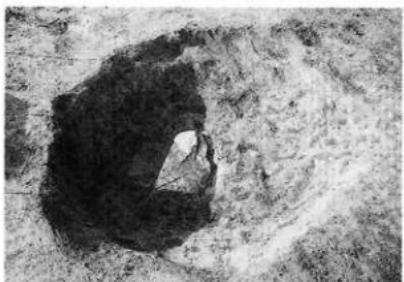
3号土坑（南から）



1号集石（東から）



1号集石底部配石（東から）



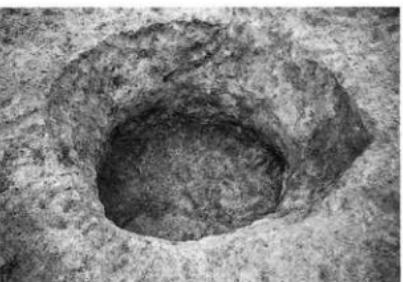
1号集石底部配石下の巨礫（東から）



2号集石（南から）



2号集石断面（北から）



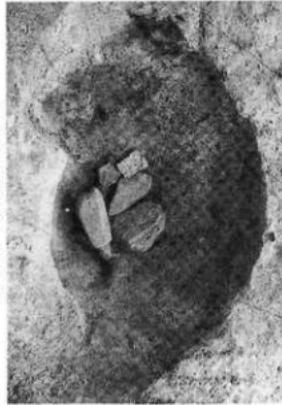
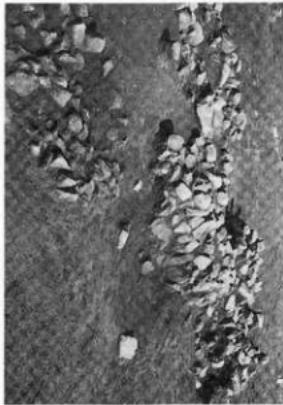
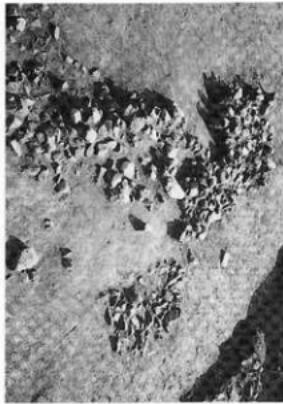
2号集石の土坑（北から）



3号集石（西から）



4号集石（北西から）





9号集石断面（北から）



12号集石（南から）



12号集石断面と埋設土器（南から）



12号集石下埋設土器と周辺の遺物出土状況（北から）



12号集石下埋設土器（北から）



13号集石（東から）

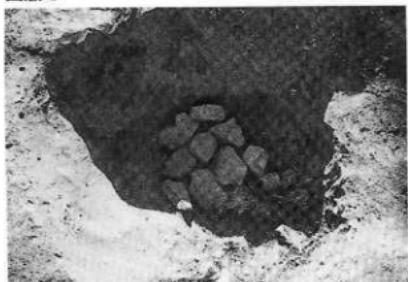


14号集石（東から）



16号集石（東から）

図版 8



17号集石底部配石（東から）



18号集石a（北から）



18号集石b（北から）



20号集石底部配石（東から）



1号住居跡 1号炉址炉体土器



1号住居跡 5号炉址炉体土器



1号住居跡 3号炉址炉体土器



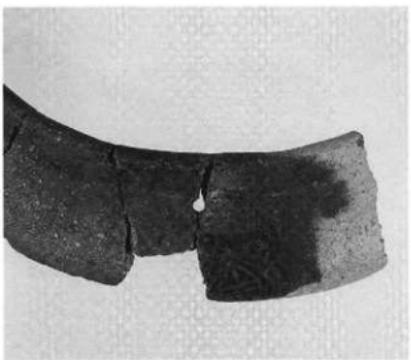
1号住居跡覆土中出土土器



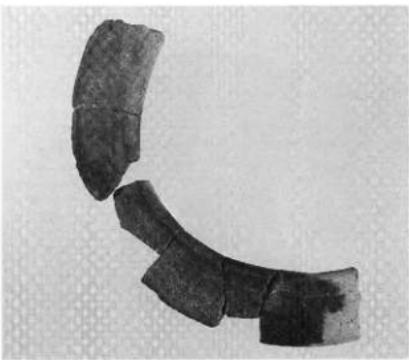
2号住居跡 1号炉址炉体土器



2号住居跡 3号炉址炉体土器

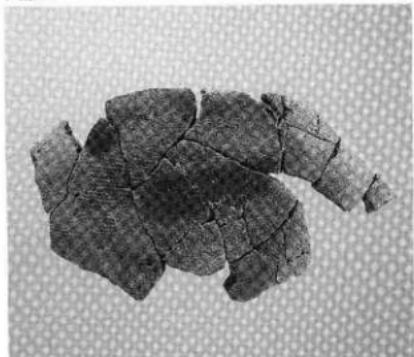


4号住居跡出土彩文土器

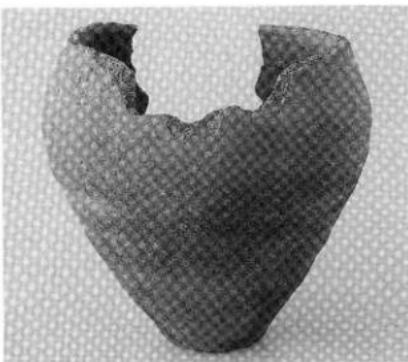


4号住居跡出土彩文土器

图版 10



4号住居跡出土彩文土器底部



5号住居跡炉体土器



6号土坑出土土器



8号土坑出土土器



11号土坑出土土器



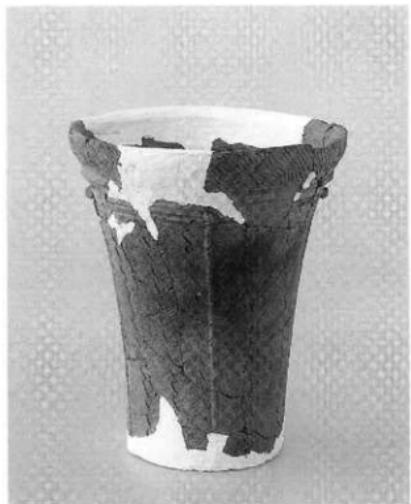
12号土坑出土土器



31号土坑出土土器



44号土坑出土土器



12号集石下埋設土器



1号单独出土土器

図版 12



原山遺跡Ⅰ区調査風景（東から）



原山遺跡Ⅰ区遺物出土状況（南から）



原山遺跡Ⅱ区調査風景（南から）



原山遺跡Ⅱ区調査完了状況（南から）



原山遺跡Ⅲ区調査風景（南から）



原山遺跡Ⅲ区調査完了状況（南から）



原山遺跡Ⅰ区土層断面



原山遺跡Ⅲ区土層断面

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	かつらのいせき (だいよんじ)・はらやまいせき
書名	桂野遺跡（第4次調査）・原山遺跡
副題	国道137号（上黒駒バイパス）建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第199集
編著者名	保坂康夫・河西学・パリノサーヴェイ・池谷勝典
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡都中町下曾根923 055-266-3016
印刷所	(株)ヨネヤ
発行日	2002年3月29日

### 桂野遺跡（第4次調査）概要

所在地	山梨県東八代郡御坂町上黒駒字桂野大道地内 25,000分の1地形図 石和
調査原因	位置 東経138°41'53" 北緯35°36'40" 標高 527~531m
調査期間	市町村コード 19322
調査面積	2000年9月13日~12月12日
縄文時代	3000m <sup>2</sup>
主な遺構	豎穴住居跡5（諸磯b式期1軒、五領ケ台I式期3軒、堀之内式期1軒）、土坑41基、集石20基、単独出土器2個体
主な遺物	土器（縄文時代早期末、諸磯b式、十三菩提式、大歳山式、五領ケ台I・II式、貉沢式、藤内式、曾利式、堀之内1式、加曾利B式） 石器（石鎌、石錐、小型搔器、石匙、打製石斧、砾石皿、スリ石） 土製品（土偶、耳栓）
特記事項	特殊な小型搔器が多量出土。集石が多出。

### 原山遺跡概要

所在地	山梨県東八代郡御坂町十郎字原山 25,000分の1地形図 石和
調査原因	位置 東経138°41'55" 北緯35°31'37" 標高 650~651m
調査期間	市町村コード 19322
調査面積	2001年5月21日~7月9日
縄文時代	1000m <sup>2</sup>
主な遺構	なし
主な遺物	土器（縄文時代早期押形文土器、輪ヶ島台式、諸磯c式、五領ケ台式、曾利式、称妙寺式、堀之内式、加曾利B式） 石器（石鎌、石錐等）
特記事項	加曾利B式のまとめた資料は甲府盆地内で4例目。

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第199集

### 桂野遺跡（第4次調査）・原山遺跡

—国道137号（上黒駒バイパス）建設に伴う発掘調査報告書—

印刷日	2002年3月25日
発行日	2002年3月29日
監修	山梨県埋蔵文化財センター
発行	山梨県教育委員会
印刷所	ヨネヤ

